YUME-DONO ANTHOLOGY

5+2

Written by YOICHI AZUKA

YUME-DONO ANTHOLOGY　Written by YOICHI AZUKA

小説 夢殿作品集 2024
本編 5作品 付録 2作品

著 飛鳥世一

目次

はじめに 1
ショートショート夢殿 (第二形態) 3
夢殿・笑うひと泣くひと (第三形態) 7
小説『 秋 涙』(夢殿第四形態) 15
夢殿『秋涙』令和六年版 (第四. 三形態) 37
小説 夢殿『 秋 涙』完全版 67
小説 夢殿「秋涙」付録作品『なごり藤』. 100
エセー　不染鉄「夢殿」とわたし 106

はじめに

YUME-DONO ANTHOLOGY Written by YOICHI AZUKA

夢殿アンソロジーの世界にようこそお運び頂けました。

令和六年六月九日に書き上げた「秋涙」完全版までを含めた全５作品、付録「なごり藤」とエッセーを収録した作品集。
好きな作品と感じて頂けるあなた様に可愛がっていただければ幸いです。

先日書き上げた付録「なごり藤」が思いの外可愛らしく思えて仕方がなく、どこかのタイミングでのスピンオフ作品を紹介できる日が来ることを妄想し始める今日この頃。すでに妄想は具体的な色彩いを伴い数枚の画としてイメージできるまでになってしまいました。
たぶん。きっとそのうち書くのでしょう。

書かなければ “人間” を書き顕す上で「不完全」なのかもしれません。

書くことができた暁には、またここでお逢いしましょう。

令和六年六月十五日

筆名　飛鳥世一

ｏ０６２９０５００１４６３９２３６０５０.jpg

ショートショート夢殿 (第二形態)

斑鳩の地を濡らす秋の長雨は糸を引くように。伽藍周辺でも季節変わりの雨が途切れることなく降り続く。
　雨水に染まった玉石が、今や濃い鼠色を纏い微動だにしない。

　白地に薄く藍を溶かし込んだ「石」本来の姿は、柔らかな日差しさえあれば、訪れる参詣客の足元、心地よい旋律を奏でるに一役買っていたものを。
　それがこの処の雨が禍 (わざわい) してか、参詣客の足もめっきり遠のいてしまったようであり、一日の大半が「人っ子一人いない」様子を見せていた。
　それでも、こんな折ですら毎日毎日同じ時刻に通い来る者たちもいる。

　信心深く、毎日来る度に必ず手を合わせ、二十分からお参りしてゆく近所の婆様、境内に続く参道の傍らで茶店を営む主人たち。そしてもう一人。午後の三時を過ぎた頃、必ず顔を出す小柄な中老の男。さながら天と地が繋がった合図を思わせるような、雨をおとす空も鼠色に染まり切った中、馴染みが顔を見せに来る。

　経つ刻を忘れるほどに眺むれば仏の教え遷 (うつ) す秋霖。(※筆者)

　九十九 (つくも) に及ぶ白糸が如き雨垂れは、救世観音菩薩の功徳さながら、現世における数多の患い事から救済を試みる蜘蛛の糸にも相似して、時には下から上へ降っているようでもあり、昇ってゆくようでもありという不思議な感覚に陥ることがある。
　無の境地入り口に誘 (いざな) われ「さて、この先どうする。進んでみるもよし、退 (ひ) いてみるもよし」と突きつけられてもいるようで修業の身にはどうにもハッとさせられる。

　玉石の隙間を埋めるように、地面からは雨水が浮かびあがる。雨は間断なく玉石を打つが、雨音は仏性に吸収をみたようだ。
　遠くの方から聞こえてくる、時を告げるチャイムは三時を知らせていた。今また一人の中老の男が、長靴を履き纏わり憑く雨水すら慈しむように伽藍むこうへやってきた。

静かに歩く。気付かぬうちに踵やつま先で雨水や玉石をいじめることがないように。雨水や玉石の身の置き所が変わらぬよう、傷つかぬよう。
と、歩みを止めたと思いきや、膝を折りながら長靴に纏わり憑く枯葉を剥ぎ取り眺めはじめた。
男は、傘の高さまで腕を挙げ伸ばすと枯葉を手放してみせる。濡れていたが故か。揚力を持たない枯葉は、男の手を離れた途端失速をみせ、鼠色した石たちの元へ戻ってゆく。
枯葉を跨ぎ、傘のかかる範囲にしか足を運ばず、静かに歩いてくる。

手を合わせるわけではなく。お勤めをするわけでもなく、何かを願うわけでもない。ただひたすらと傘を手に、こちらを向き、伽藍むこうに佇む。
哭くわけではなく憤るわけでもなく、粗忽を見せるわけでもない。

男の気配がけぶること無き様子からは、間も無くの雨上がりを予感させた。

「また来ているのか、あの御仁　」

「…その様でございます　」

「寂し気よのぉ……　」

「憂鬱が滲んでおりますか…　」

「うむ。しかし救いを求める風ではなし利益 (りやく) を求める風でもなしよ」

「では何故あってこのつめたい秋雨の堕ちる中、通い来るのでしょう　」「…云うてみるなら、そこ元達と変わり映えはない。というところか　」　「…そうかもしれませぬなぁ……　」
「近づいて来ぬな…　」

「…はい。近づいて来ませぬ…　」

「どれ、あかりを灯してみよ　」

「……如何でしょう　」

「うむ…　」

「…近づいて来ぬな　」

「…はい。近づいて来ませぬ…… いつもの様に　」

「そのうち来るだろう。とき、未だ熟せず慌てることは無い　」

「…慌てることはありませぬなぁ……　」

　南の空の雲間、横一条の光明が射す。それはさながら雲を割る如き存在感をみせている。

　男は足元に目をやるや、つま先を器用に使いながら玉石を転がし始めた。転げた玉石はぶつかり合いながら、あらぬ方向へと転げてゆく。猫に弄ばれる小さなネズミが方向を変えながら逃げ惑う姿にも似てみえる。

　傘を持つ手が足の動きに呼応をみせ、時折大きく右へ左へと揺れをみせる。踊っているようにもみえ、踊らされているようにもみえた。

「あやしておるわ」

「あやして、おるのでございますか。誰をでござ……　」

「… 寂しげよのぉ……　」

「はい。寂しげにございますなぁ…　」

　帰途につくのか。男は、細く絞った秋雨のなか背中をみせた。

　南の空から射し込んだ光明が濡れた男の背中を照らし出す。

　温かく、柔らかであり、この世の患いの凡てを癒す功徳を授けるように。

　今日も又、手を合わせるわけではなく。お勤めをするわけでもなく、何かを願うわけでもなく、男は静かに夢殿を後にした。

夢殿・笑うひと泣くひと (第三形態)

斑鳩の地を濡らす秋の長雨は糸を引くようだ。伽藍周辺でも季節変わりの雨を途切れることなくみせている。雨水に染まった玉石は濃い鼠色を纏ったまま微動だにせぬ。

柔らかな陽ざしさえあれば、白地に薄く藍を溶かし込んだ「石」本来の姿は訪れる参詣客の足元で、心地よい旋律を奏で聞かせるに一役買ったはずである。さながら天と地が繋がった合図を思わせるようで雨をおとす空も同じ色か。

「経つ刻を　忘れるほどに　眺むれば　仏の教え　遷す秋霖」

九十九 (つくも) に及ぶ白糸が如き雨垂れは救世観音菩薩の功徳さながら、現世における数多患い事からの救済を試みる蜘蛛の糸にも相似して、時には下から上へ降っているようでもあり、昇ってゆくようでもありという不思議な感覚に誘われることがある。

法性の学び入り口に立たされて「さて、この先どうする。進んでみるもよし、退いてみるもよし」と、突きつけられてもいるようで修業の身には些かハッとさせられる。

私がここに坐してどれほどの月日が経とうか。幾度の秋を迎え送ったことだろう。秋雨に眺め入ると現と夢を行き来する。鼠色に変容をみせた玉石の隙間を埋めようとでもするのか、地面からは雨水が浮かびあがる。雨は間断なく木立や伽藍、地を打つもののここを取り巻く仏性が幸いしてか静寂に馴染みをみせていた。

今また一人の中老男がいつもの様に憂鬱を滲ませ長靴を履き、纏わり憑く雨水すら慈しむように伽藍むこうへやってきた。

この男、名を不染鉄というそうであり、どうやら画を生業とでもするのか足しげく通い来ては法隆寺や夢殿の画を描いていた。

お師様の御言葉によると、東京小石川 (現在の文京区) にある浄土宗の寺、光円寺の住職の倅であるということではあったもののそのくせ背筋の伸びたところは覗えない。時

折地元の女子大学生数名を従えてくることもあったが、その気配、引率からは甚だ遠くいつも俯き加減に歩く様子からは引率されている気恥ずかしさと按配の悪さが滲んで見えた。

「おぉ、今日も来たか」

「はい。今日も来たようにございます」

　何やら、心なしか待っていた如く聞こえるのは気のせいではないと感じられた。

　降り続く雨模様も手伝ってか確かに訪れる参詣者は少ない。それでも毎日通い来る者もいないわけではない。近所に住まう信心深い質屋の婆様しかり、境内に続く茶店の主人ども。
　博打にでも行こうとするのか、数人で連れ立って来ては賽銭を放り込み、柏手を打ってゆく埒なき者ら。それぞれに、それぞれの願いを届けにやってくるのである。

「…うむ。どうやら今日もこれと変わりはないか。何よりよ」

「…お師様には、随分お気に留めておられるご様子」

「悲しそうではないか。今にも泣き出しそうに見えてのぉ」

　何故お師様は泣き出しそうなあの者を見留め嬉しそうにしておられるのだろう。別に意地の悪さをみせているわけではないだろうに。

「憂鬱が見えますか。今日も画は描けぬのでしょうなぁ。ここ三日ほどは手ぶらで通い来てありますゆえ」
「画か……　道詮、そこ元は覚えておるだろう。まだ私が木綿布でグルグル巻きにされていた頃のことを。もう何年になろうか」
「……今が昭和という元号の四十二年だそうですから、あの異人の手による開廟から八三、四年も過ぎました頃にございますか。忘れよう筈もございません」
「もうそんなになるか……　よう笑う御仁だったのぉ、あの異人」

「はい。祟りを畏れた寺の僧たちが、みな蜘蛛の子を散らしたようにその場を離れる様を見て、雷も落ちぬ火も出ぬと大笑いしておりました……　」「そうであったのぉ。確か

あの御仁も画業に精通していたはずであるが…　」
「はい。何やら東京美術学校なる学び舎を作るにも奔走し、副校長の職にもあったと聞こえておりました。あの時、ともに来ておりました岡倉天心なる者が校長を務めていたという話でございました」
「道詮、そこ元はいまだ現に明るいようだのぉ」

　お師様はからかうように、されど慈愛あふるる笑みを湛えみせると憂鬱を滲ませ向こうを歩く中老男を見やった。
「お恥ずかしい。ただ…　恩人ですが故のこと」

「うむ。この国はその恩をけして忘れてはならぬのう…　」

「はい……　」

　そう。あれから八十年以上が経ったのか。早いものだ。あの折は明治と云われる元号だったか。
　確か、明治は十七年初夏の昼下がりのこと。

　お堂前が俄に賑やかとなりだし、何やら押し問答をしている様子が堂内まで伝わってきた。修行の僧どもが徒党を組み堂前に人垣を作ったであろうことは、扉障子に映り込んだ影からも窺い知れた。盛んに「祟り」の言葉を口にしていたのを聞くと、どうやらこの『夢殿』を開けようとしているらしい。二百数十年の時を経て陽の目を拝むというのも何とも楽しみであり、「それ頑張れ、やれ開けろ、負けるな」そう願ったことを想い出すと己が修業の足りなさを反省もし情けなくも思ったことを思い出す。
　さぞかし錆びついていたであろう錠前を、ガチャリガチャリと解錠しようとする音が堂内に響く。扉もガタガタと震えていた。修行の僧と思われる「どうかお待ちください」という懇願空しく程なくすると鍵が解かれ扉が開けられた。
　寺の僧どもは祟りを畏れ誰一人として開扉の前にはいなかった。逆光でよく分からぬが三人の男が立っていることだけは観えた。
　男達は開け放たれた扉口で靴を脱ぐと草履を取り出し履きはじめた。

　「入ってくるのか……」そう考える間もなく三人の男は堂内に歩みを進めると行燈片手にうろつき始める。
　なんと、一人は日ノ本の青年だったがあとの二人は異国の者ではなかったか。肌色は白く、髪の毛は行燈の明かりを吸ったように金色の艶を放っており、暗がりに映える顔つきは、ぼんやりとした明かりが顔の影を作り出しているのだが、その鼻の影の大きさ

に驚いたものだった。

　中には一人ぐらいは居るものである。怖いもの見たさが勝った者が。

「諦信殿、諦信殿、どうか、それ以上は……　」扉の外、若い修業の僧が声を潜めて押し留めている風ではあるが、その声は震え、今にも泣きだしそうな具合をみせていた。
【諦信とな、さてこの日ノ本の青年、坊主か出家の身か】

　異人が何やら喋りはじめたのは良いがさっぱり要領を得ぬのも当たり前のこと。

　後を引き取るように青年が話し始めた。

「諦信先生は、祟りの心配はなく、雷も火も心配ないので堂内へお進みくださいと申しています」
　なんと諦信という法名を名乗っているのは異国の者ではないか。

　この男が日本政府によってアメリカから招かれたアーネスト・フェノロサであり、この国の仏教と信仰、美術・芸術を守るため東奔西走していたことは後になって知ることとなった。
　三井寺法明院は桜井敬徳和尚から諦信なる法名を授かり、改宗まで果たす熱量には後にお師様も厚く関心を寄せておられた。重ねては、狩野派の狩野永悳より狩野永探理信なる画号を持つことを許されたというからどれほど才長けた御仁であろうか。

　三人の闖入者は仏殿の裏へと回り込むと身の丈七尺に届こうという長物包みを眺めはじめ何やらヒソヒソとやっていた。
「諦信殿、どうかお待ちください。どうかそれだけは、お留まりください」【ほう。ついに解かれるか。二百数十年の時を経て、お師様がその御姿をお見せになられるのか。一二一代管長・千早定朝の姿がみえぬということは了承済みか。ことは上からの流れなのだろう】

　厳重に木綿布で包まれてはいたが、雨漏りが禍したものか所々腐っているではないか。お師様の足であられるのか鼠が齧ったような跡も見られる。【とは言うたもののこの木綿布、随分長持ちしたものである。二百数十年である】

鼠の齧った跡がその出入り口であり餌取り場となっていたものか、人の気配にあてられた大きな青大将がお師様の足元破れ目から顔を覗かせると、胴をくねらせながら暗闇に逃げ込んでいった。
いつの間に来たのか、数人の修業の僧たちが扉口から顔を覗かせ止めに入る言葉を口にした。他の者達はみなお堂の下から遠巻きに見守っている。
木綿布に男たちの手が掛かる。「止められぬ」と観念したのか、僧たちは一様に宝珠を手に合掌し観音経を唱え始めた。
一枚、また一枚と木綿布は外されてゆく。

僧たちは多様を見せた。泣く者もいた。空を見上げ、天変地変に怯える姿もあった。握りしめた拳を腿の前で組んでいたのは怒りなのか。仲間の僧侶の袖を掴む者もいた。
数人の坊主が伽藍向こうで剃髪頭を寄せ合って何やらヒソヒソとしておると眺め観れば、懐から金を取り出し、一人の坊主に渡している。どうやらあの坊主が勝ったのか。

二百数十年という年月はそれぞれの中、始末のつけようもなく多様を見せるに至ったのだろう。
立ち合い僧たちの読む経がひと際大きく堂内に響くと、お師様を包んでいた布ははらりと床に落ちた。三人の男たちは一様に固唾をのみ立ち尽くしたままではあったが、諦信と呼ばれた異人がその場に膝をつき手を合わせるや、他の二人もそれに倣い膝をつき手を合わせ一様に首を垂れた。三人ともが涙をみせ手を合わせていた。
救世観音菩薩立像が二百数十年の時を経、神々しい御姿を顕された瞬間だった。後に、この者たちの働きが奏功を見せお師様は修復されその後この夢殿にお帰りになられた。
諦信と呼ばれ、英名、アーネスト・フェノロサと呼ばれた男はその後も何度もこの地を訪れ、法隆寺に伝わる宝物美術品の保存によく務めた。大きな口を開けよく笑い、心優しくあるものの己が信念に忠実であり語るべき言葉を持った男と映った。
【そうか。あれから八十年以上の月日が流れているのか……　同じく、画業に通じ仏の道とも通じているはずのこの不染鉄という男。さて、何がこの男の憂鬱を裏打ちしているのだろうか】

憂鬱を抱えし中老男は静かに歩いてくる。気付かぬうちに踵や爪先で雨水や玉石をいじめることがないように。雨水や玉石の身の置き所が変わらぬよう、傷つかぬよう。と、歩みを止めたと思いきや、膝を折りながら長靴に纏わり憑く枯葉を剥ぎ取り眺めはじめた。
男は傘の高さまで腕を挙げ伸ばすと枯葉を手放してみせた。濡れていたが故か。揚力を持たない枯葉は男の手を離れた途端に失速をみせ、鼠色した石たちの元へ返ってゆく。
枯葉を跨ぎ、傘のかかる範囲にしか足を運ばず、静かに歩いてくる。手を合わせるわけではなく。お勤めをするわけでもなく、何かを願うわけでもない。ただひたすらと傘を手にこちらを向きむこうに佇む。

哭くわけではなく憤るわけでもなく、粗忽を見せるわけでもない。

気配がけぶること無き様子からは間も無くの雨上がりを予感させた。

「どうにも、寂し気よのぉ……　」

「そうでございますなぁ」

「ふん。しかし救いを求める風ではなし、利益 (りやく) を求める風でもなし」

「では何故あって、このつめたい秋雨の堕ちる中通い来るのでしょう」

「分らぬか。八十数年前のあの男も一緒じゃよ。心から愛するものの末期に触れた者は、どの道どちらかを抱えみせる。笑ってみせるか、泣いてみせるか。生きることとはその生き様をみせること。抱え持ったものに変わりはないのだよ」
「……　はい」

「近づいて来ぬな…　」

「…　はい。近づいて来ませぬ」

「どれ、あかりを灯してみよ」

「……　如何でしょう」

「うむ……　近づいて来ぬか」

「近づいて来ませぬ、いつもの様に」

「そのうち来ようか。未だ熟せず、慌てることも無い」

「……　慌てることはありませぬなぁ…　」

南の空の雲間、横一条の光明が射す。それはさながら雲を割る如きの異形を想わせた。
男は足元に目をやるや、足でそっと玉石を転がしながら弄はじめた。

　コロン、コロン、カチン、転げた玉石はぶつかり合いながらあらぬ方向へと転げてゆく。何やら生きているようでもあり、人の一生を見せられているようでもあり……　と思えた。
　傘を持つ手が足の動きに呼応をみせ、時折大きく右へ左へと揺れをみせる。踊っているようにもみえ踊らされているようにもみえる。

「あやしておるわ」

「あやしておる…のでございますか。誰をでござ……　」

「……　寂しげよのぉ…　」

「はい…　寂しげにございますなぁ…　」

　帰途につくのか。男は細く絞った秋雨のなか背中をみせた。南の空から射し込む光明が濡れた背中を照らし出す。温かく、柔らかであり、この世の患いの凡てを癒す功徳を授けるように。
　今日もまた、手を合わせるわけではなく。お勤めをするわけでもなく、何かを願うわけでもなく……　男は静かに夢殿を後にした。

　二百数十年ぶりの御開廟から八十数年の時を跨ぎ、守った者は笑い顔を見せ、伝え残す夢殿を描いた者は泣き顔をみせる。人々の信仰のあり様はこの斑鳩の地に今も息づいている。
　数多の想いに支えられながら。

「道詮、晴れたようよのぉ……　」

「はい。お師様。いい按配にございますなぁ…　」

了

小説『 秋 涙』(夢殿第四形態)

その一　満と数えのいろは坂

　その画は、法隆寺の夢殿さんと云われ親しまれてきた八角円堂を描いたものでした。三重県のお伊勢さんと並んで、一生に一度は訪れる地として称される奈良県は飛鳥地方にある法隆寺。その境内 (けいだい) 伽藍 (がらん) の一つ、夢殿・八角円堂の建設発願者は聖徳太子さんです。「お太子さま・お太子さん」と親しむのは、何もこの町に住む者に限ったことでは無いようで、毎年、一月の二十日を過ぎた頃でしたか、全国の太子堂を持つお寺さんでは聖徳太子をお祀りした太子講が催された様子なども新聞を介して伝わります。

　お太子様の寺づくりに由来されるのでしょう。建築建設に携わる会社や職人さん、物作りを生業 (なりわい) とする職人さんたちの間では、揃って無病息災職場安全を祈願し、お太子さんの遺構を称える勉強会も受け継がれているようです。
　人々が暮らす上での様々なまつり事を語る上でも、切っても切り離すことのできないお人であり場所であり…　。画は、そんな聖地とも云えそうな夢殿さんを描いたものでした。
　実はね、私この画を知っているのです。

　いえね、正しく申し上げるのなら、描いたお人と描いていた時期を存じているのです。だってね、描いているときに傍で見ていたのですから。

　今こうして目の前で、出来上がったこの画を鑑 (み) ていますとね、それはそれは昨日のことのように鮮明に思い出されてくるのです。めんどくさいことや都合の悪いことは忘れることが出来るようになってきました。昨夜の夕餉 (ゆうげ) の献立すら忘れていられるのに、この画のことは忘れないのが不思議でした。
【あぁ…　もしも忘れてしもうたらどないしよ、寂しいなぁ…　寂しいことを忘れてしまえりゃ随分と生きやすいんやろうけど、中々そうは問屋も下ろしまへん…　】

だって、夢の中まで出てきはるぐらいです。

これがほんまの夢殿ですわ…　。

　この画を描いているお人の姿かたち。下絵を描く、鉛筆を走らせる白く細くしなやかな指の躍動感。下塗りというもののようです、水に薄っすらと色が着いた程度に暈 (ぼ) かした絵の具を塗る様子からは、とてもこんなに美しい画になるとは想像も出来しまへんでした。
　不染 (ふせん) 鉄 (てつ) 作・夢殿　完成披露の展示会がこうして法隆寺本堂で行われ、私は幸いにもその完成した画を鑑ることが出来ました。
　冥途 (めいど) の土産なんていう例えがありますが……　、どうでっしゃろう。この歳まで逝 (い) かせてもらえなかったのは、ご褒美だからこの画を鑑てからにしなさい。そう、観音様に云われているようにも思えたもので……　。

「お千代さん、あんたやっぱり来てはったん？　　体の按配 (あんばい) はもうええの？
　大事にせにゃ、あかんよ、あら……　今日は、松枝 (まつえ) さんも一緒なん？　　ほな安心やわ良かったねぇ」
「はいな、ありがとねぇ……　お里ちゃんも元気そうやね。きょうは亜由美さんもご一緒な。まだまだ寒いから、体を冷やさんといてねぇ……　お腹のお子にさわったらあかんから」

　隣町の古道具屋 (ふるどうぐや) の古女将 (ふるおかみ)、お里も来ていたようです。高々 (たかだか) 二つほど若い、かぞえで九十二才というだけでこのいいよう。云うたところで目くそさんが鼻くそさんを笑うようなものでございますのに。私の心配はさておき嫁や孫嫁の癇癪 (かんしゃく) 取りしてあげなはれ。お前さんが未だに商売にも口を出すものだから、嫁も付き添いの孫嫁も癇癪が溜まっていると愚痴をこぼしているのも評判やないの……　。
　そんなことを考えていますとね、まるで見透かしたようにお里のところの孫嫁は始末が悪そうに会釈だけを見せました。
　うちの松枝がお里の孫嫁と言葉を交わしはじめた頃合い「ほれ、行くよ」と催促するとスタスタと一人で歩いてゆきます。
【本当に子供のころからそうでしたが、お里の足腰の丈夫さと口の達者さには驚くばかり。道具屋は、目が利いては商売にならぬの例えがあるけれど上手を云うたもの。

そうそう、むかーしこんな話がありました…　。

うちのお店に古着を持ち込んだご近所はんがいはってね、これでなんとか五十銭貸してくれと云うのです。その様子は、当時十二歳の私でも分かるほど、何かいつもより居丈高 (いたけだか) に映りました。大方はね、質草 (しちぐさ) もって質屋に行くときは、少しこう…　肩をすぼめて暖簾 (のれん) をくぐるのが当たり前の風景でしたから、子供ながらに何をこの人はこんなに威張っているのだろうと思ったものです。

店番の母は、そんなには貸せない。これぐらいで持ってお行きなさい…　そういうのですが、頑として引き下がりません。母は何かの事情や理由があるのだと思わはったのでしょう、なんでそんなに自信があるのか、どう見てもそこらの呉服屋さんの店先もの。そういったのですが……、するとそのお客はんが云わはりましてん。

「ちゃうがなぁ、向こう町の古道具屋の前を通りかかったらな、あっこのおちびちゃん、お里いうたかいな、ほれが、店先に出とってな、偉いなぁ、お手伝いかいいうたら、おっちゃん…　この服な買うてって損はないで云うやないか。わしが、なんでや？　　そんなあほなことあるかいないうたらな、なんでかいうたら、買うてまたそれを売ったらええねん。お千代姉さんのとこやったら、キッチリ値打ち通りにみてくれはるやんか、おっちゃんは買うて損するどころか、儲けがでるちゅう仕組みやねんな～　。そういいよる。これまた、はしこい子やないのよお…　せやから、買うた値段以上で預かってもらわにゃ、わしゃ損するがな、こんなん持って帰ったところで、一人もんのわしにどうせっちゅう話しやねん」

なんと売り付けたのはお里だったようです。お客はんはその口上の余りの巧みさと、お里の人たらしの術中にはまってしまったようでした。

この時、確かお里は満で九つぐらいだったはずです。わたしはお里の逞 (たくま) しさに驚き、なんという利発な子だろうと思ったと同時に末恐ろしくさえ思ったものでした。ただ、母は違ったようです。この話を聞くや否や、持って帰るか、お店の言い値でおいてゆくか、さぁ、どっちになさいます…　と畳みかけたのでした。

お客はんはその剣幕に驚きはったんですやろなぁ、渋々母の言い値で預けてお帰りになりました。暖簾を右手でパシッと叩 (はた) き、肩をすぼめて出ていかはった姿は来た時とは対照的に映りましてん。

母は預かった質草を前にすると大切そうにブラシを当て綺麗に折りたたみ、虫よけのショウノウを挟むと飴色に艶をみせる大きな柳行李 (やなぎこうり) に仕舞いながらこういうのでした。

「この箱はね、預かりものやけど…　多分引き取りには来ない人たちのものだからね、将来、お千代にあげるからね…　」と。その行李の横腹には、十二月十二日火の用心と墨で書かれた短冊がボロボロになりながら張り付いてましてん…　】

そんなことを思うと知らぬうちに懐かしくて頬と口元が緩みますねんなぁ。

◆

「お義母さん、大丈夫ですか、少し座って休みはったらどうですの？　」次男の嫁の松枝が私の手を取りながら声をかけてくれます。
「うん。大丈夫よ。もう少しだけお前の体を掴 (つか) ませたってな…　もうちょっと鑑ていたいから…　」
「はいはい、じゃぁここの腰のベルトの処を掴んで下さいな…　」松枝はそういうと、コートの裾をまくり上げるとベルトを出して私の手を掴んで導くのでした。
　私と歩く松枝は踵 (かかと) の高い靴を履く処を見たことはありません。いつも、踏ん張りの利きそうなペッタンコの靴ばかり。そして立つときはお相撲さんのように股を開いて踏ん張るのです。
　その姿は、新婚旅行で行った高知桂浜の土佐 (とさ) 犬 (いぬ) の土俵入りのようでしたから、摑まっている私は随分可笑しいやら申し訳ないやらの思いで眺めるのが常でした。

「松枝はん、あんた幾つになりはったん？　」

「何ですの急に」松枝はそういうと口に手を当てながらワッハハと大笑い。

　人目も憚らずという言葉がありますが、私は松枝のチョイと後ろから手綱 (たづな)(ベルト) を掴んでいましたから、傍から見ればそれはさぞかし面妖 (おかし) な光景でしたやろう。私達の横を通り過ぎていかはる招待客の皆はんが、その光景を眺めニコニコしながら頭を下げていかはります。
　私は松枝の手綱を握ったままそれをグイグイと左右に振り、小声で「チョット、松枝はん、笑い声が大きんとちゃうの、もう少し声を落としなはれ。みんな見ていかはるから」
　通り過ぎてゆくお人の殆どが顔馴染みいいますか、お知り合いみたいな方たちばかり。中には心やすくお声を掛けていかはるお人もいらっしゃいました。会場のあちらこちらでお辞儀が大流行りです。

　画をめでる会ですから言うまでもなくみんなお喋りは小声です。

　そこに土佐犬さんよろしく踏ん張りをきかせた松枝。後ろから手綱を引き締めた強力(ごうりき) の私。手綱 (たづな) を横に振る姿はまるで犬を落ち着かせるための仕草にも見えたかもしれまへん。
「お義母 (かあ) さん…　あんまり横に振るとお腹の皮が擦れて痛いですやん」というと口を尖らせ斜め後方の私を見ました。すると、また噴き出して笑い始めたのです。余程、私の顔が恥ずかしそうにしていたのでしょうか「はいはい、ごめんごめん」というと、松枝は正面を向き直り「ちょっと前に六十三になりました…　あっ、満でね、満で」というのでした。「ほな、数えでいうたら…　」私がそこまでいうと、松枝は「はいはい、六十五です」と先に回っていうのです。
「お義母さんのその癖は治りしまへんなぁ…　」松枝は優しそうな笑顔を見せると振り返りながらそういうのでした。
「せやなぁ…　自分の歳云うときは満でしかいわへんのに、人の歳聞いたあと必ず満か数えか確認するものなぁ…　」
「そうそう…　でもね、その気持ち私も分かる様になってきましたわ」

「そうですやろう…　そうなってきますねんて…　私、観音さんにも歳聞くと思うわ…　」
「お義母さんのことやから、多分、数えで教えてやって云いはるんでしょうなぁ…　」
　松枝はそういうと首をすくめてみせるのでした。

　次男の雄介は四十八歳の年 (とし) に労咳 (ろうがい) を患い早逝。二十歳の長男を頭(かしら) に、十七歳の次男、十五歳の長女と残したままの鬼匣 (きばこ) いりでした。
　親より先に逝くとはなんと親不孝…　そうも思ったものです。せやけど一番しんどい思いをしてたのは嫁の松枝でしょう。
　子供三人を抱えて松枝も悩んだ時期もあったようでしばらくは夜になると一人泣きしていたのでしょう、朝には泣き腫らした目を伏せながら、子供たちの準備をする姿が見られたものでした。突然残され、まるで放り出されたように、何から何まで自分でやらなければならなくなりました。家業の質屋は早逝した雄介が継いでくれていましたから、松枝は嫁に嫁いできていたものの雄介が他界した後はやはり心細かったのでしょう。
　しばらくはかける言葉にも苦慮したものです。それでも孫三人も、今ではみんな立派な釜戸 (かまど) 持 (も) ち。その中の長女が家に残り、入り婿を取ってくれたのでした。
　そんな私も早くに主人を亡くしてましたから、松枝の気持ちや大変さは痛いほどわかったものでした。

その二　錫 (すず) メッキのブリキ缶

この画を眺めていると、描いてはった情景までも思い浮かべることが出来ますねん。
それは去年の秋のこと…　昭和四十一年の九月も半ばを過ぎた頃…　。

毎年のことやけどなぁ、斑鳩の地を濡らす秋の長雨は夢殿さんを朧 (おぼろ) の中に包み込みますねん。伽藍周辺さえもけぶるようにうつります。
境内に敷き詰められた玉石は水にふやかした黒豆さんの様子を見せながら、伽藍の一部になったようにピクリともしまへん。
中秋の柔らかな陽ざしさえあれば、白地に薄く藍を溶かし込んだ石の姿は、訪れる参詣者の足元に心地よい旋律を奏で響かせるに一役買ったことでしゃろう。

さながら天と地が繋がった合図を想わせるようで、雨をおとすお空も同じ色を見せています。それは黒豆さんをふやかした後の水で塗りつぶしたようですねん。

太く、切れ目なく堕ちる雨垂れは、吉野の平宗 (ひらむね) さんの葛 (くず) きりをお空から突き出したようにみえ、それは救世観音菩薩の功徳の顕しのようにも思へ、数多 (あまた) 患い事 (わずらいごと) からの救済を試みる蜘蛛の糸にも見えるようで、時には下から上へ降っているようでもあり、昇ってゆくようでもありと映るのです。
まるで足元から踏み板を外されたように、心細く頼りなくも感じられます。

「お千代。さて、この先どうする。進んでみるもよし、退いてみるもよし」と突きつけられてもいるようで、些かハッとさせられたものでした。

【あぁ…　何でしょう、思い出したら平宗さんの葛きりが食べたくなってきましたよ。こんな歳になっても食べたいは衰え知らぬもののよう。あぁ…　今夜の夕餉は平宗さんの柿の葉寿司にしましょうか。松枝と帰りに買ってゆきましょうか…　】
私がここにお参りに来るようになってから幾度の秋を迎え送ったことでしょう。秋雨に眺め入ると現 (うつつ) と夢を行き来するようで些 (いささ) か心もとないのでございます。
境内を埋める玉石の隙間は地面からの雨水が浮かびあがっています。雨は間断なく木立や伽藍、地を打つものの、境内を取り巻く仏性が幸いしてるのでしょう静寂に馴染み

をみせているようです。
　今また一人の老男がいつもの様に長靴を履き、纏わり (まとわり) 憑く (つく) 雨水すら慈しむように、伽藍むこうへやってきました。

　この御仁、名を不染鉄というそうで、どうやら画描きを生業とするそうで足しげく通い来ては法隆寺や夢殿の画を描いてはったようです。境内で顔を合わせるようになってから既に四十年が経ちましたか。毎日毎日、雨の日も風の日も片道一里半 (６キロ) の道のりを歩いて通っていたようです。
　しばらく見かけぬなと思へば、長野に行っていたと善行寺土産を私のお店まで届けてくれる心優しきお人…　私が数年前に大病を患ってからというもの、顔を合わせるたびに私を気遣い声をかけてくれるのですが、どうにも私よりも鉄さんの方が儚 (はかな) げな按配を感じさせるのでした。

　聞く処によると、東京小石川 (現在の文京区) にある浄土宗の寺、光円寺の住職の倅ということではあったものの、そのくせ背筋のシャンとしたところは覗えず、とても仏の道と近いとは思えなかったものです。
　ところが人は見てくれではわからないものでございます。話は聞いてみなければわからぬもの。なんでも昭和のはじめ頃には僧侶になるための検定試験である、律師なる試験も修めていると聞かされたのには随分驚かされたものでした。

　第二次大戦後の混乱期には女学校の校長も務めていたようで、とき折、地元の女学生数名を従えてお参りする姿を見受けたものの、境内で私を見つけた途端、その気配、引率からは甚だ遠く俯き加減に歩く様子からは、引率されている気恥ずかしさが滲んで見えたものでした。
「よう降りますなぁ……　」

「はい。本当に……　」

　どうということもない当たり前の挨拶が毎度のこと交わされます。

　鉄さんは風呂敷包を開くと道具箱を取り出しイーゼルを立てます。そこに古新聞で何重にも挟み込んだ画紙を置くと画を描き始めました。粗末な空き缶を降りしきる雨の下に何個か並べますと、立ちどころに仏性がかき消され缶を打ち付ける雨音が広がります。
　缶の大きさがそれぞれ違うせいでしょうか。凡ての缶から流れる音が違うのです。
それはまるで声明 (しょうみょう) のように境内に響きました。

【あ…　、かき消されたと思った仏さんの声は姿を変えただけなのだ、缶を打つ雨音さえ愛おしく思えるのは、観音さんの成せる御業 (みわざ) なのでしょう…　】
カン、キン、コン、カチャ、ヒチャ…　缶の中に水がほどほど溜まりだすと音が止みはじめます。
雨のかからない庇 (ひさし) の張り出した下、鉄さんは夢殿を描いてはりました。

「いやぁ…　これはやはり描きにくいなぁ…　カンバスが湿気を吸って鉛筆が走らない」
誰に云うとは無く鉄さんが肩を落として呟きます。

「下色だけ入れておくとするか…　」

雨を受けていた空き缶を軒下に運び込むと、三十分も経っていないのに一番小さな缶には水が溢れんばかりに溜まってはりました。
「随分溜まりはったね…　お水…　」

「そうですねぇ。チョット薄めすぎですが、まぁ、下塗りなのでやれるでしょう」

鉄さんがはにかんだ笑顔を見せ答えます。

「あら、鉄さん、絵の具は入れしまへんの？　　」鉄さんは四つの缶にそれぞれ絵筆を放り込むと、グルグル水をかき混ぜてはったのです。
「荷物になるし雨が降っていますからね、絵の具チューブをダメにしては大変なので、予め缶の中に絵の具を塗りつけて乾かしておいたんですよ」

　水がたまった四つの缶は、一つの缶を除いてどれも同じように黒豆さんをふやかした水のように薄黒く見えているのです。
「どれも同じ色に見えるけど、鉄さんに違いは判るの？　　」鉄さんはニコリとすると、缶の側面を指さし「ほら、お千代さん、ここ見えますか？　　」といいました。
杖を頼りにチョイと前屈みになり眺め観ますと、缶の側面は「赤」「黒」「青」「白」と、釘か何かの鋭利なもので彫られているのが判りました。

　銀色の缶の肌が少し錆びつき、所々茶色くザラついて見えています。そこに傷つけられたところだけがピカピカと金彩を放って観えました。
「鉄さん…　ごめんなさいね、うるさくて。白っぽいお水は缶の横腹に白って彫ってはりますけど、これも下塗りに使いはるんですか？　　」

「使いますよ…　今日は雨が強いですから画紙が湿気を吸っているので判り難いですが…　半乾きの処にポツポツと白を置くと滲 (にじ) みや暈 (ぼか) しが花火のように広がるんです」
　鉄さんは嫌な顔を一つも見せず、この歳よりの質問に機嫌よく答えてくれるのでした。
「なんだか綺麗ですねぇ…　缶の彫ったところだけがピカピカ光ってはりますねぇ…　」
「今では珍しくなりましたからね、錫 (すず) メッキのブリキの缶は…　」

「錫メッキのブリキ缶ですか…　そんなものがあるの…　」

そこまで云って、私は思い出しましたよ…　私は錫メッキを知っていたのです…　。

◆

私が十三、四のころでしたか、その日の店番は祖母のウネがしていました。

「お千代、茶の間の戸棚の上から二番目の引き出しを開けておくれ…　そうそう、そこを開けるとね、鋏なんかがあるだろ？　　」
　祖母の云う通りに戸棚を開けると、そこには裁縫道具の針や糸、そして鋏やら篭手などが几帳面に整然となおされて (・・・・・) いました。
「そこに針が引っ付いた、まぁるい平べったい石みたいなものがあるかい？　　」

「うん。ある…　」

「そこの針箱に針を外して入れたらそのまぁるいのをこっちに持って来ておくれ」

　そこには確かに針が引っ付いたまま散らばることのない、まぁるい平べったい石のような物がありました。
　針を外しお店の祖母のもとへ持ってゆくと、西洋風の立派な身なりをし口ひげをたくわえたおじさんが立っていました。
「はい、ありがとさん…　」

　私は何が始まるのかと好奇心が抑えられず、店の番頭席を離れることが出来ずに祖母の手元を正座をしながら凝視するのでした。
　ふと目をお客さんのひざ元の上がり框 (あがりかまち) に移すと、そこには綺麗に銀色に輝く「茶道具一式」が整然と並べられていました。
【綺麗…　おてんとうさまの光を受けてピカピカ光ってはるわぁ】

とも箱もあり、筆字で箱書きが書いてあるところを見た私は、なにか途轍もないお宝が持ち込まれたと思ったものです。
祖母は平べったいまぁるい石の玉を自分の前に置くと、急須を手に取りそのまぁるい石のようなものの上にかざしました。
「カチン！　」

するとどうでしょう。その平べったい石の玉は急須に飛びつくように張り付いたのです。
「あちゃぁぁぁ…　あかんかぁ…　」

「あきまへんかぁ…　」

声を発したのは祖母とおじさんが同時でした。

私はその光景を見ていて何のことか皆目でした。なにがどうなっているのか、なにがあかんのかが気になって仕方がありませんでした…　。
せやけどね、そのお客さんの落胆の様子を見ていると、その場で祖母に聞くことが躊躇 (ためら) われたのです。
「お千代、これを元あった場所に戻しておいてちょうだい」

その言い方からは、戻したらお店には戻ってくるなという調子が感じられましてん。
程なくすると、お店から呼ぶ声が聞こえてきました。

「お千代、さっきの石の玉を持っておいで…　」

「はぁい」私はこの瞬間が大好きでした。祖母や母は、ことある毎に新しい知恵を授けてくれました。
「お千代、これはな、磁石云うてな、鉄ととても仲がええねん」

そういうと、先ほどのお客さんが置いていかはった急須に近づけると、それは祖母の指先から飛び出すように急須に張り付いたのでした。
「お婆ちゃん、私もやってみたい…　」

「よしよし、ほなな、こうして下に置いて…　こうして急須を近づけてみなはれ」

祖母は質草に傷がつくことを懸念したのでしょう。急須の底をかざすことしか許してはくれまへんでした。
「…　せやけどな、この磁石っちゅうもんはな、値打ちの高いもんとの相性は良くないねん。せやから金や銀との相性は今一つちゅうこっちやな…　。ほれ、そこからその簪 (かんざし) を持って来てごらん、幾つか並んでる箱がありますやろ…　そうそう、それ

をここへ…　」
　箱を祖母の前に届けると、祖母はその磁石というものを簪の上にかざしはじめました。
「これは銀やな…　これは鉄、これはええもんやねぇ…　金細工や…　」

　そう云いながら磁石をかざして真贋の見立てを教えてくれるのでした。

「さっきのお客さんのこれはなんやの？　　磁石が引っ付いたちゅうことは鉄なんやろう？　　なんでこんなにピカピカ光って綺麗なん？　　」
「錫 (すず) メッキいうてな、鉄の上から錫でメッキをかけてはるねん…　せやから、磁石が吸いついてしもうたんやな…　」
　祖母はそういうと簪の並んでいる箱から金細工の施された簪を取ると、私の潰し島田に足りない結髪 (ゆいがみ) に刺しながら「お千代な覚えておきなはれや。人の相性云うもんはな、得てして磁石みたいなもんと思うて惹きつけられるもんを有難く思いがちやけどな、そうやないで…　結局は目を養わなあかん。澄んだ目をもちなはれや…　お千代が金や銀のように値打ちの高い人間になれば、磁石は寄ってきいへんから安心やけどな…　」そう言いながら優しく笑うのでした。

　あの簪が祖母の形見となるまでに、それほど時間はかかりまへんでしたなぁ。

　あら…　鉄さん…　そういうたらあんたも鉄やないの、ほな、私が磁石かい？　　あんたが引き寄せるんだか、私が引き寄せられるんだか…　どちらにしても引っ付きたがるんやろうなぁ…　あんたも私も大事な人を早くに見送ってるから…　なんや他人ごとちゃうねんやろなぁ…　きっと…　。

その三　鉄さんの憂鬱

「お義母さん、大丈夫ですか？　　しんどいんちゃいます？　　無理しんと休んでくださいねぇ」嫁の松枝がよう面倒みてくれはりましてえ、私もこうして鉄さんの描いた画を眺めに来ることができまして。それはもう本当に有難いことですわ。

「松枝はん、ゴメンねぇ…　いつもこうして摑まらしてもろて。あんた大丈夫か？　　重たいことあらしまへんか？　　」
「何いうてますのん。手綱引いてもろてるだけですやんか。なーんもしんどいことあり

ません。あっ、お義母さん、いい席が空きましたで〜　あそこに座って眺めさしてもらいましょ」
　不思議なものです。こういう時は足がこう…　シャシャシャシャいうて動きますねん。丁度画の正面。少し距離はありましたけど、座ってみることが出来るベンチシートが空きました。
「あ〜　これはいい按配だねぇ。これで少しは落ち着いてみられそうやねぇ」そういいながら松枝を眺め観ると、私が摑まっていた腰回りのゴタゴタを直しておりました。

　鉄さんの描かはった夢殿さんは、秋の長雨の中に佇む夢殿さんを描かはったものなんやけどね、太〜い雨が幾筋も幾筋も画面いっぱいに垂れ堕ちてましてなぁ…　それが按配寂しそうに見えるのです。ただね、扉障子にほんの少しだけ中からの明かりが挿してましてな、その明かりがそりゃ可愛らしゅうて、可愛らしゅうて…　。

「あぁ…　あの明かりは鉄さんの魂なんやろなぁ…　早くに奥さんなくしはって、寂しい気持ちを顕した鉄さんの魂なんやろなぁ」そう思えたものでした。
　夢殿さんの南の空には雲を割るように横一条の光明が射してましてな、それがまた打ち立ての真綿のように柔らかでやさしい光でした。
「松枝はん…　いい画やねぇ〜私この画を鑑ているとなんか泣けてきますわ。ねぇ？」
「お義母さんは鉄さん贔屓やからねぇ〜　私なんかこの画を観てると、葛きり思い出しましてん (笑)　はぁ…　なんや葛きり食べとうなってきますわ」
　私は吃驚しましたよ。この子に読まれたんちゃうやろか…　思うて。

「松枝はん…　あんたなぁ…　似てきはったねぇ〜　」

「誰にですのん？　　」

「私にやないの (笑)　私もな、さっき平宗さんの葛きり思い出しましてん…　」

「(笑)　お義母さん…　ほな、帰りに食べて帰りましょ。晩ごはんに柿の葉寿司をこうて帰りましょ…　」

　長いこと一つ屋根の下、苦楽を共にして来たお蔭でしょうか、観音さんの粋なお計らいでしょうか。考えることは寸分違わずを思わせます。
「そうそう…　たしか家に鉄さんの画が一枚だけありましたなぁ…　、富士山を描かはった立派な画。お義母さんあの画はどこに直しましたん？」
もう二十年以上前に鉄さんから私が買うた画のことを松枝は思い出したようです。

「あのな、私の柳行李わかるか？　そうそう…　あの柳行李や。何いうてますのん捨てますかいな。お婆ちゃんに祟 (たた) られるわ。私の部屋の押し入れにちゃぁんとはいっているから…　あんたぁ、ちゃんと引き継いだってなあの行李」
「はいはい」ほういうと松枝は私の隣に座りながら足を優しくさすってくれてます。
人の手ってな…　、なんでこうして温かくて柔らかいんですやろ…　。

　私は孫やらひ孫やらそしてこの松枝やら…　、たくさんの温かくて柔らかい手に囲まれて過ごせてますけどな、鉄さんを想うとねぇ〜　自分の手しかあらしまへんやろ…
なんぼお坊様の修業したゆうても、そりゃぁここまで寂しかったですやろなぁ……　。

◆

「ごめん下さい…　ごめん下さい」

「はぁい…　おや、鉄さん。どないしはりましたのこんな寒い日に」

　今から二十年以上前…　昭和二十年の師走も半ば。鉄さんがうちの店を訪ねて来ましてん。最初に対応に出たのは早くに逝去した次男の嫁の松枝でした。
「やぁ、松枝さん。ご無沙汰してます。面目ない。じつは年末を迎えるに窮してしまい、ついては画を一枚かたに預かってもらえぬものかと…　」
「わかりました。ほな、お義母さんを呼びますからチョットだけまってくださいねぇ」
　松枝が奥の私の部屋に来るや早口で仔細を告げるのを聞くと、私は「ありがとう」と一言発しお店まで転げるように出てゆきました。シャシャシャシャ…　と。

「鉄さん、寒いところわざわざ来てくれて有り難う。なんか松枝の話しでは画を一枚預かって欲しいとか…　」
　取り次いだ松枝は店に顔を出しません。このあたりは本当によくできた嫁でした。
「お千代さん、申し訳ない。恥を忍んでなのですが、この年の瀬、なんとも窮してしまい、無理を承知でお訪ねしました」
　さぞや居心地が悪かったのでしょう。鉄さんは顔を赤く染めながらそういうのでした。
「鉄さん…　私とこのお商売は、値打ちがはっきりついているものにしかお貸しすることは出来しまへんね。せやから、美術品や工芸品という文化的付加価値を評価する物差しは恥ずかしながら持ってませんねん。まずそこを許したってくださいねぇ」
「そうですかぁ…　」鉄さんは肩を落としていました。

「でもね鉄さん…　もしも鉄さんが良ければ、私がその画を買わしてもらいましょ」
「ええっ！　　買ってくれるのですか、私の画を」

「お友達の画を一枚買うぐらいがなんですの…　チョット遅いぐらいですわ。はい、ほななんぼで買わしてもろたらええのんやろね」

　鉄さんはモジモジしてました。言いにくそうにモジモジと下を向いて。意を決したようにお顔をあげると…
「では、お千代さんの好意に甘えて八百円で…　いや、七百円で…　」

「珍しいお人やなぁ (笑)」

「はぁ…　」

「うちとこ来るお人は皆だんだんに高向 (たこう) なっていかはるのに…　鉄さんは安うなっていかはる…　そんなお人聞いたことありまへんわ (笑)　わかりました。ほな、これで買わしてもらいましょ」

　私が番頭席の上に用意したお金は「千五百円」でした。これでも高いか安いか分かりません。ただ七百円、八百円はギリギリですやろ。年の瀬を迎えるに窮しての七百円…　、ほな新年を迎えるには足らしまへんなぁ。私はそう云いながら鉄さんの手に千五百円を握らせました。
「お千代さん…　あなた画をまだ鑑てないではないですか。鑑てからにしては如何ですか」
「鉄さんがお客はんなら、勿論みさせてもらいます。せやけど鉄さんはお友達です。私はお友達の画を買わしてもろただけ。その風呂敷に包まれた画は、あとでゆっくりみさしてもらいます…　、松枝はーん、はいな悪いけどね、あったかーいお茶を一杯いれてここまで持って来てくれるか。ほして、この包みを仏間へ持っていておいてな…　」

「あんなぁお千代。よーく覚えておくんやで。お商売先からものを買うときはな、絶対に値切ったらあかん。びた一文たりとも値切ったらあかん。」
祖母のうねの教えでしてん。

「でも…　みんな闇市で買い物するときに、まけてくれまれてくれっていいはるよね」
「そや。でもな、うちとこのお商売はな逆なんや。もっとくれ、もっと貸してくれ云われるやろ？」

「うん…　皆言うなぁ」

「仏さんが教えてくれる世界にはな、餓鬼道ちゅう世界があってな、この世界はとにかくもっと、もっと…　もっと、もっというて欲しがる世界でな、もっとまけろ、もっと高く…　それは欲のキリのない世界なんや」
「お婆ちゃん…　私もなぁお母さんに時々言うてるわぁ…　もっとお飴さん頂戴て…　」
「ほうか…　ほしたらなお千代、お母さんにお飴さんもろたらな、今度はもっと頂戴って云わんときや。ほしてなお爺ちゃんのところへ行ってな、お飴さん頂戴て云うてみ。きっとお爺ちゃんもくれるから。ほしたらお千代、倍に増えるやろ。お飴さん。ほしたら誰からも小言いわれんですむやろ」
「ほな、お婆ちゃんにお飴さん頂戴云うたら…　わたし…　大儲けやね (笑)」

「あかん…　この手はお婆ちゃんには通用しまへん (笑)…　」

「ええか、闇市で買うものいうたらな、大概値段ははっきりしてるもんが多い。高かろうが安かろうが高々知れたものや。要はお商売先の儲けちゅうこっちゃな。だから値切ったらあかんのや。私らが値切らずに買い物したらな、お商売先がうちの質屋に来た時に、もっとくれ、もっと出してくれ…　云えんくなるやろ。人様の声いうもんは千里を走るいうてな、ほれがお商売の評判ちゅうもんになるねん。せやからな、まけてくれとは言うべからずが鉄則なんや」

　事実、祖母が買い物先でまけてくれという言葉を使ったところは見たことが無かった。逆にうちの店にきはったお客はんは、みな、祖母の顔を見るとあきらめたように自分で金額をいうことは無く、祖母が提示したお金をもって帰りはった。

　昭和二十一年正月の松もまだとれぬ頃…　鉄さんからの年賀状が届きましてなぁ。
ハガキの裏には朗々とした感謝の言葉と共に縁起物の画が微に入り細にわたって描き込まれてました。

「お義母さん、大切に…　画と一緒に直しておきましょうか。将来、もっと (・・・) 値打ちが出るかもしれまへんから (笑)」
松枝が楽しそうに言葉にしました。その年から年に二度、鉄さんからのハガキが届くようになりました。
　私が鉄さんの画の秘密に気が付いたのはこのハガキの画を観るようになってからでした…　。

その四　鉄さんの秘密

昭和三十六年の夏の日でした。この歳の夏はそりゃぁ暑い日が続きましてなぁ。夏入り前の梅雨が空梅雨でしたから奈良県全域に渇水警報いうもんがでましてな、取水制限いうですやろか、お天道様の高い時間帯になると水道が止まってしまって、そりゃぁ往生したものでした。

　そんな七月の三十日も間近のころだったと思います。松枝が嬉しそうに声を弾ませて私の部屋までハガキを届けてくれました。

「お義母さん、鉄さんから暑中見舞いが届きましたよ。また可愛らしい小さな家がたくさん描かれた絵ハガキ。こんな小さな家をようもこんなにたくさん描けましたなぁ、鉄さん」
「ほうかぁ、どれ、松枝はん、ちょっとそこの虫眼鏡取ってくれるか。はい、ありがとさん。どれどれ……、松枝はん……、あんた、これ家か ？ わたしには黒ゴマさん潰したようにしか見えしまへんわ。ようまぁこんな小さい家をたくさん描きはったなぁ」
「でも、やっぱりあれですねぇ〜、本職の画家さんだけあって上手ですねぇ」

「ほうかぁ？ そういうもんかいねぇ」

　この頃の私は目がよく見えなくなっていたこともあり、チョットボケも入ってきていたんでしょうなぁ、松枝のいうことも分かったような分からぬようなおかしな按配になってきてましてなぁ。

「松枝はん……、悪いけど、押し入れから柳行李をだしてくれるか」

「はいはい、絵ハガキが入ったお煎餅の箱ですやろ？」

「そうそう、はいありがとう」わたしはそう云うと箱を開けて中に直しておいたハガキを出して手に取りました。
　手にした虫眼鏡で一枚一枚の絵ハガキを眺めはじめたものでした。するとそばで見て

いた松枝が云うのです。
「お義母さん、鉄さんの画って風景とか景色が多いなぁ……　まあ、季節の挨拶やから当たり前かもしれへんけど」と。
　わたしは云われて改めてまじまじとその絵手紙を見ました。

　わたしはその鉄さんから送られて来た三十枚ほどの絵ハガキを手にしながら泣いてしまっていたのです。

「お義母はん、どうしはったんですか、具合でも悪いんちゃいますの？　　あきまへん、チョット横んなりはった方がええんちゃいます？」
　松枝は一生懸命に気にかけてくれましてな、一生懸命にわたしの背中をさすってくれてましてんけどな……。
「松枝はん……、鉄さん……、寂しいねん。あの人な寂しいんよ……　」

わたしはハガキを手にしたままオイオイと泣いてしまっていたのです。

　驚いたのは松枝だったでしょう。何も言わずに私の背中をポンポンと優しくはたき、さすってくれていました。
　鉄さんからのハガキに描かれた画のすべてに私は秘密を見つけたのです。

　そりゃぁねぇ、普通にご挨拶を交わすだけのご縁のお人でしたら私もそこまでは感じなかったかもしれまへんなぁ。
　せやけどね、鉄さんとは仏さんや観音様が取り持ってくれたご縁。わたしがもう少しシャンとしてたら店を松枝に任せたまま鉄さんの面倒を見に転がり込んでたかもしれまへんなぁ……。

◆

　むかぁしむかーしなぁ、私が尋常小学校から高等小学校に上がった年でしたから、そう一年生でしたやろか、せやから十歳の時でしたわ……

「ぐーにーはん〜、ぐーにーはん、お千代のあだ名はぐーにーはん」

ある日を境に、突然降って湧いたように私にあだ名が付けられましてん。最初は私も何のことかわかりしまへんでした。それが毎日毎日、来る日も来る日も云われるようにな

りましてなぁ。
ある日、学校から帰り祖母のウネに「おカァさんは？」と尋ねると買物行ってるいわはりましてなぁ、なんか私、急に寂しいなって祖母の膝に突っ伏して泣いたんですわ。驚いた祖母は「どしたん？ 学校でなんかあったか？」そうやさしゅうに聞いてくれました。私は泣きながら祖母に聞いたものです。

「おばぁちゃん……、あんな、学校でなぁ、みんながぐーにーはん、ぐーにーはん云うねん。ぐーにーはんって、なんやろか？……」ほうしますとな、祖母が大きな声で笑い出しましてん。
私はなんやビックリしてしまいましてなぁ。

なんか面白い漫談か何かのことかもしれない思うたぐらいでした。

　ほうすると祖母は急に真面目な顔になると……。

「いいかお千代、今から云うことよう聞くんやで。これからなお千代が大きゅうなってくわな、するとな、いろんな知恵がついてくる。ほしてな、周りの人間達からかけられる言葉はもっと厳しゅうなる。言葉が無ければもっと厳しい、そりゃぁ恐ろしい態度を取られることもある。ええか、負けたらあかん。せやけどな、おばあちゃんがいう負けたらあかんちゅうのは、喧嘩をせっちゅうこっちゃないで。大人の言葉にな、臍を噛むいうてな、どうにもならない悔しさを顕した言葉があるんや」
「ほぞ？　　ほぞってなんやの？」私がそう聞きますとなぁ、祖母は私のお腹のおへそをチョンチョンとつくと「ここやがな、お臍さんや」というのでした。

「お千代、おまえさんは自分で自分のお臍を噛むことが出来ますかな。……そうや、できしまへんやろ噛めない臍を噛みたくなるほどの悔しい気持ち。それを大人たちは臍を噛む云うてますのんや。でもなお千代。噛むのは臍やないで。唇や。それもなあんたの心の唇や。うちとこのお商売はなぁ、お金を借りてくれるお人がお客はんや。ええこと教えてやろか、お千代がなぁ、大きゅうなった時にな、必ず、必ず見たことあるお人が、ほれ、あの暖簾をかき分けて入ってくる。必ずや。」

祖母はそこまでを云うと首だけをしゃくり上げるようにお店の暖簾を見たのでした。私には祖母が何かを思い出している様に見えたもんでした。
「おばぁちゃん、それは私の知っている人ちゅうこと？」

「そうや。同級生かもしれへん。年下のほれ……、なんちゅうたかいねぇ……、せやせやお里ちゃんかい。かもしれへん。どこの誰がいつお客はんになるかもしれへんのや。お千代……、人間の勝負処云うのはな突然来る。その時のために今は心の唇をグッと噛み締めて色んな知恵を溜めなはれや」そう笑って言うのでした。
「わかった。わかったけどわからんのがな、ぐーにーはんってのはなんやの？」

「あぁ、それは質屋のこっちゃ。むかーしな、質屋云うもんは博打場のすぐそばにあってなぁ、博打で負けて借金こさえた人や、もうひと勝負したろおもた人たちが、身ぐるみあずけていったところやったんやなぁ。博打場ではな、五という数字をグ云うてたんやな、ほして二は、にのままや。ほしてな、奇数を半、偶数を丁いうて二つのサイコロや花札でな、出た数字の丁半を決めるいう博打があった。五と二を足すと七やろ、ほしてそれは半の目になる。せやからぐーにーはんなんやなぁ……　これまた、こまっしゃくれたガキやなぁ」

祖母はそういうと声をたてて笑うのでした。

　次の日、私が学校へ行くといつもの子達が徒党を組んで「ぐーにーはん」と私のあだ名を呼ぶのでした。そこへなぁ、いつもは教室でもひとりでおる男の子が現れるやいなや、三人の男の子たちを一瞬でけり倒してしまったのです。
　私はその光景にあっけにとられ何も言うことが出来ずただ眺めることしかできしまへんでしたのや。
　その日の午後の休み時間のことでしたか、私が教室に戻ってみると男の子二人が言い合いをしてましてん。言い合いしてる一人は、私を助けてくれた男の子でした。もう一人方は町の相談役をしている家の小倅でした。
「偉そうなことぬかすんやったらな、家の家賃払ってからにしてもらおうか」

「お前になんの関係がある！ 親のこっちゃないかい。わしに関係あるかい！」

そう言い合っていたのでした。どうやら私を助けてくれた男の子の家は窮していたようであり、教室の中でも何となくそんな話は出ていましたが、その話を聞きつけた小倅が朝の仕返しとばかりにみんなのいる前で窮状を暴露してしまったのです。
　そうなのです。朝蹴り飛ばされた中にはその小倅も入っていたのでした。

それからもその男の子は教室で一人でいることが多かったようで、気になり時折みると、いつも教室の窓のそとに広がる空を眺めているようでした。雨の日も晴れの日もでしたなぁ。

　あれから二十年が過ぎたころですやろか。暖簾を……、そう、こう肩をすぼませ首を前に突き出してくぐるお客はんがいらっしゃいましてなぁ。
時計をひとつポンと番頭席にぞんざいに放らはると「二千円貸してくれ」云いはります。品物をみさしてもらいましてな「七百円」しか貸せませんいうと、大きな舌打ちをするとそれでいいいわはりましてん。

「ほな、何か名前の分かるもん出してください」私が云うて出さはった身分証をみて驚きました。町の顔役・相談役の小倅でしてんなぁ。
　向こうは知ってか知らずか、私の顔など一切みいしまへんでした。

お金を渡すと肩で暖簾を切るように、颯爽とお店を出ていかはりました。

【おばぁちゃん、あんたは偉いお人やったなぁ……、来ましたで、来よりましたがなぁ】

私は一人そう笑ったものです。

　私は鉄さんを見ていると一人でいたあの男の子のことを時折思い出していたのです。どうしてはるやら……、良い一生を送ったであろうことを観音さんに祈るのでした。

◆

　鉄さんから送られ来る絵手紙の秘密、それはどのハガキにも一人の人間も描かれていなかったことだったのです。
　人が住んでいる集落や、田畑が描かれたもの、そして山間の小径、冬の雪道……。どの画にも人が一人も描かれていなかったのです。

寂しいんやろうなぁ。苦しいんやろうなぁ。なんて寂しさを抱えたお人なんやろう。わたしはそう泣いたものでした。
その後、鉄さんの画集が発売になると聞き、わたしはその画集を買わしてもらいましてん。

小さな字で説明が埋め尽くされていましたから松枝に読んでもらいました。すると。

「立派な画や大作を描こうとは思わない。寂しいんだから寂しい画を描きたい」と鉄さんの言葉が載っていたのです。
「お義母さん、鉄さん寂しかったんですなぁ」松枝がそう言葉にしました。

「寂しかったんとちゃうねん、あの人は今でもずっと寂しいままやねん」そういうと私はまた声をあげてオイオイ泣いたものでした。

◆

その五　ことわり

　なんですやろなぁ、なんかねぇ色んな声が聞こえてきますねん……。とおーくのほうなんですやろなぁ。これまたおかしな按配になってきましたなぁ〜、たしか私、画を鑑ていたはずなんやけどなぁ。ベンチに座らしてもろうて。
　いろんな声が「お千代はん、お千代さん、お千代ちゃん」いうて呼んではることはわかりますねんけどお顔がみえへんよって。
　なんやの、お里の声もしてるやないの……、フフッ、お里ちゃんあんたのことは声を聞いただけで分かるわ。お嫁さんたちには優しくしてやりや、せやないと、あんた、閻魔さんにいじめられるで。

「お義母さん、お義母はん……、しっかりしてください、お義母はん……」松枝でっしゃろうなぁ、私のスポンのベルトを緩めようとでもしてるんやろうけど、不器用なこでしてなぁ。
なんやベルトが取れしまへんのかいな……、松枝はん、あんまりほうして振ると、お腹の皮が擦れて痛いですやろ……。
あちゃあぁぁ　あかんかぁ……痛ないわぁ。

　ん？　　なんて、松枝はん、なんていいはったん？　　鉄さん？

　こりゃあかん、あきまへん。おきにゃぁ……、松枝はん、あんたうちのズボンどうしてくれはりましてん、チャンとズボンはかせてますやろなぁ。

「お千代さん……、わたしですよ、鉄です。画、観てくれましたか？　　いい画でしたか……。夢殿さんのね、扉口の明かりはね千代さん……、あれはあなたに貰った明かりなんですよ……　　」

　鉄さん……、あんたなんで泣いてくれてはるの……。あんた……、また寂しいっていいはるやないのぉ……。

　微かに見えていたはずの鉄さんのお顔が次第に暗がりに堕ちてゆくと、周りの声も聞こえんようになりましてん。

　ほうしましたらな、目の前がぱぁぁっと明るくなったとおもたら……、その光の中に観音さんがおわしてなぁ、こういいよる。

「お千代、進むとき来たり」と。

「お迎えでしたんかぁ……、ああ、せやったわぁ。ところで観音様……

あんさん幾つにならはったんかえ、えっ？ 満か数えかて……

そな細かいこと気にしはりますかいな、あの世の理 (ことわり) で」

了

夢殿『秋涙』令和六年版 (第四. 三形態)

不染鉄　夢殿 - コピー.jpg

その一　満と数えのいろは坂

奈良いうところは海がないところでしてなぁ…… 。

高等小学校の二年生…、云うてもわからしまへんやろなぁ。せやから歳 (とし) のころなら十一、十二歳 (さい) ぐらいのことでしたやろか。明治も二十年になった頃合い。お父ちゃんやお母ちゃんにはじめて海を見せてもらいましてんけどな。

お伊勢はんへと参ったときに鳥羽ちゅう宿場に留まりましてんけど、二階建ての宿屋はそれはもうお城か法隆寺さんのご本堂のように立派に見えたものでした。

お父 (とう) ちゃんがなぁ「お千代チョットこっちにおいで」ほう云うのでお父ちゃんの座ってはる窓辺にゆきますと、それはもう見事な桔梗色した海が一面に広がってましてなぁ。

西に傾きかけたお陽さんを浴びはった海がキラキラ〜キラキラいうて光ってましてん。

南海の図 愛知県美術館収蔵（２）.png

子供ながらに毎日こんな海が見られる三重のお人たちを羨んだものでした。宿屋の軒先では、私よりも年下の子達ですやろなぁ、竹で編んだ輪を棒を使って器用に回す輪回しをして遊んではりましてんけどな、奈良ではこのころ既にブリキの輪がありましてん。せやから輪回しと云えばブリキの輪を回して遊んでいたもので、こんな些細なところでも、あぁ〜奈良に生まれて良かったと思ったのも、考えてみりゃおかしな話ですやろか。

鉄さんが描かはった画にも仰山 (ぎょうさん)、海を描かはったものがありましてんけどな。わたしは鉄さんの海の画を鑑 (み) るたびに鳥羽の桔梗色した海やお父ちゃんやお母ちゃんを思い出したものでした。そやったわぁ、あぁお婆ちゃんに叱られるわぁ。あのなお婆ちゃんがな、うちとこの柳行李の蓋にな、五合升摺り切り一杯のあずきはんを入れはるとこうして抱えはって中腰のまま横に傾けながら振ってみせましてんけどな、その音がまた鳥羽の海で聞いた波の音にそっくりでしてん。ザザザザァーッ、ザザザザーッちゅうてなぁ。お婆ちゃん、なーんも云わんとニコニコしながらわたしの顔だけを見て柳行李の蓋を揺らしてましたなぁ。わたしが昼寝におちるまで。　お婆ちゃん疲れたんですやろなぁ。お座りしたまま柳行李の蓋を抱えて眠るように逝ってはりました。

その鉄さんがこの昭和四十二年春、法隆寺の夢殿さんを描き上げたちゅうことで、法隆寺さんや鉄さんとの縁浅からぬお人達にむけてお披露目の展覧会が行われたのでした。

その画はね、法隆寺の夢殿さんと云われ親しまれてきた八角円堂を描 (か) かはったものでした。三重県のお伊勢さんと並び称され、一生に一度ぐらいは参ってみたい日本仏教発祥の地である奈良県は飛鳥地方にご縁起をもつ法隆寺さん。その境内 (けいだい) 伽藍 (がらん) の一つ、夢殿・八角円堂の建設発願者は聖徳太子さんです。
「お太子さま・お太子さん」と親しむのは、何もこの町に住む者に限ったことでは無いようで、毎年、一月の二十日を過ぎた頃でしたか、全国の太子堂を持つお寺さんでは聖徳太子さんをお祀りした太子講が催された様子なども新聞を介して伝わります。お太子さんの寺づくりに由来されるのでしょう。建築建設に携わる会社や職人さん、物作りを生業 (なりわい) とする職人さんたちの間では、そろって無病息災、職場安全を祈願しお太子さんの遺構を称える勉強会も受けつがれていたよう。
人々が暮らす上での様々なまつり事を語るうえでも、切っても切り離すことのできないお人であり場所であり…　。画は、そんな聖地とも云えそうな法隆寺の夢殿さんを描いたものでした。

実はね、わたしこの画を知ってましてん。いえね、正しく申し上げるのなら描いたお

人と描いてはった時期を知ってましてん。だってね描いてはるときに傍で見ていたのですから。
今、こうして目の前で出来上がったこの画を鑑 (み) てますとね、それはそれは昨日のことのように鮮明に思い出されてくるほどで…。
　めんどくさいことや都合の悪いことは忘れることが出来るようになってきましてんけどな。昨夜の夕餉 (ゆうげ) の献立すら忘れていられるのに、この画のことは忘れないのが不思議。
【あぁ…　もしも忘れてしもうたらどないしよ、寂しいなぁ…　寂しいことを忘れてしまえりゃ僅かばかりの余白さんも、随分と生きやすいんやろうけど、中々そうは問屋も下ろしてくれまへん…】だって夢の中まで出てきはるぐらいです。これがほんまの夢殿なんですやろなぁ…。

　この画を描いてはるお人の姿かたち。下絵を描く鉛筆を走らせる指は、わたしとこの神棚さんに灯す蝋燭のようにほっそりと白んで見え、しなやかな指がときには神経質そうに、ときには考えることをやめはったように画紙のうえ繊細であり、大胆でありと運ばれました。あれが下塗りというものなんですやろか、水に薄っすらと色が着いた程度に暈 (ぼ) かしはった絵の具を塗る様子を見てますと、とてもこんなに美しい画になるとは想像も出来しまへんでした。
左手のね、人差し指と薬指に挟んだ煙草をたてはりながら、器用に親指や拳固を握った小指の付け根を使いはって下塗りの絵具を延ばしていかはる様子は、うちとこの曾孫のお絵描きと変り映えなく思えたものです。

　不染 (ふせん) 鉄 (てつ) 作・夢殿　完成披露の展示会がこうして法隆寺さんの本堂で行われ、わたしは幸いにもその完成した画を鑑ることが出来ましてんけどなぁ。冥途 (めいど) の土産なんていう例えがありますやろ…。どうでっしゃろうなぁ。この歳まで逝 (い) かせてもらえなかったのも、ご褒美だからこの画を鑑てからにしなさい。そう観音さんに云われているようにも思えたもの…。
　お陰様で、もうなぁんも思い残すことなくお迎えを待つことが出来るようになりましてん。

◆

「お千代姉ちゃん、あんたやっぱり来てはったん？　　体の按配 (あんばい) はもうええの？　　大事にせにゃ、あかんよ、あら…今日は、松枝 (まつえ) さんも一緒なん？　　ほな安心やわ良かったねぇ」

「はいな、ありがとねぇ…お里ちゃんも元気そうやね。きょうは亜由美さんもご一緒な。まだまだ寒いから、体を冷やさんといてねぇ…。お腹のお子にさわったらあかんから」

隣町の古道具屋 (ふるどうぐや) の古女将 (ふるおかみ)、お里も来ていたようです。高々二つほど若いかぞえで九十二才というだけでこの云いよう。大体あんた…「やっぱり」ってなんですのん。誰殿彼殿 (だれでんかれでん) チョイと名の知れたお人と見ると全部自分のお友達にせにゃ気のすまん子でしてなぁ。

まったくいつまで人のこと姉ちゃん呼ばわりしてはるねん。云うたところで目くそさんが鼻くそさんを笑うようなもの。他人様 (よそさま) の心配はさておき、あんたとこの嫁や孫嫁の癇癪 (かんしゃく) 取りしてあげなはれや。お前さんが未だに商売にも口を出すものだから、嫁も付き添いの孫嫁も癇癪が溜まっていると愚痴をこぼしているのも評判やないの…。

そんなことを考えていますとね、まるで見透かしたようにお里のところの孫嫁は始末が悪そうに会釈だけを見せました。うちの松枝がお里の孫嫁と言葉を交わしはじめた頃合い「ほれ、行くよ」と催促するとスタスタと一人で歩いてゆきます。

ほんまになぁ、子供のころからのことやから今さら驚くことでもないねんけどな、このお里の足腰の丈夫さと口の達者さには舌を巻いたものでした。道具屋は、目が利いては商売にならぬの例えがありますけどなぁ、ほんまに上手を云うたもの。

そうそう、むかーしこんな話がありましてんけどな… 。

【うちのお店に古着を持ち込んだご近所はんがいはってね、これでなんとか五十銭貸してくれと云わはります。その様子は当時十一、十二歳の私でも分かるほど、何かいつもより居丈高 (いたけだか) に映りましてん。

あのな、質草 (しちぐさ) もって質屋に行くときちゅうのはな、大かたのお客はんは少しこう…　肩をすぼめて暖簾 (のれん) をくぐるのが当たり前の風景でしたから、子供ながらにこの人は何をこんなに威張っているのだろうと思ったもの。

店番の母はそんなには貸せない。これぐらいで持ってお行きなさい…　そういうのですが頑として引き下がりません。母は何かの事情や理由があるのだと思わはったのでしょう、なんでそんなに自信があるのか、どう見てもそこらの呉服屋さんの店先もの。そう誥げたのですが…、するとそのお客はんが云わはりましてん。

「ちゃうがなぁ。向こう町の古道具屋の前を通りかかったらな、あっこのおちびちゃんお里いうたかいな、ほれが店先に出とってな、偉いなぁお手伝いかい云うたら、おっちゃん…　この服な買うてって損はないで云いよる。わしが、なんでや？ そんなアホなこ

とあるかいな云うたらな、あのチンマイ躰 (からだ) でチョットこっち来いと手招きしよる。ほしたらわしの耳元にお参りするように両手を重ねてコチョコチョ云いはじめたやないかい。
　あんな…なんでかいうたらな、買うてまたそれを売ったらええねん。お千代姉ちゃんのとこやったら、キッチリ値打ち通りにみてくれはるやんか。おっちゃんは買うて損するどころか儲けがでるちゅう仕組みやねんな〜　。そう云いよる。これまたハシコイ子やないのよお…。あの年で男衆の急所の掴み方すら心得てけつかる。末恐ろしいガキやでほんま。せやから買うた値段以上で預かってもらわにゃ、わしゃ損するがな。こんなん持って帰ったところで一人もんのわしにどうせっちゅう話しやねん」

　なんと売り付けたのはお里だったようです。お客はんはお里のその口上の余りの巧みさと、人たらしの術中にはまってしまったんですやろなあ。
　この時、確かお里は満で九つか十ぐらいだったはずです。わたしはお里の逞 (たくま) しさに驚き、なんという利発な子だろうと思ったのもあたり前、末恐ろしくさえ思ったものでした。ただ母は違ったようです。この話を聞くや否や、持って帰るかお店の言い値でおいてゆくか、さぁ、どっちになさいます…　と畳みかけたのでした。
　お客はんはその剣幕に驚きはったんですやろなぁ、渋々母の言い値で預けてお帰りになりはりましてん。右手でこう暖簾をパシッと叩 (はた) き、肩をすぼめ、右よし、左よしと出ていかはった姿は来た時とは対照的に映りましてん。

　母は預かった質草を前にすると大切そうにブラシを当て綺麗に折りたたみ、虫よけのショウノウを挟むと飴色に艶をみせる大きな柳行李 (やなぎこうり) に仕舞いながらこういうのでした。
「この箱はね、預かりものやけど…　多分引き取りには来ない人たちのものだからね、将来、お千代にあげるからね…」と。その行李の横腹には、十二月十二日火の用心と墨で書かれた短冊がボロボロになりながら張り付いてましてん…。

　お母 (かあ) はん、あんなぁ…、あのおっちゃんがお里ちゃんから買 (こ) うたと分かったとき、お母はん怒りはったやろ。なんで怒ったん？　　わたしがそう云いますと母は…「お千代な覚えておくんやで、お商売でもそうやし友達関係や人間関係、この世の関わりの凡てはな、善敗己に由るいいましてな自分で自分の人生の責任を取らないとあきまへん。他人様を巻き込んで責任を擦り付けるようなことをしてはあかんのや。ほしたらな、お客はんとの間で何か行き違いがあって喧嘩になっても当人同士で解決できますやろう？　　でもな、他人様を巻き込むと問題はどんどん複雑に大きゅうなってゆく。因果応報やねぇ。あのお客はんはきっとお里ちゃんとこに文句を云いに行かはるやろなぁ…、話がちゃうやないかい云うて…。それとな何度も口を酸っぱくして云うてるけどな、うちとこのお商売は口の固さが何よりも大切なんや。お千代は毎日ご飯を食べはりますなぁ。

ええか、ご飯の半分は口の固さのお陰やと思うとくんやで。質屋の暖簾をくぐるお客はんてな、好きでくぐるお人はいてしまへん。みんな大なり小なりの事情を抱えてくぐりはるねん。前にも教えましたやろ。道端でお客はんに会っても、うちらから挨拶はしたらアカンて。お千代はなんでか覚えてはる？ そや、うちとこのお商売はな “顔サシ” まんのや。せやからお客はんに迷惑かからんようにわざとに知らん振りせにゃあならんねん。お里ちゃんはな、確かにはしこい子なんやろなぁ。でもなお利口さんかどうかは分からんなぁ」そう云いながら笑って見せたものでした】

何ですやろなぁ。そんなことを想うと知らぬうちに懐かしくて頬と口元が緩みますねんなぁ。それにしても…お里の内緒話は昔から手をこうして合わせはってからお参りするように耳元に近づけ、キュッとこう菱餅さんのようにするのが癖でしたなぁ。

せやけど… わたしに内緒話をしたことは、あんた…一度も無かったわなぁ。

◆

「お義母 (かあ) さん、しんどいことあらしまへんか。少し座って休みはったらどうですの？」次男の嫁の松枝がわたしの手を取りながら声かけてくれます。

「うん。大丈夫よ。もう少しだけお前の体を掴 (つか) ませたってな…、もうちょっと鑑ていたいから… 」

「はいはい、じゃぁここの腰のベルトの処を掴んで下さいな…」コートの裾をまくり上げると松枝は、むき出しになったベルトにわたしの手を掴んで導くのでした。

わたしと歩く松枝は踵 (かかと) の高い靴を履く処を見たことはありません。いつも、踏ん張りの利きそうなペッタンコの靴ばかり。そして立つときはお相撲さんのように股を開いて踏ん張るのです。その姿は、新婚旅行で行った高知桂浜の土佐犬 (とさいぬ) さんの土俵入りのようでしたから、摑まらしてもろてるわたしは、随分可笑しいやら申し訳ないやらの思いで眺めるのが常でした。

「松枝はん、あんた幾つになりはったん？　 」

「何ですの急に」松枝はそういうと口に手を当てながらワッハハと大笑い。

人目も憚らずという言葉がありますやろ。わたしは松枝のチョイと後ろから手綱 (たづな・ベルト) を掴んでいましたから、傍 (はた) から見ればそれはさぞかし面妖な光景でしたやろうなぁ。わたし達の横を通り過ぎていかはる招待客の皆はんが、その光景を眺めニコニコしながら頭を下げていかはります。

わたしは松枝の手綱を握ったままそれをグイグイと左右に振り、声を潜めて「チョット、松枝はん、笑い声が大きんとちゃうの、もう少し声を落としなはれ。みんな見ていかはるから」
通り過ぎてゆくお人の殆どが顔馴染みいいますかお知り合いみたいな方たちばかり。中には心やすくお声を掛けていかはるお人もいてはりました。会場のあちらこちらでお辞儀が大流行りです。
画を愛でる会ですから言うまでもなくみんなお喋りは小声です。

そこに土佐犬さんよろしく踏ん張りをきかせた松枝。後ろから手綱を引き締めた強力(ごうりき)のわたし。手綱(たづな)を横に振る姿はまるで犬を落ち着かせるための仕草にも見えたかもしれまへん。

「お義母(かあ)さん…　あんまり横に振るとお腹の皮が擦れて痛いですやん」というと口を尖らせ斜めうしろのわたしを見ました。すると、また噴き出して笑いはじめたのです。余程、わたしの顔が恥ずかしそうにしていたのですやろなぁ「はいはい、ごめんごめん」というと、松枝は正面に向き直り「ちょっと前に六十三になりました…　あっ、満でね、満で」というのでした。「ほな、数えでいうたら…　」わたしがそこまでいうと、松枝は「はいはい、六十五です」と先にまわっていうのです。
「お義母さんのその癖は治りしまへんなぁ…　」松枝は優しそうな笑顔を見せると振り返りながらそういうのでした。
「せやなぁ…　以前なら自分の歳いうときは満でしかいわんかったけど、人の歳聞いたあとは必ず満か数えか確認するものなぁ…　」
「そうそう…　でもね、その気持ち、わたしも分かるようになってきましたわ」

「そうですやろう…　そうなってきますねんて…　わたし、観音さんにも歳聞くと思うわ…　」
「お義母さんのことやから、きっと、数えで教えてやって云いはるんでしょうなぁ…　」松枝はそういうと首をすくめてみせるのでした。

「ところでお義母さん。お義母さんは幾つになりましてん？」

「松枝はん、あんたまたわたしのボケ具合を確認してまんのかいな。わたしに歳訊くちゅうのはな観音さんに歳訊くことと一緒やて教えましたやろ。人に云うたら値打ちがのうなりますねん」
「安心やわぁ〜」「何が安心やの…… 」

「だってなぁ、お義母さんちゃんと毎度同じ返事をしてくれはりますやろ。わたしにとってはこれほど安心なことがありますかいな。お義母はんはまだまだ元気や。ここ、しっ

かり摑まっといてくださいねぇ」そう云うと、湯タンポはんみたいに温かな手をわたしの手に重ねてくるのでした。

次男の雄介は四十八歳の年 (とし) に労咳 (ろうがい) を患い早逝。二十歳の長男を頭 (かしら) に十七歳の次男、十五歳の長女と残したままに鬼籍に記されましてん。親より先に逝くとはなんと親不孝…　そうも思ったものです。せやけど一番しんどい思いをしてたのは嫁の松枝ですやろなぁ。
子供三人を抱えて松枝も悩んだ時期もあったようで、しばらくは夜になると一人泣きしていたのでしょう、朝には泣き腫らした目を伏せながら、子供たちの準備をする姿が見られたものでした。突然残されまるで放り出されたように、何から何まで自分でやらなければならなくなりました。家業の質屋は早逝した雄介が継いでくれていましたから、松枝は嫁に嫁いできていたものの雄介が他界したあとは心細かったんですやろう。しばらくはかける言葉にも苦慮したもの。
それでも孫三人も、今ではみんな立派な釜戸持 (かまどもち)。その中の長女が家に残り、入り婿を取ってくれたのでした。
そんなわたしもなぁ、早くに戦争で良人 (おっと) を盗られてましたから松枝の寂しい気持ちや大変さは痛いほどわかったものでした。

あのなぁ…誰が云うたか知りまへんけどな、ももひざ三年しり八年云うてねぇ、女子 (おなご) ちゅうもんはな、後家はんになってからも腿や膝に旦那の温もりを思い出しながら泣く日々は三年にもおよぶそうでしてな、尻にあっては忘れるまでには八年もの時間が必要やちゅうんねんから、そりゃぁ松枝も寂しかったですやろうなぁ。さっさと十八年も経ってくれたらこっちのもんなんやろけど。割れ鍋にも綴じ蓋いうて、どんな鍋にもそれなりの蓋はあった方がいろいろ都合も宜しいんやろうけど。自分たちの家の中で男はんに先立たれ、残された者を見るちゅうのんは不憫でかないしまへん。
それにしても昔の人はえらい粋なことを云うたものでしたなぁ。でもな、ももひざ三年しり八年てな、きっと考えはったんは男はんなんやろねェ。これまた女子 (おなご) の業ちゅうもんをキッチリ知ってはったら、こんな三年だ八年だなんて云えますかいな。ねぇ……観音はん、堪忍したってやぁ。

その二　錫 (すず) メッキのブリキ缶

この画を眺めているとねぇ、描いてはった情景までも思い浮かべることが出来ますねん。
それは去年の秋のこと…　昭和四一年の九月も半ばを過ぎた頃…　。

毎年のことやけどなぁ、斑鳩の地を濡らす秋の長雨は夢殿さんを朧 (おぼろ) の中に包み込みますねん。伽藍周辺さえもけぶるようにうつります。

境内に敷き詰められた玉石は水にふやかした黒豆さんの様子を見せながら、伽藍の一部になったようにピクリともしまへん。涅色 (くりいろ) 云うんですやろか。

中秋の柔らかな陽ざしさえあれば、白地に薄く藍を溶かし込んだ石の姿は訪れる参詣者の足元に心地よい旋律を奏で響かせるに一役買ったことでしたやろう。

さながら天と地が繋がった合図を想わせるようで、雨をおとすお空も同じ色を見せています。それは黒豆さんをふやかした後の水で塗りつぶしたようですねん。

太く、切れ目なく堕ちる雨垂れは、吉野の平宗 (ひらむね) さんの葛 (くず) きりをお空から突き出したようにみえ、それは救世観音菩薩の功徳の顕しのようにも思へ、数多 (あまた) 患い事 (わずらいごと) からの救済を試みる蜘蛛の糸にも見えるようで、時には下から上へ降っているようでもあり、昇ってゆくようでもありと映ったものでした。

まるで足元から踏み板を外されたようで心細く頼りなくも感じられましてん。

「お千代。さて、この先どうする。進んでみるもよし、退いてみるもよし」と突きつけられてもいるようで、些かハッとさせられたものでした。

【あぁ…　何でしょう、思い出したら平宗さんの葛きりが食べたくなってきましたよ。こんな歳になっても食べたいは衰え知らぬものなんですやろか。あぁ…　今夜の夕餉は平宗さんの柿の葉寿司にしましょうか。松枝と帰りに買ってゆきましょうか…　】

わたしが法隆寺さんにお参りに来るようになってから幾度の秋を迎え送ったことですやろう。秋雨に眺め入ると現 (うつつ) と夢を行き来するようで些 (いささ) か心もとないねんなぁ。

地面から浮かび上がった雨水が境内に敷かれた玉石の隙間を埋めてます。雨は間断なく木立や伽藍、地を打つものの、境内を取り巻く仏性が幸いしてるのでしょう静寂に馴染みをみせてはります。

今また一人の老男がいつもの様に長靴を履き、纏わり (まとわり) 憑く (つく) 雨水すら慈しむように足を小さく出しながら伽藍むこうへやってきました。

この御仁、名を不染鉄というそうで、どうやら画描 (えかき) を生業 (なりわい) とするのか、足しげく通い来ては法隆寺さんや夢殿さんの画を描いてはったようです。境内で顔を合わせるようになってから既に四十年も経ちましたか。毎日毎日、雨の日も風の日も片道一里半 (６キロ) の道のりを歩いて通 (かよ) ってはったようです。

鉄さんは足元に目をやるや、足でそっと玉石を転がしながら弄 (もてあそび) はじめました。
コロン、コロン、カチン、転げた玉石はぶつかり合いながら明後日 (あさって) の方角に転げてゆきます。何やら生きているようでもあり、あらぬ方向へと転げる様子は人の一生を見せられているようにも思えたものです。
雨の中、傘を持つ手が足の動きに呼応をみせ、時折大きく右へ左へと揺れをみせはります。踊っているようにも見え、踊らされているようにも見えましてん。その姿が寂しそうでなぁ。きっと鉄さんは秋が好きなんやろうなぁ。人目を気にせず存分に泣けるから秋の雨模様が好きなんやろなぁ…。そう思ったものでした。
でもなぁ、不思議なお人でなぁ、境内を歩くときは傘のかかる範囲にしか足を運ばず、静かに歩きはるんやけどな、手を合わせるわけでもなく。お勤めをするでもない、ましてや何かを願うわけでもなく。ただひたすらと傘を手に地面に目を落とし、むこうに佇みはってねぇ、哭くでもなけりゃ憤るわけでもなく、粗忽を見せるわけでもない。それが按配寂しそうで寂しそうでなぁ…。

中にはな、博打にでも行くんですやろなあ、何人かで連れ立って来ては賽銭箱に乱暴に賽銭を放らはって柏手を打つ埒 (らち) なき男衆も見ることが出来ましたからなぁ…。
しばらく見かけぬなと思へば、長野に行っていたと善行寺土産を私とこのお店まで届けてくれる心優しきお人でした…。わたしが数年前に大病を患ってからというもの、顔を合わせるたびにわたしを気遣い声をかけてくれるのですが、どうにもわたしよりも鉄さんの方が儚 (はかな) げな按配を感じさせたものでした。

聞く処によると、東京小石川 (現在の文京区) にある浄土宗の寺、光円寺の住職の倅ということではあったものの、そのくせ背筋のシャンとしたところは覗えず、とても仏の道と近いとは思えまへんでしたなぁ。
ところが人は見てくれではわからないもの。話は聞いてみなければわからぬもの。なんでも昭和のはじめ頃には僧侶になるための検定試験である律師なる試験も修めていると聞かされたのには随分驚かされたものでした。
第二次大戦後の混乱期には女学校の校長も務めていたようで、とき折地元の女学生数名を従えてお参りする姿を見受けたものの、境内でわたしを見つけた途端、その気配引率からは甚だ遠く俯き加減に歩く様子からは引率されている気恥ずかしさが滲んで見えたものでした。

「よう降りますなぁ…　」

「はい。本当に…　」

どうということもない当たり前の挨拶が毎度のこと交わされます。

　鉄さんは風呂敷包を開くと道具箱を取り出し、雨のかからないところにイーゼルを立てます。そこに古新聞で何重にも挟み込んだ画紙を置くと画を描き始めました。
粗末な空き缶を降りしきる雨の下に何個か並べますと、立ちどころに仏性がかき消され缶を打ち付ける雨音が広がります。缶の大きさがそれぞれ違うせいなんですやろなぁ。凡ての缶から流れる音が違いましてな。それはまるで声明 (しょうみょう) のように境内に響いたものでした。

【あ…、かき消されたと思った仏さんの声は姿を変えはっただけなんやろか。缶を打つ雨音さえ愛おしく思えるのは、観音さんの成せる御業 (みわざ) なんですやろうなぁ…　】
目を閉じてその音を聞いてますとな、水琴窟いうのがありますやろ。井戸のような蹲踞 (つくばい) の小さな隙間に耳を寄せますと、一滴、一滴おちる水滴が仏さんの内緒話を聞いている様に心落ち着く音が優しく響きます。お里の内緒話もお人によっては水琴窟みたいなもんかもしれまへんなぁ…。
　カン、キン、コン、カチャ、ヒチャ…缶の中に水がほどほど溜まりだすと音が止みはじめます。
　雨のかからない庇 (ひさし) の張り出した下、鉄さんは夢殿を描いてはりました。

「いやぁ…　これはやはり描きにくいなぁ…　カンバスが湿気を吸って鉛筆が走らない」
誰に云うとは無く鉄さんが肩を落として呟きます。

「下色だけ入れておくとするか… 」

雨を受けていた空き缶を軒下に運び込むと、三十分も経っていないのに一番小さな缶には水が溢れんばかりに溜まってはりました。
「随分溜まりはったね…　お水… 」

「そうですねぇ。チョット薄めすぎですが、まぁ、下塗りなのでやれるでしょう」

鉄さんがはにかんだ笑顔を見せ答えます。

「あら、鉄さん、絵の具は入れしまへんの？」鉄さんは四つの缶にそれぞれ絵筆を放り込むと、グルグル水をかき混ぜてはったのです。
「荷物になるし雨が降っていますからね、絵の具チューブをダメにしては大変なので、予め缶の中に絵の具を塗りつけて乾かしておいたんですよ」
水がたまった四つの缶は、一つの缶を除いてどれも同じように黒豆さんをふやかした水

のように薄黒く見えているのです。
「歳のせいやろか、目も弱わなってどれも同じ色に見えるんやけど、鉄さんに違いはわかりはるの？」
鉄さんはニコリとすると、缶の側面を指さし「ほら、お千代さん、ここ見えますか？」と云いました。
　杖を頼りにチョイと前屈みになり眺め観ますと、缶の側面は「赤」「黒」「青」「白」と、釘か何かの鋭利なもので彫られているのが判りました。
銀色の缶の肌が少し錆びつき、所々茶色くザラついて見えてましなぁ。そこに傷つけられたところだけがピカピカと金彩を放って観えました。
「鉄さん…　ごめんなさいね、うるさくて。白っぽいお水は缶の横腹に白って彫ってはりますけど、これも下塗りに使いはるの？」
「使いますよ…今日は雨が強いですから画紙が湿気を吸っているので判り難いですが…
　半乾きの処にポツポツと白を置くと滲 (にじ) みや暈 (ぼか) しが花火のように広がるんです」
鉄さんは嫌な顔を一つも見せず、この歳よりの質問に機嫌よく答えてくれるのでした。
「なんだか綺麗ですねぇ…　缶の彫ったところだけがピカピカ光ってはりますねぇ…」
「今では珍しくなりましたからね、錫 (すず) メッキのブリキの缶は… 」

「錫メッキのブリキ缶ですか… そんなものがあるの… 」

そこまで云ってわたしは思い出しましたよ…わたしは錫メッキを知っていたのです… 。

◆

　わたしが十三、四のころでしたか、その日の店番は祖母のウネがしてましてな。

「お千代、茶の間の戸棚の上から二番目の引き出しを開けておくれ…そうそう、そこを開けるとね鋏なんかがあるだろ？ 」
祖母の云う通りに戸棚を開けると、そこには裁縫道具の針や糸、そして鋏やら篭手などが几帳面に整然となおされていました。
「そこに針が引っ付いた、まぁるい平べったい石みたいなものがあるかい？ 」

「うん。ある… 」

「そこの針箱に針を外して入れたらそのまぁるいのをこっちに持って来ておくれ」

そこには確かに針が引っ付いたまま散らばることのない、まぁるい平べったい石のよう

な物がありました。
　針を外しお店の祖母のもとへ持ってゆくと、西洋風の立派な身なりをし口ひげをたくわえたおじさんが立ってはりました。
「はい、ありがとさん…　」

　わたしは何が始まるのかと好奇心が抑えられず、店の番頭席を離れることが出来ずに祖母の手元を正座をしながら凝視するのでした。
　ふと目をお客さんのひざ元の上がり框 (あがりかまち) に移すと、そこには綺麗に銀色に輝く「茶道具一式」が整然と並べられていました。
【綺麗…　おてんとうさまの光を受けてピカピカ光ってはるわぁ】

とも箱もあり、筆字で箱書きが書いてあるところを見たわたしは、なにか途轍もないお宝が持ち込まれたと思ったものです。
祖母は平べったいまぁるい石の玉を自分の前に置くと、急須を手に取りそのまぁるい石のようなものの上にかざしました。
「カチン！　　」

　するとどうでしょう。その平べったい石の玉は急須に飛びつくように張り付いたのです。
「あちゃぁぁぁ…　あかんかぁ…　」

「あきまへんかぁ…　」

声を発したのは祖母とおじさんが同時でした。

わたしはその光景を見ていて何のことか皆目でした。なにがどうなっているのか、なにがあかんのかが気になって仕方がありませんでした…　。せやけどね、そのお客さんの落胆の様子を見ていると、その場で祖母に聞くことが躊躇 (ためら) われたのです。
「お千代、これを元あった場所に戻しておいてちょうだい」

その言い方からは、戻したらお店には戻ってくるなという調子が感じられましてん。
　程なくすると、お店から呼ぶ声が聞こえてきました。

「お千代、さっきの石の玉を持っておいで…　」

「はぁい」わたしはこの瞬間が大好きでしてな、祖母や母はことある毎に新しい知恵を授けてくれました。

「お千代、これはな、磁石云うてな、鉄ととても仲がええねん」

そういうと、先ほどのお客さんが置いていかはった急須に近づけると、それは祖母の指先から飛び出すように急須に張り付いたのでした。
「お婆ちゃん、うちもやってみたい… 」

「よしよし、ほなな、こうして下に置いて…こうして急須を近づけてみなはれ」

祖母は質草に傷がつくことを懸念したのでしょう。急須の底をかざすことしか許してはくれまへんでした。
「…せやけどな、この磁石っちゅうもんはな、値打ちの高いもんとの相性は良くないねん。せやから金や銀との相性は今一つちゅうこっちやな…。ほれ、そこからその簪 (かんざし) を持って来てごらん、幾つか並んでる箱がありますやろ…そうそう、それをここへ… 」
箱を祖母の前に届けると、祖母はその磁石というものを簪の上にかざしはじめました。
「これは銀やな…　これは鉄、これはええもんやねぇ…金細工や… 」

そう云いながら磁石をかざして真贋の見立てを教えてくれるのでした。

「さっきのお客さんのこれはなんやの？　　磁石が引っ付いたちゅうことは鉄なんやろう？　　なんでこんなにピカピカ光って綺麗なん？」
「錫 (すず) メッキいうてな、鉄の上から錫でメッキをかけてはるねん…せやから、磁石が吸いついてしもうたんやな… 」

　祖母はそういうと簪の並んでいる箱から金細工の施された簪を取ると、わたしの潰し島田に足りない結髪 (ゆいがみ) に刺しながら「お千代な覚えておきなはれや。人の相性云うもんはな、得てして磁石みたいなもんと思うて惹きつけられるもんを有難く思いがちやけどな、そうやないで…結局は目を養わなあかん。澄んだ目をもちなはれや…。お千代が金や銀のように値打ちの高い人間になれば、磁石は寄ってきいへんから安心やけどな…」そう言いながら優しく笑うのでした。
　あの簪が祖母の形見となるまでに、それほど時間はかかりまへんでしたなぁ。

　あら… 鉄さん…そういうたらあんたも鉄やないの、ほな、わたしが磁石かい？　　あんたが引き寄せるんだか、わたしが引き寄せられるんだか…　どちらにしても引っ付きたがるんやろうなぁ…あんたもわたしも大事な人を早くに見送ってるから…なんや他人ごとちゃうねんやろなぁ… きっと… 。

その三　鉄さんの憂鬱

「お義母さん、大丈夫ですか？　　しんどいんちゃいます？　　無理しんと休んでくださいねぇ」嫁の松枝がよう面倒みてくれはりましてえ、わたしもこうして鉄さんの描いた画を眺めに来ることができまして。それはもう本当に有難いことですわ。
「松枝はん、ゴメンねぇ…　いつもこうして摑まらしてもろて。あんた大丈夫か？　　重たいことあらしまへんか？　　」
「何いうてますのん。手綱引いてもろてるだけですやんか。なーんもしんどいことありません。あっ、お義母さん、いい席が空きましたで～　あそこに座って眺めさしてもらいましょ」

　不思議なものです。こういう時は足がこう…シャシャシャシャいうて動きますねん。丁度画の正面。少し距離はありましたけど、座って鑑ることが出来るベンチシートが空きました。
「あ～　これはいい按配だねぇ。これで少しは落ち着いて鑑られそうやねぇ」そういいながら松枝を眺め観ると、わたしが摑まっていた腰回りのゴタゴタを直してはりました。
　鉄さんの描かはった夢殿さんは、秋の長雨の中に佇む夢殿さんを描かはったものなんやけどね、太～い雨が幾筋も幾筋も画面いっぱいに垂れ堕ちてましてなぁ…　それが按配寂しそうに見えるのです。ただね、扉障子にほんの少しだけ中からの明かりが挿してましてな、その明かりがそりゃ可愛らしゅうて、可愛らしゅうて…　。
「あぁ…　あの明かりは鉄さんの魂なんやろなぁ…　早くに奥さんなくしはって、寂しい気持ちを顕した鉄さんの魂なんやろなぁ」そう思えたものでした。
夢殿さんの南の空には雲を割るように横一条の光明が射してましてな、それがまた打ち立ての真綿のように柔らかでやさしい光でした。

「松枝はん…　いい画やねぇ～私この画を鑑ているとなんか泣けてきますわ。ねぇ？」
「お義母さんは鉄さん贔屓やからねぇ～　わたしなんかこの画を観てると葛きり思い出しましてん (笑)　はぁ…　なんや葛きり食べとうなってきますわ」
　わたしは吃驚しましたよ。この子に読まれたんちゃうやろか思うて。

「松枝はん…　あんたなぁ…　似てきはったねぇ～ 」

「誰にですのん？ 」

「わたしにやないの、わたしもなさっき平宗さんの葛きり思い出しましてん…」

「お義母さん…ほな、帰りに食べて帰りましょ。晩ごはんに柿の葉寿司をこうて帰りましょ…」
長いこと一つ屋根の下、苦楽を共にして来たお蔭でしょうか、観音さんの粋なお計らいでしょうか。考えることは寸分違わずを思わせます。

「そうそう…　たしか家に鉄さんの画が一枚だけありましたなぁ…、富士山を描かはった立派な画。お義母さんあの画はどこに直しましたん？」もう二十年以上前に鉄さんからわたしが買うた画のことを松枝は思い出したようです。
「あのな、うちの柳行李わかるか？ そうそう…あの柳行李や。なに云うてますのん、捨てますかいな。お婆ちゃんに祟 (たた) られるわ。部屋の押し入れにちゃぁんとはいっているから…あんたぁ、ちゃんと引き継いだってなあの行李」
「はいはい」ほういうと松枝は私の隣に座りながら足を優しくさすってくれてます。
人の手ってな… 、なんでこうして温かくて柔らかいんですやろ…。

　わたしは孫やらひ孫やらそしてこの松枝やら…、たくさんの温かくて柔らかい手に囲まれて過ごせてますけどな、鉄さんを想うとねぇ～　自分の手しかあらしまへんやろ…なんぼお坊様の修業したゆうても、そりゃぁここまで寂しかったですやろなぁ……。

山海図絵 伊豆の追憶 公財 木下美術館収蔵.png

「ごめん下さい…　ごめん下さい」

「はぁい…　おや、鉄さん。どないしはりましたのこんな寒い日に」

今から二十年以上前…　昭和二十年の師走も半ば。鉄さんがうちの店を訪ねて来ましてん。最初に対応に出たのは早くに逝去した次男の嫁の松枝でした。
「やぁ、松枝さん。ご無沙汰してます。面目ない。じつは年末を迎えるに窮してしまい、ついては画を一枚かたに預かってもらえぬものかと…」
「わかりました。ほな、お義母さんを呼びますからチョットだけまってくださいねぇ」
　松枝が奥のわたしの部屋に来るや早口で仔細を告げるのを聞くと、わたしは「ありがとう」と一言発しお店まで転げるように出てゆきました。シャシャシャシャ…いうてなぁ。

「鉄さん、寒いところわざわざ来てくれて有り難う。なんか松枝の話しでは画を一枚預かって欲しいとか…」取り次いだ松枝は店に顔を出しません。このあたりは本当によくできた嫁でした。

「お千代さん、申し訳ない。恥を忍んでなのですが、この年の瀬、なんとも窮してしまい、無理を承知でお訪ねしました」

　さぞや居心地が悪かったのでしょう。鉄さんは正月用に番頭席に飾ったご生花の藜蘆(おもと) に鈴なる実のように顔を赤く染めながらそういうのでした。
「鉄さん…　わたしとこのお商売は値打ちがはっきりついているものにしかお貸しすることは出来しまへんね。せやから美術品や工芸品という文化的価値を評価する物差しは恥ずかしながら持ってませんねん。まずそこを許したってくださいねぇ」
「そうですかぁ… 」鉄さんは肩を落としてはりました。

「でもね鉄さん…、もしも鉄さんが良ければわたしがその画を買わしてもらいましょ」
「ええっ！　　買ってくれるのですか、わたしの画を」

「お友達の画を一枚買うぐらいがなんですの…チョット遅いぐらいですわ。はい、ほななんぼで買わしてもろたらええのんやろね」
　鉄さんはモジモジしてました。言いにくそうにモジモジと下を向いて。意を決したように一層赤く染めたお顔をあげると…。
「では、お千代さんの好意に甘えて八百円で… 、いや七百円で…」

「珍しいお人やなぁ (笑)」

「はぁ… 」

「うちとこ来るお人は皆だんだんに高向 (たこう) なっていかはるのに…　鉄さんは安うなっていかはる…そんなお人聞いたことありまへんわ (笑)　わかりました。ほな、これで買わしてもらいましょ」
　わたしが番頭席の上に用意したお金は「千五百円」でした。これでも高いか安いか分かりません。ただ七百円、八百円はギリギリですやろ。年の瀬を迎えるに窮しての七百円…　、ほな新年を迎えるには足らしまへんなぁ。わたしはそう云いながら鉄さんの手に千五百円を握らせました。
「お千代さん…、あなた画をまだ鑑てないではないですか。鑑てからにしては如何ですか」
「鉄さんがお客はんなら勿論みさせてもらいます。せやけど鉄さんはお友達です。わたしはお友達の画を買わしてもろただけ。その風呂敷に包まれた画はあとでゆっくりみさしてもらいます…、松枝はーん、はいな悪いけどね、あったかーいお茶を一杯いれてここまで持って来てくれるか。ほして、この包みを仏間へ持っていておいてな…」

◆

「あんなぁお千代。よーく覚えておくんやで。お商売先からものを買うときはな、絶対に値切ったらあかん。びた一文たりとも値切ったらあかん」祖母のうねの教えでしてん。
「でも…　みんな闇市で買い物するときに、まけてくれまれてくれっていいはるよね」
「そや。でもな、うちとこのお商売はな逆なんや。もっとくれ、もっと貸してくれ云われるやろ？」
「うん…　皆言うなぁ」

「仏さんが教えてくれる世界にはな、餓鬼道ちゅう世界があってな、この世界はとにかくもっと、もっと…、もっと、もっというて欲しがる世界でな、もっとまけろ、もっと高く…、それはそれは欲のキリのない世界なんや」
「お婆ちゃん… 、うちもなぁお母はんに時々言うてるわぁ…、もっとお飴さん頂戴て… 」
「ほうか…、ほしたらなお千代、お母はんにお飴さんもろたらな、今度はもっと頂戴って云わんときや。ほしてなお爺ちゃんのところへ行ってな、お飴さん頂戴て云うてみ。きっとお爺ちゃんもくれるから。ほしたらお千代、倍に増えるやろ。お飴さん。ほしたら誰からも小言いわれんですみますやろ」
「ほな、お婆ちゃんにお飴さん頂戴云うたら、うち…、大儲けやね (笑)」

「あかん… 、この手はお婆ちゃんには通用しまへん (笑)… 」

「ええか、闇市で買うものいうたらな、大概値段ははっきりしてるもんが多い。高かろうが安かろうが高々知れたものや。要はお商売先の儲けちゅうこっちゃな。だから値切ったらあかんのや。わたしらが値切らずに買い物したらな、お商売先がうちの質屋に来た時に、もっとくれ、もっと出してくれ…　云えんくなるやろ。人様の声いうもんは千里を走るいうてな、ほれがお商売の評判ちゅうもんになるねん。せやからな、まけてくれとは言うべからずが鉄則なんや」
　事実、祖母が買い物先でまけてくれという言葉を使ったところは見たことがありませんでしたなぁ。逆にうちとこのお店にきはったお客はんは、みな、祖母の顔を見るとあきらめたように自分で金額をいうこともなく、祖母が提示したお金をもって帰りはりました。

　昭和二一年正月の松もまだとれぬ頃…　鉄さんからの年賀状が届きましてなぁ。

ハガキの裏には朗々とした感謝の言葉と共に縁起物の画が微に入り細にわたって描き込まれてました。
「お義母さん、大切に…　画と一緒に直しておきましょうか。将来、もっと値打ちが出るかもしれまへんから (笑)」松枝が楽しそうに言葉にしました。その年から年に二度、鉄

さんからのハガキが届くようになりました。わたしが鉄さんの画の秘密に気が付いたのはこのハガキの画を観るようになってからでしたなぁ…　。

その四　鉄さんの秘密

　昭和三六年の夏の日でした。この歳の夏はそりゃぁ暑い日が続きましてなぁ。夏入り前の梅雨が空梅雨でしたから奈良県全域に渇水警報いうもんがでましてな、取水制限いうですやろか、お天道様の高い時間帯になると水道が止まってしまって、そりゃぁ往生したものでした。

そんな七月の三十日も間近のころだったと思います。松枝が嬉しそうに声を弾ませてわたしの部屋までハガキを届けてくれました。
「お義母さん、鉄さんから暑中見舞いが届きましたよ。また可愛らしい小さな家がたくさん描かれた絵ハガキ。こんな小さな家をようもこんなにたくさん描けましたなぁ、鉄さん」
「ほうかぁ、どれ、松枝はん、ちょっとそこの虫眼鏡取ってくれるか。はい、ありがとさん。どれどれ……、松枝はん……、あんた、これ家か？ わたしには黒ゴマさん潰したようにしか見えしまへんわ。ようまぁこんな小さい家をたくさん描きはったなぁ」
「でも、やっぱりあれですねぇ〜、本職の画家さんだけあって上手ですねぇ」

「ほうかぁ？ ほういうもんかいねぇ」

この頃のわたしは目がよく見えなくなっていたこともあり、チョットボケも入ってきていたんでしょうなぁ、松枝の云うことも分かったような分からぬような、おかしな按配になってきてましてなぁ。
「松枝はん……、悪いけど押し入れから柳行李をだしてくれるか」

「はいはい、行李の中の絵ハガキが入ったお煎餅の箱ですやろ？ 」

「そうそう、はいありがとう」わたしはそう云うと箱を開けて中に直しておいたハガキを出して手に取りました。
　手にした虫眼鏡で一枚一枚の絵ハガキを眺めはじめたものでした。するとそばで見ていた松枝が云うのです。
「お義母さん、鉄さんの画って風景とか景色が多いなぁ…、まあ、季節の挨拶やから当たり前かもしれへんけど」と。
　わたしは云われて改めてまじまじとその絵ハガキを見ました。

わたしはその鉄さんから送られて来た三十枚ほどの絵ハガキを手にしながら泣いてしまっていたのです。

「お義母はん、どうしはったんですか、具合でも悪いんちゃいますの？　あきまへん、チョット横んなりはった方がええんちゃいます？」松枝は一生懸命に気にかけてくれましてな、一生懸命にわたしの背中をさすってくれてましてんけどな…。
「松枝はん……、鉄さんなぁ……、寂しいねん。あの人な寂しいんよ……」私はハガキを手にしたままオイオイと泣いてしまっていたのです。
驚いたのは松枝だったでしょう。何も言わずに私の背中をポンポンと優しくはたき、さすってくれていました。
鉄さんからのハガキに描かれた画のすべてにわたしは秘密を見つけたのです。

そりゃぁねぇ、普通にご挨拶を交わすだけのご縁のお人でしたらそこまでは感じなかったかもしれまへんなぁ。
せやけどね、鉄さんとは仏さんや観音様が取り持ってくれたご縁。わたしがもう少しシャンとしてたら店を松枝に任せたまま鉄さんの面倒を見に転がり込んでたかもしれまへんなぁ……。

◆

むかぁしむかーしなぁ、私が尋常小学校から高等小学校に上がった年でしたから、そう一年生でしたやろか、せやから十歳の時でしたわ…。

「ぐーにーはん〜、ぐーにーはん、お千代のあだ名はぐーにーはん」

ある日を境に、突然降って湧いたようにわたしにあだ名が付けられましてん。最初はわたしにも何のことかわかりしまへんでした。それが毎日毎日、来る日も来る日も云われるようになりましてなぁ。
ある日、学校から帰り祖母のウネに「おカァはんは？」と尋ねると買物行ってるいわはりましてなぁ、なんか急に寂しいなって祖母の膝に突っ伏して泣いたんですわ。驚いた祖母は「どしたん？ 学校でなんかあったか？」そう優しゅうに聞いてくれました。
わたしは泣きながら祖母に聞いたものです。

「おばぁちゃん……、あんな、学校でなぁ、みんながぐーにーはん、ぐーにーはん云うねん。ぐーにーはんって、なんやろか？…」ほうしますとな、祖母が大きな声で笑い出しましてん。わたしはなんやビックリしてしまいましてなぁ。
なんや面白い漫談か何かのことかもしれへん思うたぐらいでした。ほうすると祖母は急に真面目な顔になると…。
「いいかお千代、今から云うことよう聞くんやで。これからなお千代が大きゅうなってくわな、するとな、いろんな知恵がついてくる。ほしてな、周りの人間達からかけられる言葉はもっと厳しゅうなる。言葉が無ければもっと厳しい、そりゃぁ恐ろしい態度を取られることもある。ええか、負けたらあかん。せやけどな、おばあちゃんがいう負けたらあかんちゅうのは、喧嘩をせっちゅうこっちゃないで。大人の言葉にな、臍を噛むいうてな、どうにもならない悔しさを顕した言葉があるんや」
「ほぞ？　ほぞってなんやの？」わたしがそう聞きますとなぁ、祖母はわたしのお腹のおへそをチョンチョンとつくと「ここやがな、お臍さんや」というのでした。
「お千代、おまえさんは自分で自分のお臍を噛むことが出来ますかな。……そうや、できしまへんやろ。噛めない臍を噛みたくなるほどの悔しい気持ち。それを大人たちは臍を噛む云うてますのんや。でもなお千代。噛むのは臍やないで。唇や。それもなあんたの心の唇や。うちとこのお商売はなぁ、お金を借りてくれるお人がお客はんや。ええこと教えてやろか、お千代がなぁ、大きゅうなった時にな、必ず、必ず見たことあるお人が、ほれ、あの暖簾をかき分けて入ってくる。必ずや」祖母はそこまでを云うと首だけをしゃくり上げるようにお店の暖簾を見たのでした。

「おばぁちゃん、それはうちの知っている人ちゅうこと？ 」

「そうや。同級生かもしれへん。年下のほれ…、なんちゅうたかいねぇ……、せやせやお里ちゃんかい。かもしれへん。どこの誰がいつお客はんになるかもしれへんのや。お千代…、人間の勝負処云うのはな突然来る。その時のために今は心の唇をグッと噛み締めて色んな知恵を溜めなはれや」そう云うて笑うのでした。
「わかった。わかったけどわからんのがな、ぐーにーはんってのはなんやの？」

「あぁ、それは質屋のこっちゃ。むかーしな、質屋云うもんは博打場のすぐそばにあってなぁ、博打で負けて借金こさえた人や、もうひと勝負したろおもた人たちが、身ぐるみ預けていったところやったんやなぁ。博打場ではな、五という数字をグ云うてな、ほして二は、にのままや。ほしてな、奇数を半、偶数を丁いうて二つのサイコロや花札でな、出た数字の丁半を決めるいう博打があった。五と二を足すと七やろ、質屋の七に通じますやろ。ほして七は半の目になる。せやからグーニーハンなんやなぁ……。昔はな、チョイとイカレタ博打うちは、質屋をグニ屋いうて呼んでましたからなぁ。にしてもこれまた、こまっしゃくれたガキやなぁ」祖母はそういうと声をたてて笑うのでした。

次の日、わたしが学校へ行くといつもの子達が徒党を組んで「ぐーにーはん」とわたしのあだ名を呼ぶのでした。
そこへなぁ、いつもは教室でもひとりでおる男の子が現れるやいなや、三人の男の子たちを一瞬でけり倒してしまったのです。
わたしはその光景にあっけにとられ何も言うことが出来ずただ眺めることしかできしまへんでした。
その日の午後の休み時間のことでしたか、わたしが教室に戻ってみると男の子二人が言い合いをしてましてん。言い合いしてる一人は、わたしを助けてくれた男の子でした。もう一人方は町の相談役をしている家の小倅でした。
「偉そうなことぬかすんやったらな、家の家賃払ってからにしてもらおうか」

「お前になんの関係がある！ 親のこっちゃないかい。わしに関係あるかい！」そう言い合っていたのでした。どうやらわたしを助けてくれた男の子の家は窮していたようであり、教室の中でも何となくそんな話は出ていましたが、その話を聞きつけた小倅が朝の仕返しとばかりにみんなのいる前で窮状を暴露してしまったんですなぁ。
そうなのです。朝蹴り飛ばされた中にはその小倅も入ってましてん。

それからもその男の子は教室で一人でいることが多かったようで、気になり時折みると、いつも教室の窓のそとに広がる空を眺めてはってねぇ…。雨の日も晴れの日もでしたなぁ。
あれから二十年が過ぎたころですやろか。暖簾を…、そう、こう肩をすぼませ首を前に突き出してくぐるお客はんがいらっしゃいましてなぁ。
時計をひとつポンと番頭席にぞんざいに放らはると「二千円貸してくれ」云いはります。品物をみさしてもらいましてな「七百円」しか貸せませんいうと、大きな舌打ちをするとそれでいいいわはりましてん。
「ほな、何か名前の分かるもん出してください」わたしが云うて出さはった身分証をみて驚きました。町の顔役・相談役の小倅でしてんなぁ。
向こうは知ってか知らずか、わたしの顔など一切みいしまへんでした。

お金を渡すと肩で暖簾を切るように、颯爽とお店を出ていかはりました。

【おばぁちゃん、あんたは偉いお人やったなぁ……、来ましたで、来よりましたがなぁ】わたしは一人そう笑ったものです。

わたしは鉄さんを見ていると一人でいたあの男の子のことを時折思い出したものでした。どうしてはるやら…、良い一生を送ったであろうことを観音さんに祈るのでした。

◆

鉄さんから送られ来る絵手紙の秘密、それはどのハガキにも一人の人間も描かれていなかったことだったのです。
人が住んでいる集落や、田畑が描かれたもの、そして山間の小径、冬の雪道…。どの画にも人が一人も描かれていなかったのです。寂しいんやろうなぁ。苦しいんやろうなぁ。なんて寂しさを抱えたお人なんやろう。わたしはそう泣いたものでした。
その後、鉄さんの画集が発売になると聞き、わたしはその画集を買わしてもらいましてんけどな、そりゃぁもう、小さな字で説明が埋め尽くされていましたから松枝に読んでもらいました。すると…「立派な画や大作を描こうとは思わない。寂しいんだから寂しい画を描きたい」と鉄さんの言葉が載っていたのです。
「お義母さん、鉄さん寂しかったんですなぁ」松枝がそう言葉にしました。

「寂しかったんとちゃうねん、あの人は今でもずっと寂しいままやねん」そういうとわたしはまた声をあげてオイオイ泣いたものでした。

その五　ことわり

なんですやろなぁ、なんかねぇ色んな声が聞こえてきますねん……。とおーくのほうなんですやろなぁ。これまたおかしな按配になってきましたなぁ〜、たしか画を鑑ていたはずなんやけどなぁ。ベンチに座らしてもろうて。
いろんな声が「お千代はん、お千代さん、お千代ちゃん」いうて呼んではることはわかりますねんけどお顔がみえへんよって。
なんやの、お里の声もしてるやないの……、フフッ、お里ちゃんあんたのことは声を聞いただけで分かるわ。お嫁さんたちには優しくしてやりや、せやないとあんた、閻魔さんにいじめられるで。
「お義母さん、お義母はん……、しっかりしてください、お義母はん……」松枝でっしゃろうなぁ、わたしのスポンのベルトを緩めようとでもしてるんやろうけど、不器用なこでしてなぁ。なんやベルトが取れしまへんのかいな……、松枝はん、あんまりほうして振ると、お腹の皮が擦れて痛いですやろ……。あちゃあぁぁ　あかんかぁ……痛ないわぁ。

ん？　なんて、松枝はん、なんていいはったん？　鉄さん？

こりゃあかん、あきまへん。おきにゃぁ……、松枝はん、あんたうちのズボンどうしてくれはりましてん、チャンとズボンはかせてますやろなぁ。

「お千代さん……、わたしですよ、鉄です。画、観てくれましたか？　いい画でしたか。扉口の明かりはね千代さん。あれはあなたに貰った明かりなんですよ」
　微かに見えていたはずの鉄さんのお顔が次第に暗がりに堕ちてゆくと周りの声も聞こえんようになりましてん。

　ほうしましたらな、目の前がぱぁぁっと明るくなったとおもたら…、その光の中に観音さんがおわしてなぁ、こういいよる。
「お千代、進むとき来たり」と。

「お迎えでしたんかぁ……、

あぃ～そうそう～

風も吹くなり

雲も光るなり

生きている幸福は

波間の鴎の如く縹渺と漂ひ

生きている幸福は

あなたも知っている

私もよく知っている

花のいのちはみじかくて

苦しきことのみ多かれど

風も吹くなり　雲も光るなり。

　ねえ観音さん、この詩はなぁ奈良を愛し時おり遊びに来てはった女流作家の先生が詠んだ詩なんやけどね……、お里ちゃんのとこには奈良に来るたびにフラフラと出入りしてはったらしいねんけど。なんや古道具屋が好きやちゅうて。そん度にお里が「友達が来た」いうて自慢してはってな。

禍福は糾える縄の如し。帳尻ちゅうことですなんやろねぇ。

ところで観音様、訊き難いやけどね〜あんさん幾つにならはったんかえ、えっ？ 満か数えかて……そな細かいこと気にしますかいな、あの世の理(ことわり)で」

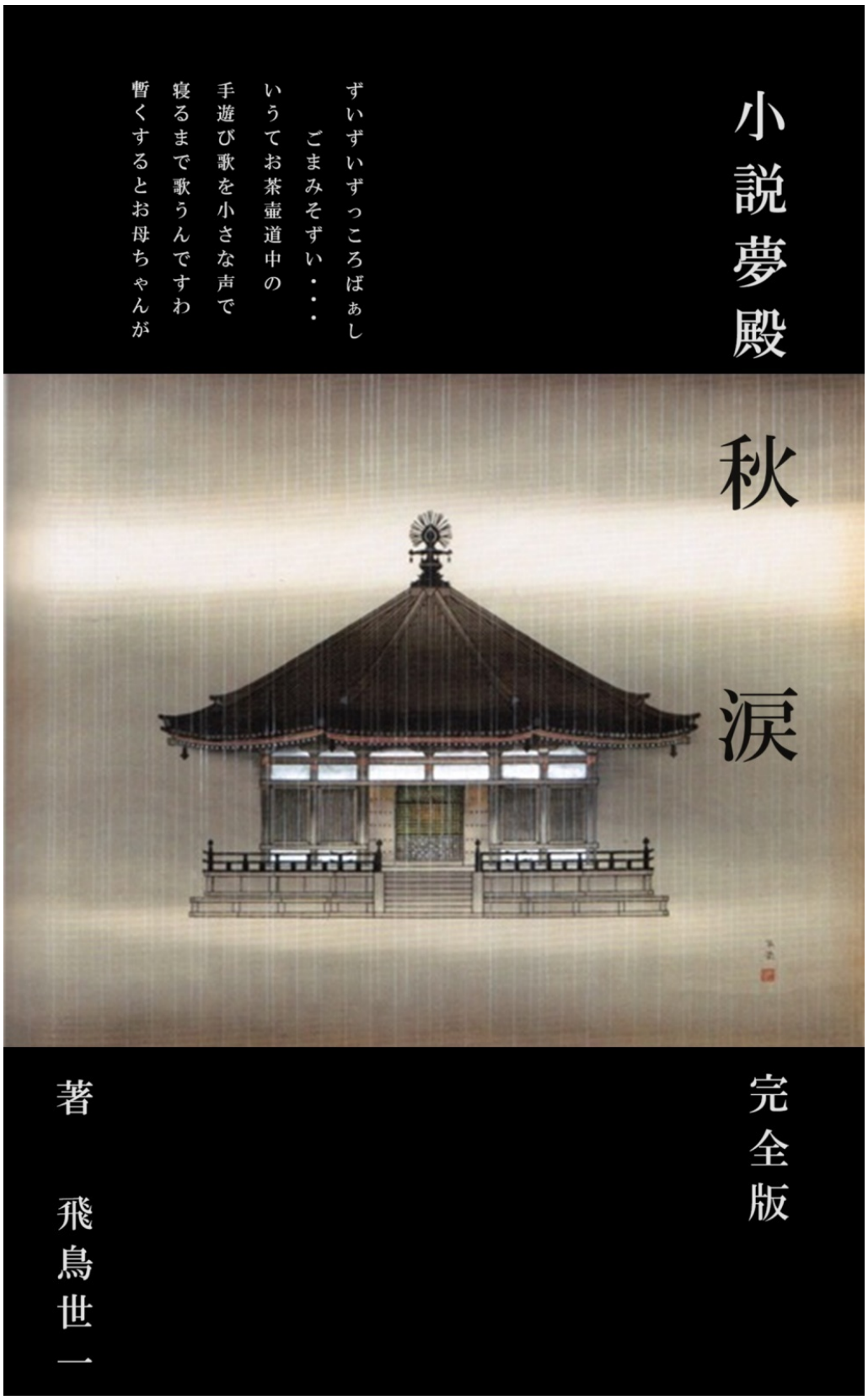
了

夢殿「秋　涙」令和六年版脱稿　令和六年二月九日　二万一七〇〇字 \newline

令和六年二月十五日\rensuji{07}:\rensuji{30}推敲済み \newline

o0629050014639236050.jpg

小説 夢殿『 秋 涙』完全版



不染鉄　夢殿 - コピー（２）.jpg

その零　二つの罰と二つの飴

「ええかお千代、お婆ちゃんの云うことしっかり聞きなはれや。お千代はお釈迦さんはわかりますな。そや、むかぁしお太子様が広められた仏様の教えを一番最初に形にしはった偉いお人や。云うたらお太子はんのお師さんみたいなお人や。そのお釈迦さんがな、生まれてすぐに七歩あるいたそうでなぁ、そのときに初めて話しはったのが天上天下唯我独尊ちゅう言葉だったらしいねん。ん？……あきまへん。そないなてんご云いはったらあかんよ。それをな屁理屈ちゅうねん。ほれお千代、お婆ちゃんの文机から半紙と硯と墨と小筆を持ってきてくれるか。硯に少しだけ水入れてな……はいありがとう。ええかぁ、今から書くからしっかり見とくんやで」

　そう云うとお婆ちゃんは墨をすりはじめましてなぁ。随分長いことゴシゴシ、ゴシゴシと墨をすってはったんやけど、私、その間ずっと正座して見てなあきまへんでしたから足がしびれて、いとうていとうて…、墨をする手が止まったときには足の感覚がのうなってましてん。

「お千代、今から書く言葉をしっかり覚えるんやで、次はお千代が書くんやから」小筆を握ると半紙の上、丁寧な筆遣いで当時満八歳の子供にはむつかしい漢字を書きはじめました。

【天上天下唯我独尊、善因善果、悪因悪果、自因自果】と。

　お婆ちゃんは一つ一つの言葉を説明してくれはりましてんけどな、ほれが毎度毎度同じ説明をするものやから長 (な) ごぅて長 (な) ごぅてかないしまへんでした。ほれがな二つ目の罰でしてんけどな、これが一番こたえましてん。

【天上天下唯我独尊、善因善果、悪因悪果、自因自果】と書かはった後から言葉の説明が朗々とつづきます。「ほなお千代の番や。上手に心を込めて十回書きなはれ」云うのですがそれで終わりしません。「待ちなはれ。硯の墨を捨てて来なはれや、ほしてな綺麗に洗うてもう一度お水を入れてきなはれ。ほしたらいちから墨をすってな、ほれからいちから書きなはれ。墨はな心を込めて力を入れて磨るんやで」と云うのです。

　硯を洗ろうて水を入れて戻って来いて随分なイケず云いますねや、足がしびれて立つことも覚束へんのに。それでもなぁこの罰が終わった後にはお爺ちゃんからの飴が待ってましたから、私は一生懸命に我慢をし、涙を堪えて書いたものでした。お爺ちゃんからのお飴さんはな紙芝居に連れて行ってくれたり、狂言につれていってくれたり、黒蜜のかかった葛切りを食べに連れて行ってくれたりで本当に愉しみでした。ありゃぁ二人で相談しはって役割分担してはったんやろねェ。お婆ちゃんがな随分陰険な役回りで気の毒やったもんで、お爺ちゃんと出かけるときは必ずお婆ちゃんにお土産買うて帰ったもんです。

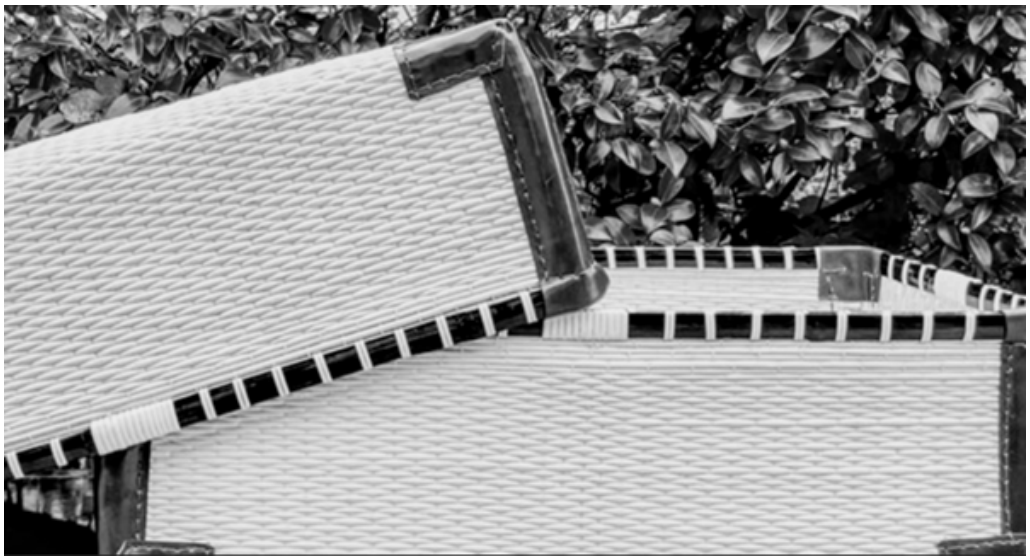
お父ちゃんの罰が一つ目の罰なんでしてんけどな、私、お父ちゃんからの罰が好きでしてん。お母ちゃんは随分心配してはって、はじめて私が柳行李に入れられ、押し入れに閉じ込められる様子を見ては涙を流してお父ちゃんを止めてはりましたわ。あのな、うちな柳行李に入れられて押し入れに閉じ込められるのが好きでしてん。なんや知らんけど落ち着きますねん。あの狭い中にいてますと。
でもな柳行李に入らんと押し入れにはいるのは嫌いでしてん。怖いですやろ落ち着きまへんやろ。
うちとこの家にはな大きな柳行李が三合 (さんごう) ありましてな、長さが四尺六寸、幅が二尺、高さがたこうてな、二尺二寸ありましたから押し入れに入れると中で蓋があきしまへん。
最初の内こそお父ちゃんも心配しはったんですやろなぁ。押し入れの前で様子を覗う気配は感じられましてんけどな、何度目ぐらいからですやろ、閉じ込めたらすぐに居なくなるようになりましてん。私なこの中で寝るのが好きでしてん。柳行李の中でな「ずいずいずっころばぁしごまみそずい……」いうてお茶壷道中の手遊び歌を小さな声で寝るまで歌うんですわ。暫くするとお母ちゃんが押し入れ障子の向こうから「お千代、お千代……怖いこと無いか？ 苦しいことないか？」いうて様子をみにきはりますねん。きっとなぁ、私の手遊び歌がむせび泣きでもしているように聞こえたんですやろなぁ。　面妖 (おかし) な子供やったわ。
今ではなぁ、鉄さんの描かはった富士山の画や鉄さんからの絵手紙やら、お婆ちゃんやお母ちゃんの形見。ほして今となっては知る者は私しかおらんようになってしもて…あの世まで持って行かにゃならん私の業 (ごう) の深さの証しがはいってますねんけどな……あぁ〜せやったわぁ、もう一人ややこしいのが知ってけつかる。ほな、他にも知ってる者はおるっちゅうことやろねぇ〜

お母ちゃんのお飴さんはな、ほんまのお飴さんでしたなぁ。

三つ子の魂百までもてよう云うたもんです。明治、大正、昭和いう三つの時代を生かさせてもろうてますねんけど、うっとこの柳行李はんが眺めてきた景色には勝てしまへん。お婆ちゃんがよう云うてましたわ。「お千代、うっとこの柳行李はんにはな付喪神 (つくもがみ) さんちゅう古いもんにつく神さんが憑いてはるからな、大事にせにゃあかんよ。この神さん粗末にしますと祟りまっせ」いうて。せやけどなお婆ちゃん、最期の一合となった大きな柳行李はんは私の代で終 (しま) いにしまひょな。目まぐるしく移り変わる昭和いうこの時代、古いものはどんどん追いやられ肩身がせもうなってますねん。質入れされるもんも変わりましたで。
あかんあかん、もううちは質草覚えられへんわ。いまどき簪 (かんざし) もってくるお人

なんかいてますかいな。テレビっちゅう電気で画の映る箱がありましてなぁ、そんなものを質入れしはるんやけど、これがな店先に飾っておきますとな直ぐに売れますねん。お客はんかえ？ フフフ… 変わらへんよ。相変わらずグニ屋はグニ屋のお客はんや。

現代っ子 (げんだいっこ) ちゅう若いもんに古いもんを引き継ぐのも、なんや因果含めるようで気の毒におもえてきます。なんせ一億総中流時代ちゅうこっちゃから、次から次へと新しいものが出てきますやろ。付喪神さんも行き場のうなってますやろなぁ。
ふふふッ〜 ここにも古いもんがありましたなぁ〜 。



柳行李

その一　満と数えのいろは坂

奈良いうところは海がないところでしてなぁ… 。

高等小学校の二年生…、云うてもわからしまへんやろなぁ。せやから歳 (とし) のころなら十一、十二歳ぐらいのことでしたやろか。明治も二十年になった頃合い。お父ちゃんやお母ちゃんにはじめて海を見せてもらいましてんけどな。

お伊勢はんへと参ったときに鳥羽ちゅう宿場に留まりましてんけど、二階建ての宿屋はそれはもうお城か法隆寺さんのご本堂のように立派に見えたものでした。
お父 (とう) ちゃんがなぁ「お千代チョットこっちにおいで」ほう云うので、お父ちゃんの座ってはる窓辺にゆきますと、それはもう見事な桔梗色した海が一面に広がってましてなぁ。西に傾きかけたお陽さんを浴びはった海がキラキラ〜キラキラいうて光ってましてん。
子供ながらに毎日こんな海が見られる三重のお人たちを羨んだものでした。宿屋の軒先では私よりも年下の子達ですやろなぁ、あちらこちらで手遊び歌うとうてたり、竹で編んだ輪を棒を使って器用に回す輪回しをして遊んではりましてんけどな、奈良ではこのころ既にブリキの輪がありましてん。せやから、輪回しと云えばブリキの輪を回して遊んでいたもので、こんな些細なところでも、あぁ〜奈良に生まれて良かったと思ったもの。手遊びはな、見てるとわかりますねんなぁ〜なんちゅうて謡いながら遊んではるか……フンフンずっころばしフフフフフン ちゅうてな。

鉄さんが描かはった画にも仰山 (ぎょうさん)、海を描かはったものがありましてんけどな。私は鉄さんの海の画を鑑 (み) るたびに鳥羽の桔梗色した海やお父ちゃんやお母ちゃんを思い出したものでした。そやったわぁ、あぁお婆ちゃんに叱られるわぁ。あのなお婆ちゃんがな、うちとこの柳行李の蓋にな、五合升摺り切り一杯のあずきはんを入れはるとな、こうして抱えると中腰のまま横に傾けながら振ってみせましてんけどな、その音がまた鳥羽の海で聞いた潮騒にそっくりでしてん。ザザザザァーッ、ザザザザーッちゅうてなぁ。お婆ちゃん、なーんも云わんとニコニコしながら私の顔だけを見て柳行李の蓋を揺らしてましたなぁ。私が昼寝におちるまで。お婆ちゃん疲れたんですやろなぁ。お座りしはってな、大事な柳行李の蓋を抱えたまま眠るように逝ってはりました。

その鉄さんがこの昭和四十二年早春、法隆寺の夢殿さんを描き上げたちゅうことで、法隆寺さんや鉄さんとの縁浅からぬお人達にむけてお披露目の展覧会が行われたのでした。

その画はね、法隆寺の夢殿さんと云われ親しまれてきた八角円堂を描 (か) かはったものでした。三重県のお伊勢さんと並び称され、一生に一度ぐらいは参ってみたい日本仏教発祥の地である奈良県は飛鳥地方にご縁起をもつ法隆寺さん。その境内伽藍 (けいだいがらん) の一つ、夢殿・八角円堂の建設発願者は聖徳太子さんです。「お太子さま・お太子さん」と親しむのは、何もこの町に住む者に限ったことでは無いようで、毎年、一月の二十日を過ぎた頃でしたか、全国の太子堂を持つお寺さんでは聖徳太子さんをお祀りした太子講が催された様子なども新聞を介して伝わります。お太子さんの寺づくりに由来されるのでしょう。建築建設に携わる会社や職人さん、物作りを生業 (なりわい) とする職人さんたちの間では、そろって無病息災、職場安全を祈願しお太子さんの遺構を称える勉強会も受けつがれていたようです。人々が暮らす上での様々なまつり事を語るう

えでも、切っても切り離すことのできないお人であり場所であり…　。
画はそんな聖地とも云えそうな法隆寺の夢殿さんを描いたものでした。

　実はね私この画を知ってましてん。いえね、正しく申し上げるのなら描いたお人と描いてはった時期を知ってましてん。だってね、描いてはるときに傍で見ていたのですから。今こうして目の前で出来上がったこの画を鑑 (み) てますとね、それはそれは昨日のことのように鮮明に思い出されてくるほどで…。めんどくさいことや都合の悪いことは忘れることが出来るようになってきましてんけどな。昨夜の夕餉 (ゆうげ) の献立すら思い出せまへんのに、どうしても忘れられないものの一つにこの画がはいっているのが不思議といえば不思議でしてなぁ。
【あぁ…　もしも忘れてしもうたらどないしよ、寂しいなぁ…　寂しいことを忘れてしまえりゃ僅かばかりの余白さんも、随分と生きやすいんやろうけど、中々そうは問屋も下ろしてくれまへん…】
　だって、夢の中まで出てきはるぐらいです。これがほんまの夢殿なんですやろなぁ…。

　この画を描いてはるお人の姿かたち。下絵を描く鉛筆を走らせる指は、私とこの神棚さんに灯す蝋燭のようにほっそりと白んで見え、しなやかな指がときには神経質そうに、ときには考えることをやめはったようにキャンバスのうえ繊細であり、大胆でありと運ばれました。あれが下塗りというものなんですやろか、水に薄っすらと色が着いた程度に暈 (ぼ) かしはった絵の具を塗る様子を見てますと、とてもこんなに美しい画になるとは想像も出来しまへんでした。お婆ちゃんなら「お千代、もっと力を入れて墨磨らにゃ色はでんよ」いうてゴシゴシやったことですやろうな。
　左手のね、人差し指と薬指に挟んだ煙草をたてはりながら、器用に親指や拳固を握った小指の付け根を使いはって下塗りの絵具を延ばしていかはる様子は、うちとこの曾孫のお絵描きと変り映えなく思えたものです。

　不染鉄 (ふせんてつ) 作・夢殿　完成披露の展示会がこうして法隆寺さんの本堂でおこなわれ、私は幸か不幸かその完成した画を鑑ることが出来ましてんけどなぁ。
冥途 (めいど) の土産なんていう例えがありますやろ… 。

　どうでっしゃろうなぁ〜どっちなんですやろか。この歳まで逝 (い) かせてもらえなかったのも、ご褒美だからこの画を鑑てからにしなさいなのか、これまで生かされてきたことへの感謝をしなさいなのか。この歳になりますとなぁ、観音さんの謎かけも有難いやら迷惑やらで、夏の日の昼下がり隣の酒屋が打ち水しますねんけどな、良かれとおもうてなんやろけど、これが毎度毎度うちとこの前までしてくれはりましてな、そのあとうちとこの店の三和土 (たたき) は決まって泥だらけになりましてん。有難迷惑ちゅうことありますやろ。こんなこと云うてたら観音さんのバチがあたりそうですわ。なにはともあれ、お陰様でもうなぁんも思い残すことなくお迎えを待つことが出来るようにな

りましてん。

◆

「お千代姉ちゃん、あんたやっぱり来てはったん？　体の塩梅 (あんばい) はもうええの？　大事にせにゃ、あかんよ、あら…今日は、松枝 (まつえ) さんも一緒なん？　ほな安心やわ良かったねぇ」
「はいな、ありがとねぇ…お里ちゃんも元気そうやね。きょうは亜由美さんもご一緒な。まだまだ寒いから、体を冷やさんといてねぇ…。お腹のお子にさわったらあかんから」
　隣町の古道具屋の古女将 (ふるおかみ)、お里も来ていたようです。高々 (たかだか) 二つほど若い、かぞえで九十二才というだけでこの云いよう。大体、あんた…「やっぱり」ってなんですのん。誰殿彼殿、チョイと名の知れたお人と見ると全部自分のお友達にせにゃ気のすまん子でしてなぁ。
　まったくいつまで人のこと姉ちゃん呼ばわりしてはるねん。云うたところで目くそさんが鼻くそさんを笑うようなもの。他人様 (よそさま) の心配はさておき、あんたとこの嫁や孫嫁の癇癪 (かんしゃく) 取りしてあげなはれや。お前さんが未だに商売にも口を出すものだから、嫁も付き添いの孫嫁も癇癪が溜まっていると愚痴をこぼしているのも評判やないの…。そんなことを考えていますとね、見透かしたようにお里のところの孫嫁は始末の悪そうな顔を見せると会釈をしてみせました。うちの松枝がお里の孫嫁と言葉を交わしはじめた頃合い「ほれ、亜由美はん行くよ。お腹のやや子に何ぞあったらうちが陰口叩かれるわ」と捨て台詞をのこすとスタスタと一人で歩いてゆきます。
　ほんまになぁ、子供のころからのことやから今さら驚くことでもないねんけどな、このお里の足腰の丈夫さと口の達者さには舌を巻いたものでした。道具屋は、目が利いては商売にならぬの例えがありますけどなぁ、ほんまに上手を云うたもの。
そうそう、むかーしこんな話がありましてんけどな… 。

【うちのお店に古着を持ち込んだご近所はんがいはってね、これでなんとか五十銭貸してくれと云わはります。その様子は当時十一、十二歳の私でも分かるほど、何かいつもより居丈高 (いたけだか) に映りましてん。
あのな、質草 (しちぐさ) もって質屋に行くときちゅうのはな、大かたのお客はんは少しこう…　肩をすぼめて暖簾 (のれん) をくぐるのが当たり前の風景でしたから、子供ながらに、この人は何をこんなに威張っているのだろうと思ったもの。
店番のお母ちゃんはそんなには貸せない。これぐらいで持ってお行きなさい…　そういうのですが頑として引き下がりません。お母ちゃんも何かの事情や理由があるのだと思わはったのでしょう。なんでそんなに自信があるのか、どう見てもそこらの呉服屋さん

の店先もの。そう誥げたのですが…、するとそのお客はんが云わはりましてん。
「ちゃうがなぁ、向こう町の古道具屋の前を通りかかったらな、あっこのおちびちゃん、お里いうたかいな、ほれが店先に出とってな、偉いなぁお手伝いかい云うたら、おっちゃん…　この服な買うてって損はないで云いよる。わしがなんでや？　　そんなあほなことあるかいな云うたらな、あのチンマイ躰 (からだ) でチョットこっち来いと手招きしよる。ほしたらわしの耳元にお参りするように両手を重ねてコチョコチョ云いはじめたやないかい。
あんな…なんでかいうたらな、買うてまたそれを売ったらええねん。お千代姉ちゃんのとこやったら、キッチリ値打ち通りにみてくれはるやんか。おっちゃんは買うて損するどころか、儲けがでるちゅう仕組みやねんな〜　。そう云いよる。これまたハシコイ子やないのよお…。あの年で男衆の急所の掴み方すら心得てけつかる。末恐ろしいガキやでほんま。せやから、買うた値段以上で預かってもらわにゃわしゃ損するがな。こんなん持って帰ったところで一人もんのわしにどうせっちゅう話しやねん」
　なんと売り付けたのはお里だったようです。お客はんはお里のその口上の余りの巧みさと、人たらしの術中にはまってしまったんですやろなあ。この時、確かお里は満で九つか十ぐらいだったはずです。わたしはお里の逞 (たくま) しさに驚き、なんという利発な子だろうと思ったのもあたり前、末恐ろしくさえ思ったものでした。
　ただお母ちゃんは違ったようです。この話を聞くや否や、持って帰るかお店の言い値でおいてゆくか、さぁ、どっちになさいます…　と畳みかけたのでした。お客はんはその剣幕に驚きはったんですやろなぁ、渋々言い値で預けてお帰りになりはりましてん。右手でこう暖簾をパシッと叩 (はた) き、肩をすぼめ、右よし、左よしと出ていかはった姿は来た時とは対照的に映りましてん。

　お母ちゃんは預かった質草を前にすると大切そうにブラシを当て綺麗に折りたたみ、虫よけのショウノウを挟むと飴色に艶をみせる大きな柳行李 (やなぎこうり) に仕舞いながらこういうのでした。
「この行李の中のものは預かりものばかりやけど…　多分引き取りには来ない人たちのものだからね、将来お千代にあげるからね…」と。その行李の横腹には、十二月十二日火の用心と墨で書かれた短冊がボロボロになりながら張り付いてましてん…　。
お母 (かあ) はん、あんなぁ…あのおっちゃんがお里ちゃんから買 (こ) うたと分かったとき、お母はん怒りはったやろ。なんで怒ったん？　　私がそう云いますと母は…
「お千代な覚えておくんやで、お商売でもそうやし友達関係や人間関係、この世の関わりの凡てはな、善敗己に由るいいましてな自分で自分の人生の責任を取らないとあきまへん。他人様を巻き込んで責任を擦り付けるようなことをしてはあかんのや。ほしたらな、お客はんとの間で何か行き違いがあって喧嘩になっても当人同士で解決できますやろう？　　でもな、他人様を巻き込むと問題はどんどん複雑に大きゅうなってゆく。因果応報やねぇ。あのお客はんはきっとお里ちゃんとこに文句を云いに行かはるやろなぁ…、話がちゃうやないかい云うて…。それとな何度も口を酸っぱくして云うてるけどな、うちとこのお商売は口の固さが何よりも大切なんや。お千代は毎日ご飯を食べはります

なぁ。ええか、ご飯の半分は口の固さのお陰やと思うとくんやで。質屋の暖簾をくぐるお客はんてな、好きでくぐるお人はいてしまへん。みんな大なり小なりの事情を抱えてくぐりはるねん。前にも教えましたやろ。道端でお客はんに会ってもうちらから挨拶はしたらアカンて。お千代はなんでか覚えてはる？ そや。うちとこのお商売はな、顔さしまんのや。せやからお客はんに迷惑かからんようにわざとに知らん振りせにゃあならんねん。お里ちゃんはな、確かにはしこい子なんやろなぁ。でもな、お利口さんかどうかは分からんなぁ」
「善因善果、悪因悪果、自因自果ちゅうこっちゃね」私がそう云うと「お婆ちゃんに感謝しにゃぁならんね」そう云いながら笑って見せたものでした】
　何ですやろなぁ。そんなことを想うと知らぬうちに懐かしくて頬と口元が緩みますねんなぁ。それにしても…お里の内緒話は昔から手をこうして合わせはってからお参りするように耳元に近づけ、キュッとこう手を菱餅さんのようにするのが癖でしたなぁ。
せやけど私に内緒話をしたことは、あんた… 一度も無かったわなぁ。

◆

「お義母 (かあ) さん、しんどいことあらしまへんか。少し座って休みはったらどうですの？　」次男の嫁の松枝が私の手を取りながら声かけてくれます。
「うん。大丈夫よ。もう少しだけお前の体を掴 (つか) ませたってな…、もうちょっと鑑ていたいから… 」
「はいはい、じゃぁここの腰のベルトの処を掴んで下さいな…」コートの裾をまくり上げると松枝は、むき出しになったベルトに私の手を掴んで導くのでした。
私と歩く松枝は踵 (かかと) の高い靴を履く処を見たことはありません。いつも、踏ん張りの利きそうなペッタンコの靴ばかり。そして立つときはお相撲さんのように股を開いて踏ん張るのです。
その姿は、新婚旅行で行った高知桂浜の土佐犬 (とさいぬ) さんの土俵入りのようでしたから、摑まらしてもろてる私は、随分可笑しいやら申し訳ないやらの思いで眺めるのが常でした。
「松枝はん、あんた幾つになりはったん？　」

「何ですの急に」松枝はそういうと口に手を当てながらワッハハと大笑い。

人目も憚らずという言葉がありますやろ。私は松枝のチョイと後ろから手綱 (たづな・ベルト) を掴んでいましたから、傍 (はた) から見ればそれはさぞかし面妖な光景でしたやろうなぁ。私達の横を通り過ぎていかはる招待客の皆はんが、その光景を眺めニコニコしながら頭を下げていかはります。

　私は松枝の手綱を握ったままそれをグイグイと左右に振り、声を潜めて「チョット、松枝はん、笑い声が大きんとちゃうの、もう少し声を落としなはれ。みんな見ていかはるから」
通り過ぎてゆくお人の殆どが顔馴染みいいますか、お知り合いみたいな方たちばかり。中には心やすくお声を掛けていかはるお人もいてはりました。会場のあちらこちらでお辞儀が大流行りです。画を愛でる会ですから言うまでもなくみんなお喋りは小声です。
そこに土佐犬さんよろしく踏ん張りをきかせた松枝。

後ろから手綱を引き締めた強力 (ごうりき) の私。

手綱 (たづな) を横に振る姿はまるで犬を落ち着かせるための仕草にも見えたかもしれまへん。
「お義母 (かあ) さん…　あんまり横に振るとお腹の皮が擦れて痛いですやん」というと口を尖らせ斜めうしろの私を見ました。すると、また噴き出して笑いはじめたのです。余程、私の顔が恥ずかしそうにしていたのですやろなぁ「はいはい、ごめんごめん」というと、松枝は正面に向き直り「ちょっと前に六十三になりました…　あっ、満でね、満で」というのでした。「ほな、数えでいうたら…　」私がそこまでいうと、松枝は「はいはい、六十五です」と先にまわっていうのです。
「お義母さんのその癖は治りしまへんなぁ…　」松枝は優しそうな笑顔を見せると振り返りながらそういうのでした。
「せやなぁ…　以前なら自分の歳いうときは満でしかいわんかったけど、人の歳聞いたあと必ず満か数えか確認するものなぁ…　」
「そうそう…　でもね、その気持ち、私も分かるようになってきましたわ」

「そうですやろう…　そうなってきますねんて…　私、観音さんにも歳聞くと思うわ…　」
「お義母さんのことやから、きっと、数えで教えてやって云いはるんでしょうなぁ…　」松枝はそういうと首をすくめてみせるのでした。

「ところでお義母さん。お義母さんは幾つになりましてん？」

「松枝はん、あんたまた私のボケ具合を確認してまんのかいな。私に歳訊くちゅうのはな、観音さんに歳訊くことと一緒やて教えましたやろ。人に云うたら値打ちがのうなりますねん」
「安心やわぁ」「何が安心やの…… 」

「だってなぁ、お義母さんちゃんと毎度同じ返事をしてくれはりますやろ。私にとってはこれほど安心なことがありますかいな。お義母はんはまだまだ元気や。ここ、しっかり摑まっといてくださいねぇ」そう云うと、湯たんぽはんみたいに温かな手を私の手に重ねてくるのでした。

次男の雄介は四十八歳の年 (とし) に労咳 (ろうがい) を患い早逝。二十歳の長男を頭 (かしら) に十七歳の次男、十五歳の長女と残したままに鬼籍に記されましてん。親より先に逝くとはなんと親不孝…　そうも思ったものです。せやけど一番しんどい思いをしてたのは嫁の松枝ですやろなぁ。
子供三人を抱えて松枝も悩んだ時期もあったようでしばらくは夜になると一人泣きしていたのでしょう、朝には泣き腫らした目を伏せながら、子供たちの準備をする姿が見られたものでした。突然残され、まるで放り出されたように、何から何まで自分でやらなければならなくなりました。家業の質屋は早逝した雄介が継いでくれていましたから、松枝は嫁に嫁いできていたものの雄介が他界したあとはやはり心細かったんですやろう。
しばらくはかける言葉にも苦慮したもの。それでも孫三人も、今ではみんな立派な釜戸持 (かまども) ち。その中の長女が家に残り、入り婿を取ってくれたのでした。
　そんな私もなぁ、早くに戦争で良人 (おっと) を盗られてましたから松枝の寂しい気持ちや大変さは痛いほどわかったものでした。

　あのなぁ…誰が云うたか知りまへんけどな、ももひざ三年しり八年云うてねぇ、女子 (おなご) ちゅうもんはな、後家はんになってからも腿や膝に旦那の温もりを思い出しながら泣く日々は三年にもおよぶそうでしてな、尻にあっては忘れるまでには八年もの時間が必要やちゅうんねんから、そりゃぁ松枝も寂しかったですやろうなぁ。さっさと十八年も経ってくれたらこっちのもんなんやろけど。割れ鍋にも綴じ蓋いうて、どんな鍋にもそれなりの蓋はあった方がいろいろ都合も宜しいんやろうけど。自分たちの家の中で、男はんに先立たれ、残された者を見るちゅうのんは不憫でかないしまへん。
　それにしても昔の人はえらい粋なことを云うたものでしたなぁ。でもな、ももひざ三年しり八年てな、きっと考えはったんは男はんなんやろねェ。これまた女子 (おなご) の業ちゅうもんをキッチリ知ってはったら、こんな三年だ八年だなんて云えますかいな。ねぇ……観音はん、堪忍したってやぁ。

その二　錫 (すず) メッキのブリキ缶

　この画を眺めているとねぇ、描いてはった情景までも思い浮かべることが出来ますねん。

それは去年の秋のこと…　昭和四十一年の九月も半ばを過ぎた頃…　。

　毎年のことやけどなぁ、斑鳩の地を濡らす秋の長雨は夢殿さんを朧 (おぼろ) の中に包み込みますねん。伽藍周辺さえもけぶるようにうつります。
境内に敷き詰められた玉石は水にふやかした黒豆さんの様子を見せながら、伽藍の一部になったようにピクリともしまへん。涅色 (くりいろ) いうんですやろか。
中秋の柔らかな陽ざしさえあれば、白地に薄く藍を溶かし込んだ石の姿は訪れる参詣者の足元に心地よい旋律を奏で響かせるに一役買ったことでしたやろう。
さながら天と地が繋がった合図を想わせるようで、雨をおとすお空も同じ色を見せています。それは黒豆さんをふやかした後の水で塗りつぶしたようですねん。
　太く、切れ目なく堕ちる雨垂れは、吉野の平宗 (ひらむね) さんの葛 (くず) きりをお空から突き出したようにみえ、それは救世観音菩薩の功徳の顕しのようにも思へ、数多患い事 (あまたわずらいごと) からの救済を試みる蜘蛛の糸にも見えるようで、時には下から上へ降っているようでもあり、昇ってゆくようでもありと映ったものでした。
　まるで足元から踏み板を外されたようで、心細く頼りなくも感じられましてん。

「お千代。さて、この先どうする。進んでみるもよし、退いてみるもよし」と突きつけられてもいるようで、些かハッとさせられたものでした。
【あぁ…　何でしょう、思い出したら平宗さんの葛きりが食べたくなってきましたよ。こんな歳になっても食べたいは衰え知らぬものなんですやろか。あぁ…　今夜の夕餉は平宗さんの柿の葉寿司にしましょうか。松枝と帰りに買ってゆきましょうか…　】

　私が法隆寺さんにお参りに来るようになってから幾度の秋を迎え送ったことですやろう。秋雨に眺め入ると現 (うつつ) と夢を行き来するようで些 (いささ) か心もとないねんなぁ。
地面から浮かび上がった雨水が、境内に敷かれた玉石の隙間を埋めてます。雨は間断なく木立や伽藍、地を打つものの境内を取り巻く仏性が幸いしてるのでしょう静寂に馴染みをみせてはります。
　今また一人の老男がいつもの様に長靴を履き、纏わり憑く (まとわりつく) 雨水すら慈しむように足を小さく出しながら伽藍むこうへやってきました。
この御仁、名を不染鉄というそうで、どうやら画描 (えかき) を生業 (なりわい) とするのか、足しげく通い来ては法隆寺さんや夢殿さんの画を描いてはったようです。境内で顔を合わせるようになってから既に四十年も経ちましたか。毎日毎日、雨の日も風の日も片道一里半 (６キロ) の道のりを歩いて通ってはったようです。
　鉄さんは足元に目をやるや、足でそっと玉石を転がしながら弄 (もてあそび) はじめました。
コロン、コロン、カチン、転げた玉石はぶつかり合いながら明後日 (あさって) の方角に

転げてゆきます。何やら生きているようでもあり、あらぬ方向へと転げる様子は人の一生を見せられているようにも思えたものです。

雨の中、傘を持つ手が足の動きに呼応をみせ、時折大きく右へ左へと揺れをみせはります。踊っているようにも見え、踊らされているようにも見えましてん。その姿が寂しそうでなぁ。きっと鉄さんは秋が好きなんやろうなぁ。人目を気にせず存分に泣けるから秋の雨模様が好きなんやろなぁ…。そう思ったものでした。

でもなぁ、不思議なお人でなぁ、境内を歩くときは傘のかかる範囲にしか足を運ばず、静かに歩きはるんやけどな、手を合わせるわけでもなく。お勤めをするでもない、ましてや何かを願うわけでもなく、ただひたすらと傘を手に地面に目を落とし、むこうに佇みはってねぇ、哭くでもなけりゃ憤るわけでもなく、粗忽を見せるわけでもない。それが塩梅寂しそうで寂しそうでなぁ…。

中にはな、博打にでも行くんですやろなあ、何人かで連れ立って来ては賽銭箱に乱暴に賽銭をを放らはって柏手を打つ埒 (らち) なき男衆も見ることが出来ましたからなぁ…。

しばらく見かけぬなと思へば、長野に行っていたと善行寺土産を私とこのお店まで届けてくれる心優しきお人でした…。私が数年前に大病を患ってからというもの、顔を合わせるたびに私を気遣い声をかけてくれるのですが、どうにも私よりも鉄さんの方が儚 (はかな) げな塩梅を感じさせたものでした。

聞く処によると、東京小石川 (現在の文京区) にある浄土宗の寺、光円寺の住職の倅ということではあったものの、そのくせ背筋のシャンとしたところは覗えず、とても仏の道と近いとは思えまへんでしたなぁ。ところが人は見てくれではわからないもの。話は聞いてみなければわからぬもの。なんでも昭和のはじめ頃には僧侶になるための検定試験である、律師なる試験も修めていると聞かされたのには随分驚かされたものでした。第二次大戦後の混乱期には女学校の校長も務めていたようで、とき折、地元の女学生数名を従えてお参りする姿を見受けたものの、境内で私を見つけた途端、その気配、引率からは甚だ遠く俯き加減に歩く様子からは、引率されている気恥ずかしさが滲んで見えたものでした。

「よう降りますなぁ…　」

「はい。本当に…　」

どうということもないあたり前の挨拶が毎度のこと交わされます。

鉄さんは風呂敷包を開くと道具箱を取り出し、雨のかからないところにイーゼルを立てます。そこに古新聞で何重にも挟み込んだ絵絹のキャンバスを開くと鉛筆で下画を描き始めました。粗末な空き缶を降りしきる雨の下に何個か並べますと、立ちどころに仏性がかき消され缶を打ち付ける雨音が広がります。缶の大きさがそれぞれ違うせいなん

ですやろなぁ。凡ての缶から流れる音が違いましてな。それはまるで声明 (しょうみょう) のように境内に響いたものでした。
【あ…、かき消されたと思った仏さんの声は姿を変えただけなのだ、缶を打つ雨音さえ愛おしく思えるのは、観音さんの成せる御業 (みわざ) なんですやろうなぁ…　】
目を閉じてその音を聞いてますとな、水琴窟いうのがありますやろ。井戸のような蹲踞 (つくばい) の小さな隙間に耳を寄せますと、一滴、一滴おちる水滴が仏さんの内緒話を聞いている様に心落ち着く音が優しく響きます。お里の内緒話もお人によっては水琴窟みたいなもんかもしれまへんなぁ…。
カン、キン、コン、カチャ、ヒチャ…缶の中に水がほどほど溜まりだすと音が止みはじめます。
雨のかからない庇 (ひさし) の張り出した下、鉄さんは夢殿を描いてはりました。

「いやぁ…　これはやはり描きにくいなぁ…　カンバスが湿気を吸って鉛筆が走らない」誰に云うとは無く鉄さんが肩を落として呟きます。

「下色だけ入れておくとするか… 」

雨を受けていた空き缶を軒下に運び込むと、三十分も経っていないのに一番小さな缶には水が溢れんばかりに溜まってはりました。
「随分溜まりはったね…　お水… 」

「そうですねぇ。チョット薄めすぎですが、まぁ、下塗りなのでやれるでしょう。全体の雰囲気を顕すだけですから」鉄さんがはにかんだ笑顔を見せ答えます。
「あら、鉄さん、絵の具は入れしまへんの？」鉄さんは四つの缶にそれぞれ絵筆を放り込むと、グルグル水をかき混ぜてはったのです。
「荷物になるし雨が降っていますからね、絵の具チューブをダメにしては大変なので、予め缶の中に絵の具を塗りつけて乾かしておいたんですよ」
水がたまった四つの缶は、一つの缶を除いてどれも同じように黒豆さんをふやかした水のように薄黒く見えているのです。
「歳のせいやろか、目も弱わなってどれも同じ色に見えるんやけど、鉄さんに違いはわかりはるの？」鉄さんはニコリとすると、缶の側面を指さし「ほら、お千代さん、ここ見えますか？」と云いました。杖を頼りにチョイと前屈みになり眺め観ますと、缶の側面は「赤」「黒」「青」「白」と、釘か何かの鋭利なもので彫られているのが判りました。銀色の缶の肌が少し錆びつき、所々茶色くザラついて見えてましなぁ。そこに傷つけられたところだけがピカピカと金彩を放って観えました。
「鉄さん…　ごめんなさいね、うるさくて。白っぽいお水は缶の横腹に白って彫ってはりますけど、これも下塗りに使いはるの？」
「使いますよ…今日は雨が強いですからキャンバスが湿気を吸っているので判り難いですが…　半乾きの処にポツポツと白を置くと滲 (にじ) みや暈 (ぼか) しが花火のように広がるんです」

鉄さんは嫌な顔を一つも見せず、この歳よりの質問に機嫌よく答えてくれるのでした。
「なんだか綺麗ですねぇ…　缶の彫ったところだけがピカピカ光ってはりますねぇ…」
「今では珍しくなりましたからね、錫 (すず) メッキのブリキの缶は… 」

「錫メッキのブリキ缶ですか… そんなものがあるの… 」

そこまで云って、私は思い出しましたよ…私は錫メッキを知っていたのです… 。

■

　私が十三、四のころでしたか、その日の店番は祖母のウネがしてましてな。

「お千代、茶の間の戸棚の上から二番目の引き出しを開けておくれ…そうそう、そこを開けるとね、鋏なんかがあるだろ？ 」
祖母の云う通りに戸棚を開けると、そこには裁縫道具の針や糸、そして鋏やら篭手などが几帳面に整然となおされていました。
「そこに針が引っ付いた、まぁるい平べったい石みたいなものがあるかい？ 」

「うん。ある… 」

「そこの針箱に針を外して入れたらそのまぁるいのをこっちに持って来ておくれ」

そこには確かに針が引っ付いたまま散らばることのない、まぁるい平べったい石のような物がありました。
針を外しお店のお婆ちゃんのもとへ持ってゆくと、西洋風の立派な身なりをし口ひげをたくわえたおじさんが立ってはりました。
「はい、ありがとさん…　」

　私は何が始まるのかと好奇心が抑えられず、店の番頭席を離れることが出来ずにお婆ちゃんの手元を正座をしながら凝視するのでした。
　目をお客さんのひざ元、上がり框 (あがりかまち) にうつすとな、そこには綺麗に銀色に輝く「茶道具一式」が整然と並べられていました。
【綺麗…　おてんとうさまの光を受けてピカピカ光ってはるわぁ】

とも箱もあり、筆字で箱書きが書いてあるところを見た私は、なにか途轍もないお宝が持ち込まれたと思ったものです。

お婆ちゃんは平べったいまぁるい石の玉を自分の前に置くと、急須を手に取りそのまぁるい石のようなものの上にかざしました。
「カチン！　」

　するとどうでしょう。その平べったい石の玉は急須に飛びつくように張り付いたのです。
「あちゃぁぁぁ…　あかんかぁ…　」

「あきまへんかぁ…　」

声を発したのは祖母とおじさんが同時でした。

私はその光景を見ていて何のことか皆目でした。なにがどうなっているのか、なにがあかんのかが気になって仕方がありません。せやけどね、そのお客さんの落胆の様子を見ていると、その場でお婆ちゃんに聞くことが躊躇 (ためら) われたのです。
「お千代、これを元あった場所に戻しておいてちょうだい」

その云い方からは、戻したらお店には戻ってくるなという調子が感じられましてん。
程なくすると、お店から呼ぶ声が聞こえてきました。

「お千代、さっきの石の玉を持っておいで…　」

「はぁい」私はこの瞬間が大好きでしてな、祖母や母はことある毎に新しい知恵を授けてくれました。
「お千代、これはな、磁石云うてな、鉄ととても仲がええねん」

そういうと、先ほどのお客さんが置いていかはった急須に近づけると、それは祖母の指先から飛び出すように急須に張り付いたのでした。
「お婆ちゃん、私もやってみたい… 」

「よしよし、ほなな、こうして下に置いて…こうして急須を近づけてみなはれ」質草に傷がつくことを懸念したのでしょう。急須の底をかざすことしか許してはくれまへんでした。
「…せやけどな、この磁石っちゅうもんはな、値打ちの高いもんとの相性は良くないねん。せやから金や銀との相性は今一つちゅうこっちやな…。ほれ、そこからその簪 (かんざし) を持って来てごらん、幾つか並んでる箱がありますやろ…そうそう、それをここへ… 」
箱をお婆ちゃんの前に届けると、その磁石というものを簪の上にかざしはじめました。
「これは銀やな…　これは鉄、これはええもんやねぇ…金細工や… 」

そう云いながら磁石をかざして真贋の見立てを教えてくれるのでした。

「さっきのお客さんのこれはなんやの？　磁石が引っ付いたちゅうことは鉄なんやろう？　なんでこんなにピカピカ光って綺麗なん？」
「錫 (すず) メッキいうてな、鉄の上から錫でメッキをかけてはるねん…せやから、磁石が吸いついてしもうたんやな… 」
　そういうと簪の並んでいる箱から金細工の施された簪を取ると、私の潰し島田に足りない結髪 (ゆいがみ) に刺しながら「お千代な覚えておきなはれや。人の相性云うもんはな、得てして磁石みたいなもんと思うて惹きつけられるもんを有難く思いがちやけどな、そうやないで…結局は目を養わなあかん。澄んだ目をもちなはれや…。お千代が金や銀のように値打ちの高い人間になれば、磁石は寄ってきいへんから安心やけどな…」そう言いながら優しく笑うのでした。
あの簪がお婆ちゃんの形見となるまでに、それほど時間はかかりまへんでしたなぁ。
あら… 鉄さん…そういうたらあんたも鉄やないの、ほな、私が磁石かい？　あんたが引き寄せるんだか、私が引き寄せられるんだか…　どちらにしても引っ付きたがるんやろうなぁ…あんたも私も大事な人を早くに見送ってるから…なんや他人ごとちゃうねんやろなぁ… きっと… 。

その三　鉄さんの憂鬱

「お義母さん、大丈夫ですか？　しんどいんちゃいます？　無理しんと休んでくださいねぇ」嫁の松枝がよう面倒みてくれはりましてえ、私もこうして鉄さんの描いた画を眺めに来ることができまして。それはもう本当に有難いことですわ。
「松枝はん、ゴメンねぇ…　いつもこうして摑まらしてもろて。あんた大丈夫か？　重たいことあらしまへんか？　」
「何いうてますのん。手綱引いてもろてるだけですやんか。なーんもしんどいことありません。あっ、お義母さん、いい席が空きましたで～　あそこに座って眺めさしてもらいましょ」
不思議なものです。こういう時は足がこう…シャシャシャシャいうて動きますねん。丁度画の正面。少し距離はありましたけど、座ってみることが出来るベンチシートが空きました。
「あ～　これはいい塩梅 (あんばい) だねぇ。これで少しは落ち着いてみられそうやねぇ」そういいながら松枝を眺め観ると、私が摑まっていた腰回りのゴタゴタを直しておりま

した。

　鉄さんの描かはった夢殿さんは秋の長雨の中に佇む夢殿さんを描かはったものなんやけどね、太〜い雨が幾筋も幾筋も画面いっぱいに垂れ堕ちてましてなぁ…　それが寂しそうに見えるのです。ただね、扉障子にほんの少しだけ、中からの明かりが挿してましてな、その明かりがそりゃ可愛らしゅうて、可愛らしゅうて…　。
「あぁ…　あの明かりは鉄さんの魂なんやろなぁ…　早くに奥さんなくしはって、寂しい気持ちを顕した鉄さんの魂なんやろなぁ」そう思えたものでした。
夢殿さんの南の空には雲を割るように横一条の光明が射してましてな、それがまた打ち立ての真綿のように柔らかでやさしい光でした。

　せやけどな私この画の本当の秘密をみつけてましてん。あのな、浬色 (くりいろ) やら黒豆さんをふやかした色やらの暗い色ありますやろ〜ほれな凡てが銀色ですねん。丁寧に細かぁに銀を挿してますねん。暗い銀、明るい銀、青みがかった銀…色々な銀をな。雨はなぁ金色ですねん。薄くて分らしまへんけどな、鑑る角度を変えてなぁ斜め横から鑑るとな夢殿はんを打ち付ける雨や、画面いっぱいに広がる雨が金挿しで描かれてることがわかりますねん。うちらが座るベンチシートから眺めただけではわかりしまへんねん。水墨画に見紛うかもしれまへん。不思議な画なんですわ。

「松枝はん…　いい画やねぇ〜私この画を鑑ているとなんか泣けてきますわ。ねぇ？」
「お義母さんは鉄さん贔屓やからねぇ〜　私なんかこの画を観てると、葛きり思い出しましてん (笑)　はぁ…　なんや葛きり食べとうなってきますわ」
　私は吃驚しましたよ。この子に読まれたんちゃうやろか思うて。

「松枝はん…　あんたなぁ…　似てきはったねぇ〜 」

「誰にですのん？ 」

「私にやないの、私もな、さっき平宗さんの葛きり思い出しましてん…」

「お義母さん…ほな、帰りに食べて帰りましょ。晩ごはんに柿の葉寿司をこうて帰りましょ…」
長いこと一つ屋根の下、苦楽を共にして来たお蔭でしょうか、観音さんの粋なお計らいでしょうか。考えることは寸分違わずを思わせます。
「そうそう…　たしか家に鉄さんの画が一枚だけありましたなぁ…、富士山を描かはった立派な画。お義母さんあの画はどこに直しましたん？」もう二十年以上前に鉄さんから私が買うた画のことを松枝は思い出したようです。

「あのな、私の柳行李わかるか？ そうそう…あの柳行李や。なに云うてますのん、捨てますかいな。お婆ちゃん化けて出てくるわ。私の部屋の押し入れにちゃぁんとはいっているから…あんたぁ、ちゃんと引き継いだってなあの画。行李？ 行李か。行李はもうええから私が逝ったら細かぁに崩して捨ててしまいなはれ。中に入っているものは全部あんたにあげるけどな、せやけどあれや……あの風呂敷で包んだちんまい茶箱だけはあかんで。あれたげは風呂敷きほどいてもあかんし、茶箱を開けるのはもってのほかや。あれはあのまま棺桶に入れて一緒に焼いてくれなはれ。あれだけはな……他はなぁーんもいらへん」
「はいはい。風呂敷包みのことはようとわかってます」ほういうと松枝は私の隣に座りながら足を優しくさすってくれてます。
　人の手ってな…、なんでこうして温かくて柔らかいんですやろ…。私は孫やらひ孫やらそしてこの松枝やら…、たくさんの温かくて柔らかい手に囲まれて過ごせてますけどな、鉄さんを想うとねぇ〜　自分の手しかあらしまへんやろ…なんぼお坊様の修業したゆうても、そりゃぁここまで寂しかったですやろなぁ……。

◆

「ごめん下さい…　ごめん下さい」

「はぁい…　おや、鉄さん。どないしはりましたのこんな寒い日に」

今から二十年以上前…　昭和二十年の師走も半ば。鉄さんがうちの店を訪ねて来ましてん。最初に対応に出たのは早くに逝去した次男の嫁の松枝でした。
「やぁ、松枝さん。ご無沙汰してます。面目ない。じつは年末を迎えるに窮してしまい、ついては画を一枚かたに預かってもらえぬものかと…」
「わかりました。ほな、お義母さんを呼びますからチョットだけまってくださいねぇ」
　松枝が奥の私の部屋に来るや早口で仔細を告げるのを聞くと、私は「ありがとう」と一言発しお店まで転げるように出てゆきました。シャシャシャシャ…いうてなぁ。
「鉄さん、寒いところわざわざ来てくれて有り難う。なんか松枝の話しでは画を一枚預かって欲しいとか…」取り次いだ松枝は店に顔を出しません。このあたりは本当によくできた嫁でした。
「お千代さん、申し訳ない。恥を忍んでなのですが、この年の瀬、なんとも窮してしまい、無理を承知でお訪ねしました」
さぞや居心地が悪かったのでしょう。鉄さんは正月用に番頭席に飾ったご生花の藜蘆 (おもと) に鈴なる実のように、顔を赤く染めながらそういうのでした。
「鉄さん…　私とこのお商売は値打ちがはっきりついているものにしかお貸しすることは出来しまへんね。せやから、美術品や工芸品という文化的価値を評価する物差しは恥

ずかしながら持ってませんねん。まずそこを許したってくださいねぇ」
「そうですかぁ… 」鉄さんは肩を落としてはりました。

「でもね鉄さん…、もしも鉄さんが良ければ私がその画を買わしてもらいましょ」

「ええっ！　買ってくれるのですか、私の画を」

「お友達の画を一枚買うぐらいがなんですの…チョット遅いぐらいですわ。はい、ほななんぼで買わしてもろたらええのんやろね」
　鉄さんはモジモジしてました。言いにくそうにモジモジと下を向いて。意を決したように一層赤く染めたお顔をあげると…。
「では、お千代さんの好意に甘えて八百円で… 、いや七百円で…」

「珍しいお人やなぁ (笑)」

「はぁ… 」

「うちとこ来るお人は皆だんだんに高向 (たこう) なっていかはるのに…　鉄さんは安うなっていかはる…そんなお人聞いたことありまへんわ (笑)　わかりました。ほな、これで買わしてもらいましょ」
　私が番頭席の上に用意したお金は千五百円でした。これでも高いか安いか分かりしません。ただ七百円、八百円はギリギリですやろ。年の瀬を迎えるに窮しての七百円…　、ほな新年を迎えるには足らしまへんなぁ。私はそう云いながら鉄さんの手に千五百円を握らせました。
「お千代さん…、あなた画をまだ鑑てないではないですか。鑑てからにしては如何ですか」
「鉄さんがお客はんなら、勿論みさせてもらいます。せやけど鉄さんはお友達です。私はお友達の画を買わしてもろただけ。その風呂敷に包まれた画は、あとでゆっくりみさしてもらいます…、松枝はーん、はいな悪いけどね、あったかーいお茶を一杯いれてここまで持って来てくれるか。ほして、この包みを仏間へ持っていっておいてな…」

◆

「あんなぁお千代。よーく覚えておくんやで。お商売先からものを買うときはな、絶対に値切ったらあかん。びた一文たりとも値切ったらあかん。」祖母のうねの教えでしてん。
「でも…　みんな闇市で買い物するときに、まけてくれまれてくれっていいはるよね」
「そや。でもな、うちとこのお商売はな逆なんや。もっとくれ、もっと貸してくれ云わ

れるやろ？」
「うん…　皆言うなぁ」

「仏さんが教えてくれる世界にはな、餓鬼道ちゅう世界があってな、この世界はとにかくもっと、もっと…、もっと、もっというて欲しがる世界でな、もっとまけろ、もっと高く…、それはそれは欲のキリのない世界なんや」
「お婆ちゃん… 、私もなぁお母はんに時々言うてるわぁ…、もっとお飴さん頂戴て… 」
「ほうか…、ほしたらなお千代、お母はんにお飴さんもろたらな、今度はもっと頂戴って云わんときや。ほしてなお爺ちゃんのところへ行ってな、お飴さん頂戴て云うてみ。きっとお爺ちゃんもくれるから。ほしたらお千代、倍に増えるやろ。お飴さん。ほしたら誰からも小言いわれんですみますやろ」
「ほな、お婆ちゃんにお飴さん頂戴云うたら、私… 、大儲けやね (笑)」

「あかん… 、この手はお婆ちゃんには通用しまへん (笑)… 」

「ええか、闇市で買うものいうたらな、大概値段ははっきりしてるもんが多い。高かろうが安かろうが高々知れたものや。要はお商売先の儲けちゅうこっちゃな。だから値切ったらあかんのや。私らが値切らずに買い物したらな、お商売先がうちの質屋に来た時に、もっとくれ、もっと出してくれ…　云えんくなるやろ。人様の声いうもんは千里を走るいうてな、ほれがお商売の評判ちゅうもんになるねん。せやからな、まけてくれとは言うべからずが鉄則なんや」
　事実、祖母が買い物先でまけてくれという言葉を使ったところは見たことがありませんでしたなぁ。逆にうちとこのお店にきはったお客はんは、みな、祖母の顔を見るとあきらめたように自分で金額をいうこともなく、祖母が提示したお金をもって帰りはりました。

　昭和二十一年正月の松もまだとれぬ頃…　鉄さんからの年賀状が届きましてなぁ。
ハガキの裏には朗々とした感謝の言葉と共に縁起物の画が微に入り細にわたって描き込まれてました。
「お義母さん、大切に…　画と一緒に直しておきましょうか。将来、もっと値打ちが出るかもしれまへんから (笑)」松枝が楽しそうに言葉にしました。その年から年に二度、鉄さんからのハガキが届くようになりました。私が鉄さんの画の秘密に気が付いたのはこのハガキの画を観るようになってからでしたなぁ…　。

その四　鉄さんの秘密

昭和三十六年の夏の日でした。この歳の夏はそりゃぁ暑い日が続きましてなぁ。夏入り前の梅雨が空梅雨でしたから奈良県全域に渇水警報いうもんがでましてな、取水制限いうですやろか、お天道様の高い時間帯になると水道が止まってしまって、そりゃぁ往生したものでした。

　そんな七月の三十日も間近のころだったと思います。松枝が嬉しそうに声を弾ませて私の部屋までハガキを届けてくれました。

「お義母さん、鉄さんから暑中見舞いが届きましたよ。また可愛らしい小さな家がたくさん描かれた絵ハガキ。こんな小さな家をようもこんなにたくさん描けましたなぁ、鉄さん」

「ほうかぁ、どれ、松枝はん、ちょっとそこの虫眼鏡取ってくれるか。はい、ありがとさん。どれどれ……、松枝はん……、あんた、これ家か？ 私には黒ゴマさん潰したようにしか見えしまへんわ。ようまぁこんな小さい家をたくさん描きはったなぁ」

「でも、やっぱりあれですねぇ〜、本職の画家さんだけあって上手ですねぇ」

「ほうかぁ？ そういうもんかいねぇ」

　この頃の私は目がよく見えなくなっていたこともあり、チョットボケも入ってきていたんでしょうなぁ、松枝のいうことも分かったような分からぬようなおかしな按配になってきてましてなぁ。

「松枝はん……、悪いけど押し入れから柳行李をだしてくれるか」

「はいはい、行李の中の絵ハガキが入ったお煎餅の箱ですやろ？ 」

「そうそう、はいありがとう」わたしはそう云うと箱を開けて中に直しておいたハガキを出して手に取りました。

　手にした虫眼鏡で一枚一枚の絵ハガキを眺めはじめたものでした。するとそばで見ていた松枝が云うのです。

「お義母さん、鉄さんの画って風景とか景色が多いなぁ…、まあ、季節の挨拶やから当たり前かもしれへんけど」と。

　わたしは云われて改めてまじまじとその絵ハガキを見ました。

　わたしはその鉄さんから送られて来た三十枚ほどの絵ハガキを手にしながら泣いてしまっていたのです。

「お義母はん、どうしはったんですか、具合でも悪いんちゃいますの？　　あきまへん、チョット横んなりはった方がええんちゃいます？」松枝は一生懸命に気にかけてくれましてな、一生懸命にわたしの背中をさすってくれてましてんけどな…。

「松枝はん……、鉄さんなぁ……、寂しいねん。あの人な寂しいんよ……」私はハガキを手にしたままオイオイと泣いてしまっていたのです。

　驚いたのは松枝だったでしょう。何も言わずに私の背中をポンポンと優しくはたき、さすってくれていました。
　鉄さんからのハガキに描かれた画のすべてに私は秘密を見つけたのです。

　そりゃぁねぇ、普通にご挨拶を交わすだけのご縁のお人でしたら私もそこまでは感じなかったかもしれまへんなぁ。
　せやけどね、鉄さんとは仏さんや観音様が取り持ってくれたご縁。わたしがもう少しシャンとしてたら店を松枝に任せたまま鉄さんの面倒を見に転がり込んでたかもしれまへんなぁ……。

◆

　むかぁしむかーしなぁ、私が尋常小学校から高等小学校に上がった年でしたから、そう一年生でしたやろか、せやから十歳の時でしたわ…。
「ぐーにーはん〜、ぐーにーはん、お千代のあだ名はぐーにーはん」

　ある日を境に、突然降って湧いたように私にあだ名が付けられましてん。最初は私も何のことかわかりしまへんでした。それが毎日毎日、来る日も来る日も云われるようになりましてなぁ。
ある日、学校から帰り祖母のウネに「おカァはんは？」と尋ねると買物行ってるいわはりましてなぁ、なんか私、急に寂しいなってお婆ちゃんの膝に突っ伏して泣いたんですわ。驚いたんですやろうなぁ「どしたん？ 学校でなんかあったか？」そう優しゅうに聞いてくれました。
　私は泣きながら言葉にしたものです。

「おばぁちゃん……、あんな、学校でなぁ、みんながぐーにーはん、ぐーにーはん云うねん。ぐーにーはんって、なんやろか？…」ほうしますとな、お婆ちゃんは大きな声で笑い出しましてん。私はなんやビックリしてしまいましてなぁ。
なんや面白い漫談か何かのことかもしれへん思うたぐらいでした。ほうするとお婆ちゃんは急に真面目な顔になると…。
「いいかお千代、今から云うことよう聞くんやで。これからなお千代が大きゅうなってくわな、するとな、いろんな知恵がついてくる。ほしてな、周りの人間達からかけられる言葉はもっと厳しゅうなる。言葉が無ければもっと厳しい、そりゃぁ恐ろしい態度を取られることもある。ええか、負けたらあかん。せやけどなおばあちゃんがいう負けたらあかんちゅうのは、喧嘩をせっちゅうこっちゃないで。大人の言葉にな臍を噛むいうてな、どうにもならない悔しさを顕した言葉があるんや」
「ほぞ？　ほぞってなんやの？」私がそう聞きますとなぁ、私のお腹のおへそをチョン

チョンとつくと「ここやがな、お臍さんや」というのでした。
「お千代、おまえさんは自分で自分のお臍を噛むことが出来ますかな。……そうや、できしまへんやろ。噛めない臍を噛みたくなるほどの悔しい気持ち。それを大人たちは臍を噛む云うてますのんや。でもなお千代。噛むのは臍やないで。唇や。それもなあんたの心の唇や。うちとこのお商売はなぁ、お金を借りてくれるお人がお客はんや。ええこと教えてやろか、お千代がなぁ大きゅうなった時にな、必ず必ず見たことあるお人が、ほれあの暖簾をかき分けて入ってくる。必ずや」そこまでを云うと首だけをしゃくり上げるようにお店の暖簾を見たのでした。
「おばぁちゃん、それは私の知っている人ちゅうこと？ 」

「そうや。同級生かもしれへん。年下のほれ…、なんちゅうたかいねぇ……、せやせやお里ちゃんかい。かもしれへん。どこの誰がいつお客はんになるかもしれへんのや。お千代…、人間の勝負処云うのはな突然来る。その時のために今は心の唇をグッと噛み締めて色んな知恵を溜めなはれや」そう云うて笑うのでした。
「わかった。わかったけどわからんのがな、ぐーにーはんってのはなんやの？」

「あぁ、それは質屋のこっちゃ。むかーしな、質屋云うもんは博打場のすぐそばにあってなぁ、博打で負けて借金こさえた人や、もうひと勝負したろおもた人たちが、身ぐるみ預けていったところやったんやなぁ。博打場ではな、五という数字をグいうてな、ほして二は、二のままや。ほしてな、奇数を半、偶数を丁いうて二つのサイコロや花札でな、出た数字の丁半を決めるいう博打があった。五と二を足すと七やろ、質屋の七に通じますやろ。ほして七は半の目になる。せやからグーニーハンなんやなぁ……。昔はな、チョイとイカレタ博打うちは質屋をグニ屋いうて呼んでましたからなぁ。にしてもこれまた、こまっしゃくれたガキやなぁ」祖母はそういうと声をたてて笑うのでした。
　次の日、私が学校へ行くといつもの子達が徒党を組んで「ぐーにーはん」と私のあだ名を呼ぶのでした。
　そこへなぁ、いつもは教室でもひとりでおる男の子が現れるやいなや、三人の男の子たちを一瞬でけり倒してしまったのです。
　私はその光景にあっけにとられ何も言うことが出来ずただ眺めることしかできしまへんでした。
　その日の午後の休み時間のことでしたか、私が教室に戻ってみると男の子二人が言い合いをしてましてん。言い合いしてる一人は、私を助けてくれた男の子でした。もう一人方は町の相談役をしている家の小倅でした。
「偉そうなことぬかすんやったらな、家の家賃払ってからにしてもらおうか」

「お前になんの関係がある！ 親のこっちゃないかい。わしに関係あるかい！」そう言い合っていたのでした。どうやら私を助けてくれた男の子の家は窮していたようであり、教室の中でも何となくそんな話は出ていましたが、その話を聞きつけた小倅が朝の仕返しとばかりにみんなのいる前で窮状を暴露してしまったんですなぁ。
　そうなのです。朝蹴り飛ばされた中にはその小倅も入ってましてん。

それからもその男の子は教室で一人でいることが多かったようで、気になり時折みると、いつも教室の窓のそとに広がる空を眺めてはってねぇ…。雨の日も晴れの日もでしたなぁ。
　あれから二十年が過ぎたころですやろか。暖簾を…、そう、こう肩をすぼませ首を前に突き出してくぐるお客はんがいらっしゃいましてなぁ。
時計をひとつポンと番頭席にぞんざいに放らはると「二千円貸してくれ」云いはります。品物をみさしてもらいましてな「七百円」しか貸せませんいうと、大きな舌打ちをするとそれでいい云わはりましてん。
「ほな、何か名前の分かるもん出してください」私が云うて出さはった身分証をみて驚きました。町の顔役・相談役の小倅でしてんなぁ。
　向こうは知ってか知らずか、私の顔など一切みいしまへんでした。

お金を渡すと肩で暖簾を切るように、颯爽とお店を出ていかはりました。

【おばぁちゃん、あんたは偉いお人やったなぁ……、来ましたで、来よりましたがなぁ】私は一人そう笑ったものです。

　私は鉄さんを見ていると一人でいたあの男の子のことを時折思い出したものでした。どうしてはるやら…、良い一生を送ったであろうことを観音さんに祈るのでした。

◆

　鉄さんから送られて来る絵手紙の秘密、それはどのハガキにも一人の人間も描かれていなかったことだったのです。
　人が住んでいる集落や、田畑が描かれたもの、そして山間の小径、冬の雪道…。どの画にも人が一人も描かれていなかったのです。寂しいんやろうなぁ。苦しいんやろうなぁ。なんて寂しさを抱えたお人なんやろう。わたしはそう泣いたものでした。
　その後、鉄さんの画集が発売になると聞き、わたしはその画集を買わしてもらいましてんけどな、そりゃぁもう小さな字で説明が埋め尽くされていましたから松枝に読んでもらいました。すると…「立派な画や大作を描こうとは思わない。寂しいんだから寂しい画を描きたい」と鉄さんの言葉が載っていたのです。
「お義母さん、鉄さん寂しかったんですなぁ」松枝がそう言葉にしました。

「寂しかったんとちゃうねん、あの人は今でもずっと寂しいままやねん」そういうと私はまた声をあげてオイオイ泣いたものでした。

その五　お千代の秘密

ねぇ〜観音はん。どんなお人かて墓までもってゆくことの一つや二つありますやろ？ ほれが大きくて重くて苦しゅうて……あんさんも色々忙しいやろけど、些かお迎え遅すぎやしまへんか？ お迎え忘れてしもうてるんとちゃいますの？ 待ちくたびれましたがな。

　鉄さんの秘密はな、いうたかて寂しさに沈湎 (ちんめん) してはってきただけのことですやろなぁ。まじめなお人やから、ましてお坊さんの検定試験をとったお人。人の道を踏み外すようなことはしてませんやろ。せやけどね、お人のことっちゅうもんはようよう聞いてみにゃ分からんもの。聞いてもしまへんのにベラベラ自分から喋るお人もおれば、聞かれてはじめて重い口を開くお人もいてはるように、お人も色々ちゅうことですねんけどね。私の場合はねぇ……。お商売柄、毎日毎日大勢のお客はんが来てましたやろ〜。それがみんな金策に来てはるお人ばかり。小さなころからお人の表裏ちゅうもんを目の当たりにしてきました。お婆ちゃんを「うねさんは観音はんみたいな人や」ちゅうて崇め奉っていたお客はんが一歩外へ出ますと業肚 (ごうはら) さらして「あのウネだきゃほんまに〜」なんていうことは日常茶飯事でしたがな。

　一度、お婆ちゃんに云うたことがあります。

「お婆ちゃん、あんなぁ〜このあいだ来てた闇市のおばちゃんおるやろ、うん、そうやぁ。あのおばちゃんな、ウネはんはほんまにケチやでいうて他所のおばちゃんに話してはるの聞いてしもうたんや。なんであんなこと云うんやろ……せやかて、あのおばちゃん、うっとこ来てお婆ちゃんを観音はん云うてはったやん」と。
「お千代な、お人はな都合を抱えながら生きてますのんや。その都合はなこのご時世お財布の重さで変わるもんなんやねぇ〜。お千代の帯に結んだ巾着袋さんな〜その中にはお飴さんがはいってますやろ？ 沢山入っているときにはお友達にあげますな。少ししか入ってない時はどうします？」
「帯と着物の間にかくすわぁ」

「それがお人の都合っちゅうもんや。うちがな闇市でまけてくれと云わへんのもうちのお商売の都合や。残念やけどな、損得勘定がお人の都合を左右する。でもなお千代、お釈迦さんのな善因善果、悪因悪果、自因自果ちゅう教えを守ってはったらな、人の道は踏み外さんで済むからな忘れたらあかんで。ほれと、一つだけおばあちゃんと約束や」

「お婆ちゃんとの約束多なってきたからな、うち、ひとつひとつ書いてるねん、チョット待ってな……はい。ええよ」
「お千代は偉いなぁ……お婆ちゃんはもう云うたそばから忘れるのに。ええか、これからはな、外で大人が話してはることはお千代ひとりのヒミツにしなはれ。お母ちゃんやお父ちゃんにも云うてはいかん。もしもなどうしても人に云いとうなったらな、仏壇に向こうて話しなはれ。口は禍の元。うちにとってはご飯の元や。これはな、お千代がおおきゅうなったときのための知恵や。もしもお千代に悪口を聞かれたとわかったら、あの闇市のおばちゃん、うっとこのお店に来れんくなるやろ？ ほしたら、だぁれも得しまへんなぁ〜見ざる云わざる聞かざるちゅう諺がありますねんけどな上手をいうたもんやで、そういうこっちゃ」

せやからやろなぁ〜妙に世間擦れした大人びた子供に育ってしまったのは。男はんを好きになったのも早かったなぁ。それも随分歳の違うお人でしたんやけどな。
ほれが不思議な縁でしてなぁ〜鉄さんにも話したことがあるんですけどな、鉄さんも吃驚してはりましてなぁ。ええ想い出ですわ……。

◆

あれは私が九つか十ぐらいの時でしたなぁ〜せやから確か明治は十七年の初夏のことですやろ。例によって私やお里ちゃん、仲良しのお友達と夢殿さんの境内で毬つきをして遊んでたときのこと。
夢殿はんのお堂前が俄に賑やかとなりだしましてな、何やら修業のお坊様たちや洋風の服を着はった人たちが押し問答をしてはる様子が伝わってきました。お坊様たちは徒党を組み堂前に人垣を作ってはりましてんけど、ほれがなみんなして盛んに「祟り」の言葉を口にしていたものやから、私達は驚き顔を見合わせ遊びの手を止め、遠巻きに眺めみたものでした。
「お千代姉ちゃん…　たたりやて。怖いなぁ、誰ぞなんぞしたんやろか」

「わからんねぇ〜でもなぁ、ほんまに祟りやったら官長はんもいてはるやろしなぁ」
「せやねぇ… 」

「それとな、なんや外国のお人が二人ほどいてはるやろ？ ほれと若い日本の男の人」
「……お千代姉ちゃん、うちチョット様子見てくるわ」云うが早いかお里は手にしていた毬を人垣めがけて蹴り出すとヤーヤー云いもって走り出してしまいました。お里は顔馴染みの修行僧の後ろにまわり込むと袖を引いて話しはじめました。手をな、こうして菱餅さんの様に合わせはって内緒話をするように。程なくして帰ってきたお里がみなに

報告したところでは、どうやらこの『夢殿』を開けようとしているらしいということでした。嘘か真 (まこと) か夢殿はんは二百数十年に渡って開けられることが無かったと伝わってましたから、それはそれは一大事 (いちだいじ)。お里は皆に告げると「うち、お母ちゃんに知らせてくる」て、言葉も終わらぬ間 (ま) に駆け出していました。ひとり、また一人と「うちも、うちも」云いもってその場を離れてゆくのですが、私はなにか事の成り行きを見守りたい衝動にも駆られましてな……、あと外人さんと若い日本人の男の人に云いようのない興味をおぼえ動けなくなっていたのです。
【祟りちゅうて騒いではるのは…きっとあの人たちが開けはるからなんやろなぁ】

さぞかし錆びついてはったであろう錠前をガチャリガチャリと解錠しようとする音がここまで響いてきます。扉もガタガタと震えてましてん。修行の僧のひとりが「どうかお待ちください」と懇願してはったものの程なくすると鍵が解かれ扉が開けられました。寺の僧の多くは祟りを畏れ開扉の前にはおりませんでな。

二人の外国人さんと一人の日本の若い男の人は開け放たれた扉口で靴を脱ぎ、草履を取り出し履きはじめはりました。
【あゝ…入るんやわぁ……】そう考える間もなく三人の男衆は行燈を手に堂内に歩みを進めはりました。
中には一人ぐらいは居るものなんですやろなぁ。物怖 (ものおじ) せんと怖いもの見たさが勝った者が。
「諦信殿、諦信殿、どうか、それ以上は……　」扉の外から声を潜めて押し留めている風やったものの、その声は震え今にも泣きだしそうな具合をみせてましてん。
【いま諦信ていわはったわ。あの日本の若い人もお坊さまなんやろか】

外国の人が何やら喋りはじめたようですが、当たり前のようにさっぱり要領を得ませんでしてなぁ。ほしたらなんや日本の若い男の人が話しはじめましてな、「諦信先生は祟りの心配はなく雷も火も心配ないので堂内へお進みくださいと申しています」云うやないの。
ほりゃぁ吃驚しますがな。諦信いう法名を名乗ってはったんは外国のお人やったんです。
この外人さんが日本政府によってアメリカから招かれたアーネスト・フェノロサであり、日本の仏教と信仰、美術・芸術を守るため東奔西走してはったちゅうことは後 (あと) になって知ったんやけどね。なんでも三井寺法明院は桜井敬徳いう偉い和尚さまから諦信ちゅう法名を授かり、改宗まで果たしたちゅうことは後々にあの日本の若い男の人、岡倉天心はんに教えてもらいましてなぁ。なんでも狩野派ちゅう絵描き一派があるらしいんやけど、そこの偉い狩野永悳 (かのうえいとく) はんから狩野永探理信 (かのうえいたんりしん) ちゅう画号を持つことも許されたお人やっちゅうねんからどれほど才長 (さいた) けた外人さんでしたんやろ。

三人の闖入者 (ちんにゅうしゃ) は仏殿の裏へと回り込むと身の丈七尺に届こうという長物包 (ながものつつ) みを眺めはじめましてな、何やらヒソヒソとやってはりましてんけど、「諦信殿、どうかお待ちください。どうかそれだけは、お留まりください」いうて寺の修行の僧が声かけます。

【何が出てきますねんやろ】私は心臓が早鐘のように打ちだしていることに驚きました。

厳重に木綿布で包まれてはりましたなぁ。所々カビがまわってはってなぁ、黒ずんでましてんけど、二百数十年ですやろ…。うっとこの柳行李はんより長持ちしてはるわぁ。付喪神 (つくもがみ) さんもいてはるんやろかぁ〜思うたもの。いつの間にか数人の修業の僧たちが扉口からお堂内に顔をいれはりましてなぁ、一様に宝珠を手に合掌し観音経を唱えてはりました。修行の僧たちは多様を見せはりました。泣く者。空を見上げ天変地変に怯えるもの。握りしめた拳を腿の前で組んでいたのは怒りなんですやろなぁ。修行仲間の僧の袖を掴み引っ張る者もいてはりました。数人の坊主さんが伽藍向こうで剃髪頭 (ていはつあたま) を寄せ合って何やらヒソヒソとしてはると眺め観れば、懐から金を取り出し、一人の坊主さんに渡してはりましてな〜どうやらあの坊主さんが勝ったんですやろな。二百数十年という歳月はそれぞれの中、始末のつけようもなく多様を見せるに至ったのですやろねぇ。

お堂前の立ち合い僧たちの読む経 (きょう) がひと際大きく響くと、諦信と呼ばれた外人はんがその場に膝をつき手を合わせるや、他の二人もそれに倣い膝をつき手を合わせ一様に首 (こうべ) を垂れてはりました。救世観音菩薩立像 (くぜかんのんぼさつりゅうぞう) が二百数十年の時を経 (へ) て、神々 (こうごう) しい御姿を顕された瞬間でした。後に、この者たちの働きが奏功を見せ観音はんは修復されその後この夢殿にお帰りになられたのです。私もなぁ気が付いたら膝ついて手を合わせお祈りしてましたなぁ。

結局、地震もありません、雷もおちませんでした。火が出ることもありまへんでした。祟りはどこ行きはったんですやろか。きっと観音はんもお陽さん拝めて喜んではったんかもしれまへんなぁ。我に返ってみれば私は事の成り行きを最後までみてましてんけどな。このときです。外国のお人達が表に出て来はるとうちのとこまで歩いて来はってね、うちの前で小さくかがみはるとポケットから綺麗な紙に包まれたものを私の手に握らせましてな。美しい顔立ちの外人さんでした。すると天心はんが「お嬢ちゃん。いいものを貰いましたねぇ〜それはね、キャンディーという外国の飴ですよ。フルーツフレーバーの美味しい飴」

「フルーツフレーバー？」

「そう。果物の匂いと味がするキャンディーだね。僕はこの紫色のキャンディーが好きなんだ」天心さんは私の手を左手で受けはると右手の指先でその紫色した包み紙をつまんでみせました。あのな、こんな若いお兄さんに手なんか触られたの初めてですやろ。一瞬にして顔が湯たんぽはんのようにあっつうなりましてなぁ。この日からや。しばらくは天心はん、天心はんいうて追いかけまわしましてなぁ、これが私の初恋でしてんなぁ。

後 (のち) に岡倉天心はんが校長をつとめる美術学校が東京にできたことは風の便りで

きいたんですけどな、その話を鉄さんにしたんやけど〜ほたら鉄さんはその学校に通ってはったいうやないの。驚きましてなぁ〜なんや急にはずかしゅうなってしもうて鉄さんの前で顔を紅 (あこう) したものです。

　うちがねぇ〜天心はんと仲よう話してるのをみてな、快 (こころよ) く思わんお人もおってなぁ。うちがお喋りしてると必ず割って入りよるんですわ。ほしてはあのちんまい手で菱餅つくりはっての内緒話。ほんまにいけずな子でしたわ。
　うちのな秘密のひとつはな、あのときもろうたキャンディーが今でも柳行李の中にある、小さな茶箱の中に大切になおしてることですねん。天心はんがつまみはった紫色した葡萄のお飴さんをな……。あとのヒミツはな、あの世まで持って行かにゃなりまへんねん。
　ほろ苦い想い出もあります。焼け火箸を押し付けられたような想い出もあります。甘酸っぱいものやらケッタクソ悪いものもありますねんけどな〜　ここまで生きてきますとな、どんな思い出もみんな有り難いものに思えてきますねんて。せやけどなぁ、業火に焼かれるような想い出だけは苦しいものでしてな、これだけは誰にもわかりしまへんね。ほしてな、きっとな、わかってもらおうと思うてはあきまへんね。
お人に云いとうなったらな、観音はんに聞いてもらうほかにあらしまへんねん。

それでも云いとうなったらな……、小説家にでもなってみまひょうかねぇ。

その六　ことわり

なんですやろなぁ、なんかねぇ色んな声が聞こえてきますねん……。とおーくのほうなんですやろなぁ。これまたおかしな塩梅になってきましたなぁ〜、たしか私、画を鑑ていたはずなんやけどなぁ。ベンチに座らしてもろうて。
　いろんな声が「お千代はん、お千代さん、お千代ちゃん」いうて呼んではることはわかりますねんけどお顔がみえへんよって。なんやの、お里の声もしてるやないの……、フフッ、お里ちゃんあんたのことは声を聞いただけで分かるわ。お嫁さんたちには優しくしてやりや、せやないとあんた、閻魔さんにいじめられるで。
「お義母さん、お義母はん……、しっかりしてください、お義母はん……」松枝でっしゃろうなぁ、私のスポンのベルトを緩めようとでもしてるんやろうけど、不器用なこでしてなぁ。なんやベルトが取れしまへんのかいな……、松枝はん、あんまりほうして振ると、お腹の皮が擦れて痛いですやろ……。あちゃあぁぁ　あかんかぁ……痛ないわぁ。

ん？　なんて、松枝はん、なんていいはったん？　鉄さん？

こりゃあかん、あきまへん。おきにゃぁ……、松枝はん、あんたうちのズボンどうしてくれはりましてん、チャンとズボンはかせてますやろなぁ。

「お千代さん……、わたしですよ、鉄です。画、観てくれましたか？　いい画でしたか。扉口の明かりはね千代さん。あれはあなたに貰った明かりなんですよ」
微かに見えていたはずの鉄さんのお顔が次第に暗がりに堕ちてゆくと、周りの声も聞こえんようになりましてん。
ほうしましたらな、目の前がぱぁぁっと明るくなったとおもたら……、その光の中に観音さんがおわしてなぁ、こういいよる。
「お千代、進むとき来たり」と。

「なにを今更この期に及んで…何処に進みますねんな。観音はん何処であぶら売ってはりましてん。……フフフありがとうなぁ〜 やっと逝けますなぁ」

風も吹くなり

雲も光るなり

生きている幸福は

波間の鴎の如く縹渺と漂ひ

生きている幸福は

あなたも知っている

私もよく知っている

花のいのちはみじかくて

苦しきことのみ多かれど

風も吹くなり　雲も光るなり。

【天上天下唯我独尊、善因善果、悪因悪果、自因自果】云うてみれば帳尻ちゅうことなんですやろねぇ。与えられた命を生きるちゅうのんは、身の丈に応じた禅問答みたいなもんやからね。

ところで観音様、訊き難い話しやけどね〜あんさん幾つにならはったんかえ、えっ？満か数えかて……そな細かいこと気にしますかいな、あの世の理 (ことわり) で」

了

小説 夢 殿「秋 涙」完全版　令和六年六月九日　脱稿

小説 夢殿「秋涙」付録作品『なごり藤』

小説夢殿・秋涙・付録作品

なごり藤

茉莉花の
にほいににたり
藤の花
なごりつきえぬ
似たものどうし

里

令和六年六月十四日

著　飛鳥世一

なごり藤　表紙.jpg

『なごり藤』

昭和六年六月三日。水曜日。

今日はな友引でしてん。朝からお母ちゃんが五月蠅うてなぁ次から次に用事を云いつけはるねん。躰はひとつやっちゅうねん。どの道嫁の文子に手伝わせるちゅうたかて、とどのつまりの悪者はうちになるやろし。どうせ悪者になるぐらいやったらええねん。塩梅の良 (い) いところで文子にまかせて遊びに行ったろうなりますやんか。今日はどこ行ったりまひょ…

■

「文子はん…… 文子 (ふみこ) はん〜あのなぁ、大女将がな店横の倉庫ありまっしゃろ、ほの中を片付けて欲しい云わはってますねん。あんた悪いけどチョット手伝ってくれるか。二人でやれば早いですやろ。……あたり前やがな、あんた一人にやらせますかいな。おや、あんたなんやのその蟀谷 (こめかみ)…どうしはったん？ 夕べか？ ほんなところにお灸すえたって、あんた、火傷でもしはったらどうしますねんな。紅 (あこ) うなってますがな。頭痛 (あたまいた) いてか、ほりゃぁ気の毒なこっちゃ。片付けおわたらなゆっくり寝てなはれ。大女将にはうちから云うとくし。ほなチャッチャやりまひょか」

■

… 思うてたんやけど、文子がなんや頭が痛い云いはってなぁ〜なんぼうちかて… 、いやいや、ほないなことできますかいな〜そうおもうてな一緒にやりましたがなぁ片付け。

まぁ〜要領の悪い子でしてなぁ柳行李を持たせれば腐った行李の底は抜ける、鍬を片付けさせれば吾 (わが) の足に落とす。鼠が走り回れば腰抜かす。嫁に来てから何年たってはりますねん。

「おかぁはん、古道具屋て何するところですのん？……ほな質屋さんみたいなもんやろね」文子が嫁に来るちゅうて決まったときに最初に聞かれたことがこれでしてな。云うてええことと悪いことちゅうのんがわかりしまへんねんなぁ。グニ屋と比べよるちゅんは何事かちゅうて怒りましたがな。こんときな、うちもう一つ癇に障ったことがありましてな、質屋をさん付けにしてからに古道具屋にはさん付けせえへんかったんですわ。うちな息子に云いましてん。「ええか、古かろうが新しかろうが道具は道具や。文子はんにちゃんと教えなはれ。うちとこのお商売を云うときは道具屋さん、道具屋はんちゅうて云うように」てな。
なんやこの日記も小言と愚痴ばっかりになってきましたがな。

　今日は片付けが終わってからなお千代姉ちゃんところ行きましてな、一緒に春日神社はんに詣でましてんけどな終わりかけの藤花がそれはそれは美 (うつく) しゅうに咲いてましてなぁ……

■

「……ん？ 歩くのはやいて？ お千代姉ちゃんが遅いだけやんか〜大体お姉ちゃんは昔からなんでも遅うてな、早いのんは男はんに手ェだすことだけでしたやないの (笑) あのチンマイころからやから、うちは敵 (かな) わんわぁおもて、いつもお姉ちゃんが飽きはるの待ってましたがな。……お千代姉ちゃんは二言目にはうちの内緒話のこと云いますねんなぁ〜ほぉかぁ……お姉ちゃんに内緒話したことありまへんでしたかぁ〜またぁ、そんなイケず云いはってからに」

■

むかし話をしもってな歩く道ちゅうのも良いもんでしてなぁ〜道端で首を垂れる菜花が初夏の風にそよぎますねん。

水無月に

ともにあるきて

祈るみち

無病息災　夏越しの祓

歩きはるのが遅いお人と歩く道もかけがえのない道に思えてきます。

…… あんなぁ〜いつもの見慣れた景色が違って見えますねん… 。

■

「ほうやで……何を云うてますねん。春日神社はんの式年遷宮のときの正遷宮の大祭は去年の十一月十日でしたやないの。一緒に行ったやないのお姉ちゃんと。……そうですねんて、あんときなお姉ちゃんお神輿担いではった男はんのお尻ばかりみてはって (笑) なんて云うたか覚えてはります？　　知らん？ 都合が悪うなればボケたふりしますねんからかなわんわぁ。あんなよう聞いてなはれや。みんないいお尻してはるなぁ〜ももひざ三年しり八年〜 云いはったんよ。忘れますかいな……えっ？ うちがかえ？ そんなこと云いますかいな…なんやのそれ……お千代姉ちゃんあんたもしっかり覚えてはるやないの……云うてるまに着きましたなぁ。あゝええ藤花さんやねぇ〜　あそこに座って休みまひょ。お抹茶さん頼んできますわ」

■

　春日神社境内の藤棚はんはなごりをみせてましてなぁ。盛りはおわりちゅうことでしたんやろなぁ。うちらもボチボチ盛りは終わりなんかもしれまへんけどな、名残 (なごり) には名残の楽しみ方であり美しさちゅうもんがありましてな〜

茉莉花 (まつりか) の

にほいににたり

藤の花

なごりつきえぬ　似たものどうし

ほうやったわ〜 文子の頭痛 (あたまいた) は治ったんやろか。

了

令和六年六月十四日　　脱稿

エセー　不染鉄「夢殿」とわたし

不染鉄「夢殿」とわたし

痺れた。他に、我が魂の揺れを的確に表現するに足る言葉を紡ぎあげることは出来まい。そう感じられるほどの作品だった。

二千十九年の十一月。

わたしが初めて不染鉄という画家の存在を見知ったタイミングであり、わたしが小説というものを真剣に書いてみようと考えたタイミングでもある。事実、この日から数日後に「夢殿・第一形態」を書き上げている。初稿は原稿用紙五枚に足りない程度のものだった。今回、この『夢殿』作品集には第一形態を綴じることは見送った。分かりやすい話し、綴じるに値せずとの判断が働いたということである。ただ、２０１９年のブログでも書いていることだが、色々な書き方が出来るようにこの夢殿を今後も書いてみたいという思いは綴っている。
その後、延べ三本ほどの夢殿を書くに至っている。

さて、では思い出と共にチョット振り返ってみよう。

■「夢殿第二形態」は第一形態の完成度を少しだけ向上させ、使用する言葉の質感を上積みさせることが出来たと感じている。
　とある小説の勉強講座で、読んだ若者からの感想で言葉の使い方がハードボイルドっぽく感じると云われたことはある意味その後の気付きとして我が脳裏に刻まれており、感謝しなければならないと感じている。有り難うございます。
　また、他方の講座の先生から頂戴したお褒めの言葉は未だに書くことに対するモチベーションとして強くわたしを支えてくれている。

■「夢殿第三形態・泣くひと笑うひと」は、その背景に歴史時代小説の理論を軽く滲ませ、ジャパニーズファンタジーの雰囲気に仕上げた一作であり、この辺からなんとなくではあるものの、わたしの抱く方向性へと近づくことが出来始めたようにも思えた。
　チョット失礼な物言いになることをご寛容願いたい。M先生の講座の講評では「おっさん、読めんのかい」と感じたことは否めない。これはわたしの作品に限らず、他の生徒さんたちの作品に対する講評姿勢についても云えたことなので、なんだか丁寧さが感じられない講評となったことは覚えている。
　光〇社のシ〇ートショー〇の宝〇に応募したのだが、アチラの会社さんのズルっこいやり口には最後の最後まで閉口させられた。最後の噛ませ犬、なんだよあれ。
　これとあれと比べさしちゃ気の毒でしょう。どっちが気の毒かは書かないけどさ。大分無理云ったんじゃないの?
あれで嫌いになっちゃった。あの会社。

■「夢殿第四形態・秋涙」は本来原稿用紙百四十枚を目標として書き上げた作品だったが、わたしの今の能力において百四十枚という原稿枚数は荷が勝ち過ぎていたようである。
小説としては無駄にダラダラとし、塵埃に塗れ壊れたものを修正するだけの能力は無かったことから、大幅に原稿を落とし五十枚程度のものへとまとめ完成をみた。結果としての出来は良いものとなったと感じており、ある程度の年齢層には読んでいただける物とすることは出来たと考えている。
　またもやM先生のお話しになるが事前に送られてくる講評原稿に「しかし、関心するやら呆れるやら……云々」の言葉を用い講評して頂けたのだが、わたしはこの言葉を許せなかったのである。
　事前の前振りがあった。第一回目のことである。

『小説書きは嘘書きが云々』わたしはこの一回目の言葉に違和感を強く持った。これが無ければ「呆れる」に対して食って掛かることは無かっただろうし、最大級の誉め言葉として受け入れる余白は残しておけたのだが、金とって教えるのであれば、呆れないものを書けるように指導したまえという頑なさが表に出てしまった。
　懐かしい思い出である。その節は、失礼いたしました。

　本稿は、何故わたしがここまで「夢殿」という画に執着をみせ、何がここまで何本も

「夢殿」を書かせるに駆り立てたであろうかという一端にフォーカスして書き進めてみようと考えている。
　一つの分かりやすい例として挙げるのであれば、フィンセント・ファン・ゴッホの「ひまわり」であり、モネの「睡蓮」を思い出して頂ければ良いのかもしれない。同じテーマ、同じモチーフの作品を彼らは描き続けていた。例えば日本画家であれば伊東深水の美人画なども同じ系統の作品を描き続けていたことは知られたところであろう。

　わたしの美に対する考え方の一つを紹介させて頂くことをご寛容頂くのなら、美しい絵画には時間が閉じ込められている～というものがある。例えば遠近法だが、これは最も簡便に時間の過去現在未来を顕した姿であり、画家は遠近を使って時間の移ろいであり、モチーフの発信する時間を表現しようとするのである。
　そういう意味においては「遠近」は原始的時間の単位のひとつということが云えるのではないだろうか。

　不染鉄の手による夢殿を眺め観ると、この画家の類稀な才能の片りんに触れることが出来る。遠近は、概ね奥行きで顕されるものであり、奥行きの処理の仕方、空間処理の仕方に画家の腕の冴えを見出すことが出来るのだが、不染鉄の場合、奥行きだけではなく「高低」の支配能力に長けていることがわかる。
　夢殿という画。あの位置から、あの目線から見える夢殿が結ぶ像はあの画のようになることは無い。観得るはずのない画姿を「高低」を支配することによって観る者の足元をぐらつかせているのである。
　どこか、この世のものならざる気配が感じられる理由だろう。

　わたしがあの画をはじめて見たときに、「この画自体が信仰の対象となっても不思議ではない」と紹介しているが、不染鉄という画家、そういう画を描く画家である。

　では、小説としてそういう世界観を踏襲することが出来たのかと問われたならばどうなのだろう。
そこは寧ろ読み手に判断を委ねるべきではないだろうか。

「何やら、足元がグラグラするな」と感じて頂ければ概ね上手く行ったのかもしれない。
　どこまで行っても趣味嗜好の話しである。

画家がタイトルはつけてもテーマを自ら語らないように、小説家も自らテーマを語る様ではいつまでたっても一人前にはなれまい。
　読み手の皆さんに感じたことをお話し頂けるように為ってなんとか小説書きとして名乗れるようになるのではないだろうか。どの道、わたしの様な未熟者が云々できる話で

はない。

　今回、この作品集にはコメントが入れられるようにしておいた。

もしも良ければコメントを入れて頂くのも有難い。

作品に関してであれば、どの様なものでも有難い。よろしければ一筆入れてお帰り頂きたい。
また、気に入って頂けたら、ダウンロードして頂ければ飛び上がって喜ぶ。是非とも喜ばせて欲しい。

尚、今後「夢殿」関連作品を書いた際にはここに併せて綴じさせていただくこととする。

YUME-DONO ANTHOLOGY Written by YOICHI AZUKA

著　　飛鳥世一

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社